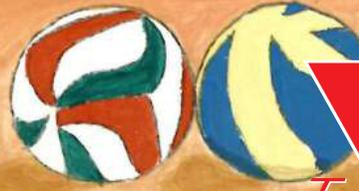
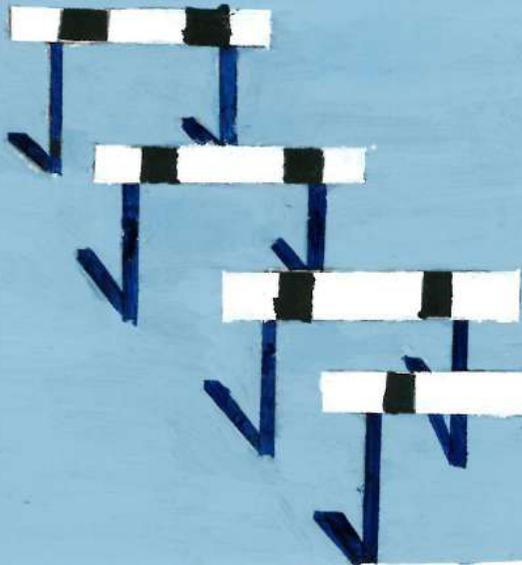


令和4年度

第19回 東京都高等学校体育連盟
研究大会 紀要



Tokyo



期日 令和5年2月18日(土)
会場 東京都庁第一本庁舎5階
大会議室
主催 東京都高等学校体育連盟

主管 東京都高等学校体育連盟研究部
東京都高体連ホームページ

<http://www.tokyo-kotairen.gr.jp>

令和4年度 第19回 東京都高等学校体育連盟 研究大会

表紙 デザイン協力

東京都立日本橋高等学校

令和4年度

第19回 東京都高等学校体育連盟研究大会



◇ 令和5年2月18日(土) 於 東京都庁第一本庁舎5階 大会議室
16時00分～17時55分 (15時30分 受付開始)

【講演】「体罰根絶に向けた指導法」～ペップトーク～

講師 ^{ほり}堀 ^{としつぐ}寿次 (日本ペップトーク普及協会)

【プロフィール】

大分県出身 秋田県秋田市在住

菅公学生服株式会社にて、制服・体育着メーカーの営業として活動。

学校の生徒、先生、保護者様に何ができるかを提供し続け、ペップトーク

に出会う。授業や部活でペップトークが広がるように、関東エリアを中心に講演中。

子どもたちに言葉の力でワクワクに溢れた学生生活を送ってほしいと願っています。

【主な経歴】

2007年 大阪府立大学経済学部 卒業

2007年 尾崎商事株式会社(のち菅公学生服株式会社に社名変更)開発本部にて商品企画を担当

2013年 菅公学生服株式会社 関東スポーツ営業部 担当エリア 神奈川県・東京都

2021年 秋田菅公学生服株式会社 営業部 部長

【その他講演・セミナー実績】

中学校・高校での【制服着こなしセミナー：60分程度の講演会】

アンガーマネジメント ファシリテーター【怒りのコントロールの基礎】など

【書籍】『スクール・ペップトーク実践ワーク集』学事出版 2019年4月出版

【全国高体連研究大会 報告】

<競技力向上> 森 政憲 (桐朋高等学校 サッカー専門部)

<健康と安全> 秋月 隼 (都立 美原高等学校 弓道専門部)

<部活動の活性化> 田中 隆晴 (都立 保谷高等学校 サッカー専門部)

<課題研究> 田中 康之 (都立 松が谷高等学校 サッカー専門部)

【研究発表】第一分科会「東京テクニカルスタディーグループ(TSG)の取り組み」

石部 元太 (都立 江戸川高等学校定時制 サッカー専門部)

大原 康裕 (都立 多摩高等学校 サッカー専門部)

第二分科会「コロナ禍の部活動 ～工夫と変化の調査～」

堀越 和彦 (日本学園高等学校 自転車競技専門部)

第三分科会「サッカー審判員の育成と環境について」

杉本 直志 (杉並学院高等学校 サッカー専門部)

主 催 東京都高等学校体育連盟

主 管 東京都高等学校体育連盟研究部

<http://www.tokyo-kotairin.gr.jp>

参 加 者 東京都高等学校体育連盟加盟校の体育・スポーツ指導者

東京都高等学校の部活動に興味関心を持つ指導者・研究者・学生

参加申込先 〒186-0004 東京都国立市中3-1-10

桐朋高等学校内 森政憲 宛

TEL 042-577-2171 FAX 042-574-9898

(専門部一括・個人申込共)

各専門部に所属されている先生方は、専門部研究部から申し込み、ご連絡ください。

目次

あいさつ	1
東京都高等学校体育連盟会長 奥秋 將史	
大会役員	2
開催要項	3
講演	5
「体罰根絶に向けた指導法」～ペップトーク～	
日本ペップトーク普及協会 堀 寿次	
研究発表	13
第一分科会「東京テクニカルスタディーグループ（TSG）の取り組み」	
石部 元太（都立 江戸川高等学校定時制 サッカー専門部）	
大原 康裕（都立 多摩高等学校 サッカー専門部）	
第二分科会「コロナ禍の部活動～工夫と変化の調査～」	
堀越 和彦（日本学園高等学校 自転車競技専門部）	
第三分科会「サッカー審判員の育成と環境について」	
杉本 直志（杉並学院高等学校 サッカー専門部）	
研究部 規約	31
研究部 組織と名簿	34
研究部 調査用紙	35
「令和4年度 第57回全国高等学校体育連盟 研究大会紀要」（抜粋）	37



学校教育の一環としての部活動

東京都高等学校体育連盟

会 長 奥 秋 将 史

新型コロナウイルス感染症の第8波の急激な感染拡大の影響を受ける中、東京都高等学校体育連盟の本部役員及び研究部員は令和5年1月12日・13日に長野県で開催された第57回全国高等学校体育連盟研究大会参加しました。また、令和5年2月18日、同日に実施する予定の令和4年度優秀校・優秀選手の表彰状授与式及び第19回東京都高等学校体育連盟研究大会は、会場を新たに東京都庁第一本庁舎5階大会議室において実施される運びとなりました。今年も研究部を中心に各競技専門部の皆様のご協力と関係者の方々のご支援をいただいて東京都の研究活動に取り組みました。

本連盟は、「競技力向上」と「研究」を両輪と捉えて活動しています。この研究大会は、東京都高等学校体育連盟に加盟する各専門部の体育・スポーツ指導者の資質向上を図ることを目的としています。今年度も、「競技力向上」「健康と安全」「部活動の活性化」の3分科会からそれぞれのテーマについて発表が行われる形式となっています。これらの研究発表などは高等学校教育の一環としての体育・スポーツの振興発展に資するものとなっていくためにも可能な方法で東京都に還元したいと思います。

さて、昨年夏、令和4年度全国高等学校総合体育大会「躍動の青い力 四国総体 2022」が、徳島・香川・愛媛・高知・和歌山5県のご協力のもとに有観客で開催される運びとなりました。

一方では、スポーツ庁から運動部活動の地域移行に関する検討会議の提言が示され、昨年夏に地域運動部活動推進事業は令和5年からの3年間「改革推進期間」として、主に公立中学校において、休日の運動部活動から段階的な地域移行していくこととする提言がまとめられました。提言の中では、「公立及び国立の高等学校については、義務教育を修了し進路選択した高校生などが自らの意思で選択している実態等があるが、各校の実情に応じて改善に取り組むことが望ましい。また、私立学校においても、学校等の実情に応じて適切な指導体制の構築に取り組むことが望ましい。」とされました。その他高体連が取り組むべき課題には体罰根絶、危機管理における健康や安全指導など課題山積ではありますが、

「高校の運動部活動の改革は、学校教育の一環として体育・スポーツの振興・発展に資する客観的な根拠」を改めて明確にすることは今後最も大きく重要な課題として、研究活動においても取り上げていく必要があると考えています。

結びに、本研究大会の開催に向けご尽力いただきました研究部を始め関係専門部の皆様や、ご支援いただきました多くの関係者の方々に深く感謝申し上げます。ご挨拶とさせていただきます。

令和4年度 第19回東京都高等学校体育連盟研究大会 役員

会長 奥秋 將史
副会長 畑澤 正一 浅見 浩一郎 池戸 成記 宮川 努 高取 克明 小高 潤子
田中 妙美
参与 鴻野 誠 高野 幸代 山田 智美 小澤 信敬 渡辺 洋司 栗原 信一郎
田中 康之
松ノ井 覚 松谷 茂 馬場 智生 各専門部部長
委員長 小宮 徳健
副委員長 田中 康之 阿部 一臣
委員 堀越 和彦 津田 弘毅 森 政憲 奥 正克 杉本 直志 征矢 範子
眞鍋 健治 秋月 隼 藤澤 健幸 新井 理仁 松里 亮 藤岡 純也
各専門部代表研究部委員

運 営 役 員

総務 田中 康之
総務員 阿部 一臣 堀越 和彦 津田 弘毅
渉外・接待 東京都高体連事務局 森 政憲 田中 康之
会場(来賓席確保) 眞鍋 健治 堀越 和彦
会計 新井 理仁 秋月 隼
紀要 梶浦 修平
表紙 東京都立日本橋高等学校
記録(写真) 藤澤 健幸
記録(録音テープ起し) 阿部 一臣
受付 新井 理仁 秋月 隼 征矢 範子 眞鍋 健治
司会者 高野 幸代
発表者 第一分科会 石部元太・大原康裕
第二分科会 堀越和彦
第三分科会 杉本直志
全国研究大会報告
第一分科会 森政憲
第二分科会 田中隆晴
第三分科会 秋月隼
課題研究 田中康之

令和4年度

第19回東京都高等学校体育連盟研究大会

開催要項

- 1 趣旨 東京都高等学校体育連盟に加盟する各専門部の体育・スポーツ指導者の資質向上を図るために日ごろの研究、指導の成果を発表するとともに高体連の直面する諸問題について情報交換し、高等学校教育の一環としての体育・スポーツの振興発展に資する。
- 2 主催 東京都高等学校体育連盟
- 3 後援 東京都教育委員会
- 4 主管 東京都高等学校体育連盟研究部
- 5 期日 令和5年2月18日（土）15時30分(受付) 16時00分～18時00分
- 6 会場 東京都庁第一本庁舎5階 大会議室 〒163-8001 東京都新宿区西新宿2丁目8-1

最寄駅・「JR新宿駅」（西口から徒歩約10分）

- ・都営地下鉄大江戸線「都庁前駅」
- ・新宿駅西口（地下バスのりば）から都営バス又は京王バス（都庁循環）「都庁第一本庁舎」、「都庁第二本庁舎」、「都議会議事堂」下車
- ・JR新宿駅西改札「新宿駅西口」バス停から「西参道方面」行きの新宿WEバス乗車「新宿ワシントンホテル前」下車

- 7 参加者 東京都高等学校体育連盟加盟校の体育・スポーツ指導者
東京都高等学校の部活動に興味関心を持つ指導者・研究者・学生

- 8 内容 (1) 全国高体連研究大会3分科会からの報告
(2) 講演「ペップトーク」〈ペップトーク協会講師〉
(3) 東京都研究部3分科会からの発表

※各発表テーマ・講演内容は、<http://www.tokyo-kotairen.gr.jp>に掲載します。

- 時程 15時30分 受付
16時00分 開会式
16時05分 講演「体罰根絶に向けた指導方法～ペップトーク～ 60分」
休憩－（10分）－
17時15分 全国研究大会報告各分科会、各5分
17時30分 東京都研究部各分科会、各7分
17時55分 閉会式

- 10 参加申込み 参加申し込みは、所定の用紙に必要事項を記入の上、各専門部で一括して申し込む。
個人の申し込みは、下記申込先に直接連絡する。

申込先 〒186-0004 東京都国立市中3-1-10 桐朋高等学校内 森政憲 宛

TEL 042-577-2171 FAX 042-574-9898

申込期限令和5年1月17日(火) 必着

【講演】

「体罰根絶に向けた指導方法」～ペップトーク～

日本ペップトーク普及協会 堀 寿次

堀 寿次 プロフィール

日本ペップトーク普及協会 コンテンツ開発部 部長

講師（ファシリテーター・スピーカー）2016年4月取得

講演実績 神奈川県立横浜立野高校（バスケット部・野球部・学年会）
昭和第一学園高等学校（東京）
東京都高体連バスケットボール専門部
高石市立取石中学校（大阪）バスケット部、学年集会
調布市立第六中学校（東京）
日野市立七生中学校（東京）
自修館中等教育学校（神奈川）
鎌倉市中体連 競技向上検討委員会
埼玉県中体連剣道専門部
八王子市立第六中学校（東京）
東京都立清瀬高等学校（サッカー部）
小野学園女子中学高等学校（バスケット部・ホッケー部）
東京都中体連陸上専門部 選抜チーム
東京都中体連剣道専門部
東京都立三田高等学校（教員研修、PTA）
富津市教育センター 教員研修
東京都立八王子東高校 剣道部
旭硝子株式会社 企業研修
日本生命保険相互会社 企業研修
その他、年間60講演。累計1万人以上に講演しております。



【プロフィール】

秋田県秋田市在住 大分県出身

菅公学生服株式会社にて、制服・体育着メーカーの営業として活動。

学校の生徒、先生、保護者様に何が出来るかを提供し続け、ペップトークに出会う。

授業や部活でペップトークが広がるように、関東エリアを中心に講演中。

子どもたちに言葉の力でワクワクに溢れた学生生活を送ってほしいと願っています。

【主な経歴】

2007年 大阪府立大学経済学部 卒業

2007年 尾崎商事株式会社(のち菅公学生服株式会社に社名変更)
開発本部にて商品企画を担当

2013年 菅公学生服株式会社 関東事業部
営業：担当エリア 神奈川県・東京都

2021年 秋田菅公学生服株式会社 営業部 部長



【書籍】

スクール・ペップトーク実践ワーク集

出版社：学事出版 出版年度：2019年4月



1. ペップトークとは

まずはじめに、ペップトークとは何か（定義）、何のために行うか（目的）そして、どんな特徴があるのかをつかんでいきましょう！

point 1 定義

ペップトークとは、PEP TALK. 英語の辞書に書いている英単語です。
Pepは『元気・活気』という意味があり、pep upで『～を元気づける』です。
PEP TALKは意味は、『（短い）激励演説・応援演説』

もともとスポーツの試合の直前に行われている
激励のショートスピーチで、監督が選手から
最高のプレーを引き出すために考え抜いた言葉がけです。

みなさんもスポーツ映画やドラマで監督が選手
を励ましているシーンを見たことがあるかもしれません。
2019年ラグビーワールドカップ日本大会で
ジェイミー・ジョセフ・ヘッドコーチは
1次リーグ世界ランキング1位アイルランド戦を前に、
こう選手たちを鼓舞しました。

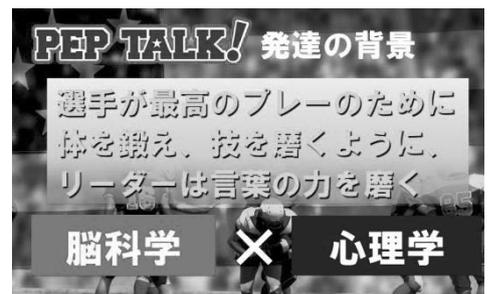


「誰も勝つと思ってないし、誰も接戦になるとも思ってない。誰も僕らがどれだけのものを犠牲にしてきたか知らない。勝利を信じているのは僕たちだけ」

この言葉で心に火がついた選手たちは見事勝利を勝ち取ったのです。
みなさまが仕事や家庭でのコミュニケーションを円滑に行うためにそのエッセンス
を理解し、実践できるようにしていきます。

point 2 目的

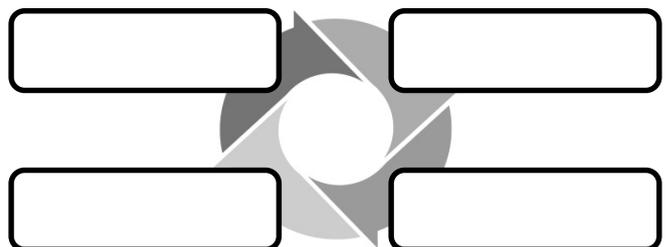
アメリカのスポーツビジネスで磨かれた技術である
ペップトークの目的は、選手の『本領発揮』を導くこと
です。そのためには、単に気合や根性ではなく、脳科学
や心理学の背景を持ち、どんな言葉をどのように伝える
かで、人のやる気を引き出し行動を変えることが分かっ
ています。ペップトークの背景にある脳科学・心理学
を知ることは、言葉磨きの上で大切な要素です。



point 3 特徴

ペップトークの特徴は
『短く・わかりやすく・肯定的な・魂を揺さぶる』
激励のスピーチです。
そのために4つステップがあります。

- ①受容（事実の受け入れ）
- ②承認（とらえかた変換）
- ③行動（してほしい変換）
- ④激励（背中へのひと押し）



2. ペットトーカー一度チェックリスト



20個の質問で当てはまるものにチェックをつけていきましょう。
みなさんのペットトーカーとしての立ち位置がわかります。

- ① 自分には価値があると思う
- ② 悪いところよりも良いところの方を先に伝えるようにしている
- ③ 落ち込んでもすぐに切り替えて復活が早い方だ
- ④ 一緒にいると元気になるとよく言われる
- ⑤ 相手の話をよくきくように心がけている
- ⑥ 自分自身を大好きである
- ⑦ 「すみません」よりも「ありがとう」とよく言っている
- ⑧ マイナスな出来事もプラスにとらえるように意識している
- ⑨ あまり意識しなくても自然に相手を励ましている
- ⑩ 相手の立場に立って話しかけることを意識している
- ⑪ 自分の良いところを1分以内に10個以上言える
- ⑫ 「～～するな」よりも「～～しよう」とよく言っている
- ⑬ うまくいかない時でも自分を許すことができる
- ⑭ 夢の実現を本気で応援したい人がいる
- ⑮ 人の成功を自分のこととして喜ぶことができるほうだ
- ⑯ 自分で自分をよく励ましている
- ⑰ 感情的というよりは情熱的に相手に伝えるようにしている
- ⑱ どちらかというとなポジティブなほうだ
- ⑲ 頑張っている人を見ると応援したくなる
- ⑳ 短くわかりやすい言葉で相手に伝えることを意識している

いくつチェックができましたか？

セミナー前

 個

セミナー後

 個

3ヶ月後

 個

今後伸ばしていきたい項目はどれですか？

今はチェックがついていないけれど今後チェックがつくようにしていきたい項目を2～3個あげて☆をつけてみましょう。
☆をつけた項目を意識していきましょう！



3. ゴールペップトーク

ゴールペップトークは、たった1分で相手をやる気にさせるペップトークです。本番を目前にした自分・家族・仲間に対し、状況をポジティブにとらえ、ゴールを明確にしたうえで、最高の力を引き出す背中の一押しという言葉掛けです。



背景

アメリカのスポーツビジネスから生まれたペップトークですが、実はアメリカにペップトークの教科書があり、ペップトークの専門教育が行われているわけではありません。ペップトークはその監督が、そのチームのためだけに行う門外不出の言葉掛けです。最終奥義ともいわれるそのスキルが一般に出ることはありません。



しかし、我々にはペップトークを学ぶ方法があります。それがスポーツ映画です。実話をもとに再現される映画を1000本以上研究を重ね、ペップトークのパターンを導き出しました。それが、①受容②承認③行動④激励の4ステップです。



ペップトークを考えよう

現場の状況に合わせて、ペップトークを考えましょう。あなたは生徒たちに目の前のことに、自分の全力を出してほしいと願っています。生徒たちの気持ちを汲み、心を揺さぶる背中の一押しを考えよう。



Let's think

最後の夏の大会。初めてレギュラーになったA君緊張して手が震えている。今まで地道に頑張ってきたそんな彼を励ます言葉掛けを考えてみよう！

<hr/> <hr/> <hr/>	<hr/> <hr/> <hr/>
<hr/> <hr/> <hr/>	<hr/> <hr/> <hr/>

<解答例>

お前ならできる！
一緒に試合を
楽しもう！

緊張してる？
その気持ちはわかるよ
明日が初めての
試合だからな

だから、明日の試合
誰よりも走り切れ。
今までやってきたこと
を出し切るんだ。

でもA君は、誰より走っ
てきた。緊張は本気の
証拠。戦うために必要
な気持ちなんだ。

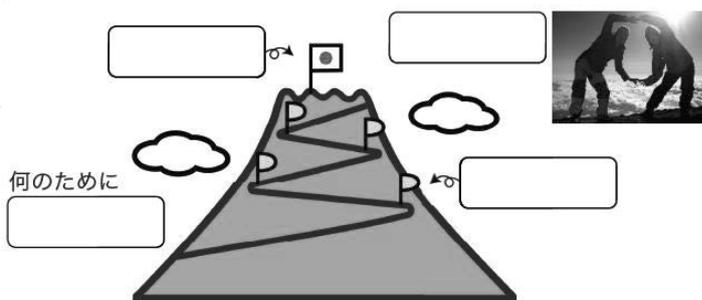
4. ゴールペットトーク

ゴールペットトークは、たった1分で相手をやる気にさせるペットトークです。本番を目前にした自分・家族・仲間に対し、状況をポジティブにとらえ、ゴールを明確にしたうえで、最高の力を引き出す背中へのひと押しの言葉掛けです。



ゴールとは

目的・目標・ゴール・ビジョンを山登りをするを考えて書いてみよう。ゴールを決めるメリットもブレーキもあります。ペットトークでは、ゴールのイメージを共有し、明確化することで相手のブレーキを外し、できることから進めることでやる気を引き出すことができます。



目的・目標・ゴール・ビジョンの違いは？

目的

目標

ゴール

ビジョン

メリット

- 知識・能力・道具が増える
- 多くの共感者や協力者と出会う
- ゴールや目標と感情をセットにして描くことで、人生がワクワク感やドキドキ感にあふれた感動的なものになる
- 失敗から次の成功のための糧を手にする
- 視点が高くなり、人生で見る景色が変わる

『ザ・コーチ』谷口貴彦著

ブレーキの外し方

- 知る
- 小さく始める
- 思い込みを書き換える
- 評価軸を変える
- 失敗や挫折の意味づけを変える

『ザ・コーチ』谷口貴彦著



Let's think

最もパフォーマンスを発揮する心の状態は、どんな状態か？



5.セルフペップトーク

セルフペップトークは、自分に掛ける励ましの言葉です。
誰かを応援するためにも、自分が満たされている状態が大切です。
自分の応援団長は、自分です！
まずは自分を励ます言葉を考えてみましょう。



言葉を変える

自分自身の言葉を変えていくと、短期的には気分が変わる。
前向きな気持ちが前向きな行動を促します。
体験が思い込みになり、長期的には思い込みが変わる。
言葉を変えることで、気分や思い込みが変わり、
自己イメージを成形することができます。



言葉が変わると..



気分が変わる

思い込みが変わる



Let's think

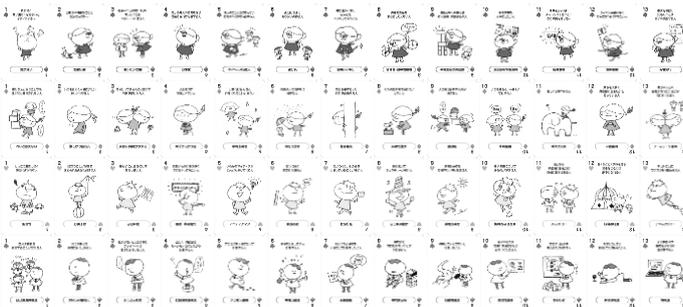
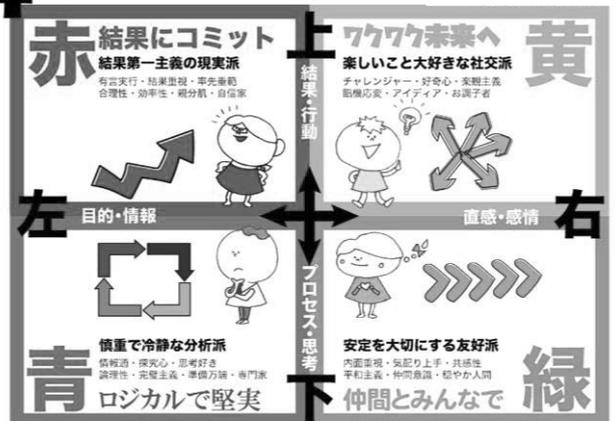
成功と失敗の共通点は何でしょうか？



自分に響く言葉はどんな言葉でしょう？



4 COLORS 自分を表す4色



コミュニケーションカードは、人が持つ52の代表的な行動特性を示すカードです。このカードを使うことで自分や相手の行動特性の理解を深めることができます。

東京都高等学校体育連盟研究部 第一分科会(競技力向上)

「東京テクニカルスタディーグループ(TSG)の取り組み」

～ 全国高等学校総合体育大会、サッカー競技の分析 ～

東京都高体連サッカー専門部	都立江戸川高等学校定時制	石部元太
	都立多摩高等学校	大原康裕
(協力者)	桐朋高等学校	森 政憲
	都立松が谷高等学校	田中康之

1. はじめに

2022年サッカーワールドカップ、カタール大会が開催された。日本チームは強豪ドイツ、スペインに逆転勝ち、アジアの新しい歴史ともいえる戦績を残した。私たちは監督の采配を称賛した。勝利の背景には、世界大会を分析し、技術・戦術の分析から競技力を高めるといふ地道な取り組みがある。これまで、日本サッカー協会はテクニカルスタディーグループ(略称TSG)の活動を継続し、勝つための方策を積み上げてきた。小学生・中学生・高校生の各年代における大会の分析を通して、選手育成・強化を図っている。

高等学校体育連盟サッカー専門部においても大会分析(研究)を行っている。各校サッカー部は、さまざまな大会の分析や報告を受け、サッカー理解の高い指導者と選手の育成を図りながら競技力を高めている。これまでの東京都高等学校体育連盟研究大会では、全国高等学校サッカー選手権大会TSGの取り組み(平成26年度東京都研究大会)と、東京の地区レベルでのTSGの取り組み(平成27年度東京都研究大会)を発表した。本研究では、東京都技術委員による2022年(令和4年度)全国高等学校総合体育大会、徳島大会の分析の取り組みを明らかにし、今後の指導の一助とすることを目的とする。

*高等学校体育連盟サッカー専門部テクニカルスタディーグループとは、高校サッカーの頂点を決する大会の技術・戦術分析を継続し、指導者や生徒にサッカー理解の獲得のための教材(テクニカルレポート・映像)を作成する組織。テクニカルレポートはフラットな視点での大会分析とし、大会の傾向をまとめている。テクニカルDVDでは戦術行動のグッドシーンを映像と言葉で説明し、プレーの原則や個人戦術の重要性を伝えている。テクニカルレポート・DVDは、生徒(選手)のサッカー競技の理解に役立ち、競技力向上とサッカー競技の普及に発展するものといえる。生徒のサッカー理解は高まり、サッカー競技者のすそ野は広がると考えられる。

2. 東京TSG発足の経緯

2004年(平成16年度)、全国高等学校体育連盟サッカー専門部技術委員会は第82回全国高等学校選手権大会テクニカルスタディーグループを立ち上げた。日本のサッカーの今後を担う育成年代の選手たちをどのように伸ばしていくのか、選手の個人の力をどのように高めるか、世界を基準として考え、各学校の実態に応じたレポートと映像の作成を始めた。それに倣い、東京都高等学校体育連盟サッカー専門部技術委員会は指導者(東京都高等学校体育連盟サッカー専門部役員)のレベルアップとサッカー理解を獲得した選手の育成を目指す方策として、2016年(平成28年度)より東京TSGを発足させ、「強い東京」を目指すことにした。

2016年(平成28年度)の広島総体の東京TSG報告では、①インテンシティー&クオリティーをあげ、インテンシティーは向上傾向にあるが、課題としてオフザボールの関わりの質、プレッシャー下での判断、動きながらのテクニックの発揮、状況に応じた戦術判断を報告している。②4局面における意図的プレー(戦術行動)では、総体の上位進出チームは相手の変化を感じながら、4局面で意図的にプレーし、攻守両面で主導権を握ろうとする意図が見られた。特に千葉県代表は4局面で相手に圧力をかけることが出来、相手の特長や変化に応じて戦い方を変えることが出来たことを報告している。

2017年（平成29年度）の宮城総体では、①攻撃ではプレースピードをあげトップギアの中での判断と技術が勝敗を左右すること、②守備では激しさ（球際）をあげ個人の守備力が組織的な守備となること、③チーム・個人クオリティーではチームにおいてスタイルの対応力や戦術的な駆け引き、決定的な仕事（攻守）をする存在、個人においてはポジションごとのクオリティーをあげることを報告している。「強い東京の復活」への言及では基本の徹底（様々なスタイルの対応できる個人戦術・技術）をあげ、テクニカルは当たり前、その上でよい選手を目指すことを示している。

2018年（平成30年度）の三重総体では、強い東京を目指すために「強化のため、日常を変える～Be Alert・切替・連続性～」をあげ、①攻撃では、判断のスピード（観る）・関わる（スプリント）・たくましい個の融合の3つをあげた。②守備では、ボールを奪う意識・危険予測とスプリント、ロングボール対応を報告している。

2019年（令和元年度）の沖縄総体では、大会の特徴として、①中盤の攻防（コンパクトな状態からボールを奪いに行く・ネガティブトランジション）、②セットプレー（キックの精度が高い・セットプレーが勝敗を分ける）、③ロングキックの狙い（高い位置に起点を作ること、セットプレーを取りにいくこと）、④1対1の対応（ファーストディフェンスの徹底・ファールをせずにボールを奪う・前を向かせない）ことを報告している。

2021年（令和3年度）の福井総体では、大会傾向として①ハードワーク（攻守ともに）、②確立されたスタイル（ストロングポイント）を持つことをあげている。東京代表が上位を目指すためには、①クリアボールをヘディングでパスする技術（クリアボールをコントロールする技術）、②守備から攻撃の切り替え（プレッシャーの中でも確実に攻撃に繋げる）、③ディフェンシブサイドでの組み立てを報告している。

3. 東京TSGの取り組み

（1）東京TSGの目的

- ①全国大会に出場する様々なチームの分析を行い、全国大会の基準を視点に、現在の東京都高等学校体育連盟サッカー専門部加盟チームの現状との比較から、東京都全体（東京都高校体育連盟サッカー専門部役員、指導者及び生徒）のレベルアップを図るための要素を明らかにする。
- ②東京都高校体育連盟サッカー専門部技術委員の個人的、主観的な分析ではなく、集团的・組織的な分析により情報整理および共有を図り、東京都高等学校体育連盟サッカー専門部加盟校の競技力向上を図る取り組みについて「成果と課題」を明らかにする。
- ③大会分析の活動を通して、東京都高等学校体育連盟サッカー専門部技術委員の育成、および東京都高等学校体育連盟サッカー専門部の指導者全体の指導力向上を図る。
- ④東京TSGの取り組みから、全国高等学校選手権大会技術委員、TSGメンバーの人材発掘と育成を図る。

（2）活動概要

①令和4年度 東京都高等学校総合体育大会2次トーナメント大会分析

- ・2022年6月18日（土）の行われた「令和4年度 東京都高等学校総合体育大会2次トーナメント」準決勝（代表決定戦）2試合の観戦・分析を行った。

【結果】

東海大高輪台 vs 関東第一（結果：0-0PK2-3で関東第一が勝利）

帝京 vs 駒澤大高（結果：1-0で帝京が勝利）

- ・試合観戦後、東京都高等学校体育連盟サッカー専門部技術委員から全国総合体育大会における東京TSGの観点・分析方法のレクチャーを受けた。

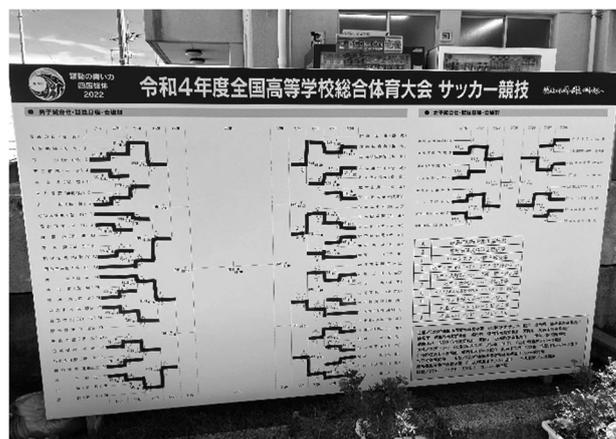
②令和4年度全国高等学校総合体育大会、徳島大会の分析

- ・2022年7月28日(木)～30日(土)に行われた「令和4年度全国高等学校総合体育大会、徳島大会」の準々決勝から決勝までの7試合を現地にて観戦・録画・分析を行った。
- ・徳島県高等学校体育連盟サッカー専門部技術委員会と全国技術委員長により開催される「優秀選手選考会議」の中で、大会の傾向や課題について議論した。
- ・大会終了後、録画撮影した7試合全ての映像を数回にわたり見直し、分析した。今大会のトピックを抽出するとともに、大会分析の説明に必要な場面の映像編集作業を行った。
- ・対面およびオンライン会議を5回開催し、大会分析に必要な資料(パワーポイント)の作成と編集した映像の確認を行った。
- ・2022年9月23日(金)、駒込高等学校で行われた「第101回全国高等学校サッカー選手権大会 東京大会2次予選」の抽選会にて、東京TSGは参加59チームのキャプテンおよび顧問、高等学校体育連盟サッカー専門部役員(合計およそ150名)を対象に「東京TSG活動報告」を行った。20分間の発表であった。

4. 令和4年度全国高等学校総合体育大会、徳島大会の結果と分析

(1) 大会の勝ち上がり(準々決勝以降)

準々決勝	帝京	4-2	岡山学芸館
	大津	0-1	昌平
	前橋育英	2-1	矢板中央
	湘南工科	0-3	米子北
準決勝	帝京	1-0	昌平
	前橋育英	0-0 (PK 4-3)	米子北
決勝	帝京	0-1	前橋育英



(大会の結果)

- 優勝 前橋育英(群馬)
- 準優勝 帝京(東京①)
- ベスト4 昌平(埼玉) 米子北(鳥取)
- ベスト8 岡山学芸館(岡山) 矢板中央(栃木) 大津(熊本) 湘南工科大附(神奈川)

(2) 大会の傾向 *上位進出(ベスト8以上)チームの傾向

①ビルドアップ vs プレッシングの構図の増加

- ・短期間開催のノックアウトのトーナメント方式における「リスクを冒さない」「ロングボール主体」「ゴール前の守備ブロック」の傾向から大きく変わりつつある。
- ・攻撃はGKを含めたビルドアップから開始するシーンが例年に比べ多く見られ、それに対する守備は前線からアグレッシブにボールを奪いに行っていた。
- ・ビルドアップ・プレッシングの形がしっかり準備(トレーニング)されている。

②プレー強度の向上

- ・攻守においてアグレッシブに戦うチームが増えた。ボールを動かして積極的にゴールに向かい、守備時には前線からプレッシングをかけボールを奪いに行くサッカーが展開されていた。

- ・球際・切り替え・運動量の質と量が上がっている。デュエル（1対1によるボールの奪い合い）の回数や質、切り替えの速さ、走行距離やスプリント回数（主観）、ポジション移動などが明らかに例年の全国総体と比較して向上している。
- ・リスタート（セットプレー）の特徴が出た大会であった。猛暑の中での7日間で6試合の過密日程の中、アウトプレー中に時間をかけるチーム（特にロングスロー）が多く見られた。そのため、アクチュアルプレーイングタイムも約17～18分（ハーフ）という非常に短い時間しかプレーしていない結果が出ている。そのようなチームが多い中、優勝した前橋育英は、クイックリスタートを徹底していた（スローインは5秒で投げるなど）アクチュアルプレーイングタイムを確保するサッカーを展開していた。

③セットプレーの質と種類

- ・CK・FK・スローインなどの準備は、どのチームも相当な時間をかけてきたと思われる。攻め方、守り方、分析、パターンなど細かな部分までトレーニングすることは全国で勝つためにはスタンダードの要素になっている。
- ・パターンの種類は、各チーム数多く持っている。1回ごとに攻撃における動き方や立ち位置、入り方に工夫があるチームが増えた。
- ・大会を通じてのセットプレーにおける分析は必須になっている。大会期間中の時間が限られている中、映像分析を使って対策をどのチームも行っており、相手のパターンやストロングポイント、ウィークポイントなどを分析・トレーニングした上で試合に挑んでいる。決勝戦の日本一を決めるゴールはチーム分析の結果が生まれたゴールではないかという可能性がある（主観）。

④分析の必要性

- ・相手チームの分析は、現代のサッカーにおける必要最低限の要素になりつつある。対戦相手の戦術やプレーモデル、特長などを分析した上で対策を練って試合に挑む。相手ビルドアップの特徴を分析した上でプレッシングをかけて得点（準決勝 米子北 vs 湘南工科大）も見られた。また、前橋育英はスローイン時のバランスの悪さを分析し、日本一を決める決勝ゴールに繋げた（決勝 帝京 vs 前橋育英）と思われる（仮説・主観）。

5. まとめ

令和4年度全国高等学校総合体育大会、徳島大会において、東京代表である帝京高校が決勝進出を果たし、惜しく前橋育英高校に敗れたものの準優勝という輝かしい成績を残してくれた。東京TSGの目標として「強い東京」を目指す上で、帝京高校の躍進は今後の東京都の高校サッカーに大きな影響を与えてくれると考えられる。また、今後の高校サッカーにおける主要大会（略称：全国総体、選手権大会、プレミアリーグ、プリンスリーグ等）において、東京代表が上位を目指すために、東京TSGとして以下の3点をまとめとして挙げたい。



(1) 戦術

サッカーは日々進化しており、高校サッカーにおいても時代に取り残されないように常に進化・成長していかなければいけない。特に戦術面における進化・進歩は、目まぐるしく速く、選手・監督・チームに関わる全ての人が日々学び、日々成長していかなければいけない。その中でもサッカーを「見る目」を養うことは必要不可欠であり、どこにいても世界のトップレベルのサッカーからアンダーカテゴリーの世代まで映像を見られる時代だからこそ、貪欲に「学ぶ姿勢」を持ち、選手、指導者共に成長していくことが必要であると考えます。

(2) 改善力

今大会を通じて、全国で勝つためには、選手・監督・スタッフが協力しチームで試合中に改善する力が必要であると感じた。ほとんどのチームが分析や対策を行っている中、チームとしてのゲームプランや戦術・戦略を準備したとしても、それを上回るサッカーを展開された時に、どのように「改善」できるかが上位進出には重要であった。常に次の手を出せるチームは、選手が判断している部分はもちろん、選手たちだけで判断できない点は、監督・スタッフを通じて試合中に修正をかけていた。準備していたことだけではなく、常に臨機応変に対応・判断できる「改善力」をチーム全体で養うことは必要である。

(3) 分析力

現代のサッカーにおいて「分析力」はなくてはならないものである。指導者だけでなく選手においても、試合中に起こっていることをその場で分析する力や映像を観て自チーム・相手チームの分析をする力は養わなければいけない。また、東京都の予選においても、お互いに映像を観られる環境（クラウド上に全試合をアップロードし参加チームが観覧できるようにする）を整備することなどは「強い東京」を目指す上で必要なことなのかもしれない。

以上の3点から、選手・指導者・チームに関わるスタッフ、全ての人が日々目まぐるしく進化するサッカーに目を向け、学びの姿勢を持ち続け、チームの枠を越えて東京都・全国とお互いに切磋琢磨し学び合う環境を作っていくことが今後の課題となる。また、「学び」の本質を突き詰めることで、部活動における問題や課題（体罰やハラスメント、行きすぎた指導など）は、早急に改善されることを願う。

(参考文献・資料)

- ・財団法人日本サッカー協会、全国高等学校体育連盟サッカー専門部
「第88回 全国高校サッカー選手権大会テクニカルレポート」
- ・東京都高等学校研究部 平成26年度東京都高校体育連盟研究紀要 p.6-9
平成27年度東京都高校体育連盟研究紀要 p.6-7

「コロナ禍の部活動」 ～工夫と変化の調査：第3弾～

自転車競技専門部 日本学園高等学校 堀越 和彦

1. はじめに 研究のきっかけと継続の理由

オリンピックイヤーのはずだった2020年、私たち人類は未知の「新型コロナウイルス」に遭遇し、日本だけではなく世界中で感染拡大防止のため、社会活動停止や外出自粛を余儀なくされた。想像もつかない「新しい生活様式」を迫られ、生徒も含めた学校関係者にとって、登校もできず連絡もままならない状況を調査した。2021年は緊急事態宣言が繰り返される中で、1年経過後に部活動がどのように実践されたのか、その変化の記録をまとめた。2022年は更に1年経過し、過去2年間と比較してコロナ1年目のように生徒が大きな「犠牲」を受けないように、何ができるか考えるための参考となる意見や事実を集めたい。

2. 目的

コロナに翻弄されながら徐々に通常に近い部活動に戻りつつある今、これまでの3年間を振り返り、今後もある程度の行動制限などが生じることを想定し、顧問として何をすべきか、その材料を手に入れることを目的とした。

3. アンケート調査の概要

- (1) 対象 : 東京都高体連研究部員の教員 25名
(2021年 39名、2020年 42名)
- (2) 期間 : 2022年12月
- (3) 調査方法 : Google Forms によるアンケート形式による調査
- (4) 調査内容 : コロナ禍での部活動実態
- (5) 分析方法 : 2年間同様キーワード分析はテキストマイニングを活用。

(<https://textmining.userlocal.jp/>)

* 調査期間の社会状況

2021年に比較して緊急事態宣言は発令されず、まん延防止等重点措置が1月～3月にあったのみ。4月から全く活動制限はない。感染者数の規模は全国的に桁違い

2020年													2021年									2022年																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																						
1				2				3					3			4			5			6			7			8			9																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																													
5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	1	2	3	4	5	6	7</

に拡大。昨年度使用したグラフと対比するとわかり易い。

第6波・第7波の方が圧倒的に感染者が多かったにも拘らず、部活動は正常化に近づいてきている。

第6波・第7波を入れたグラフ
https://www.nhk.or.jp/shutoken/newsup/pref_tokyo_daily.htmlより (NHK 首都圏ナビ)

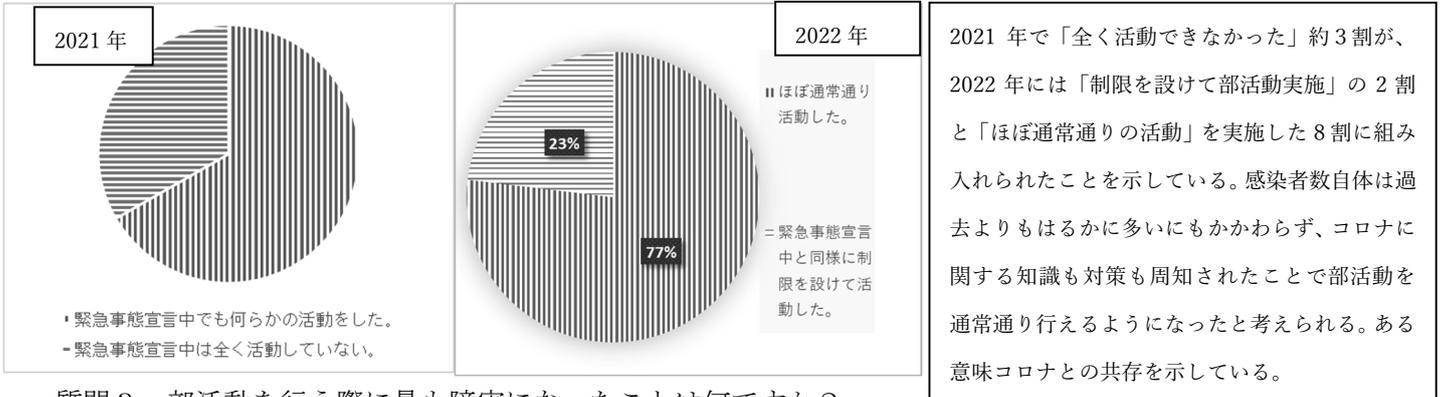


2021年度の資料 https://www.tokyo-np.co.jp/article_photo/list?article_id=133401&pid=469688より (東京新聞 web)

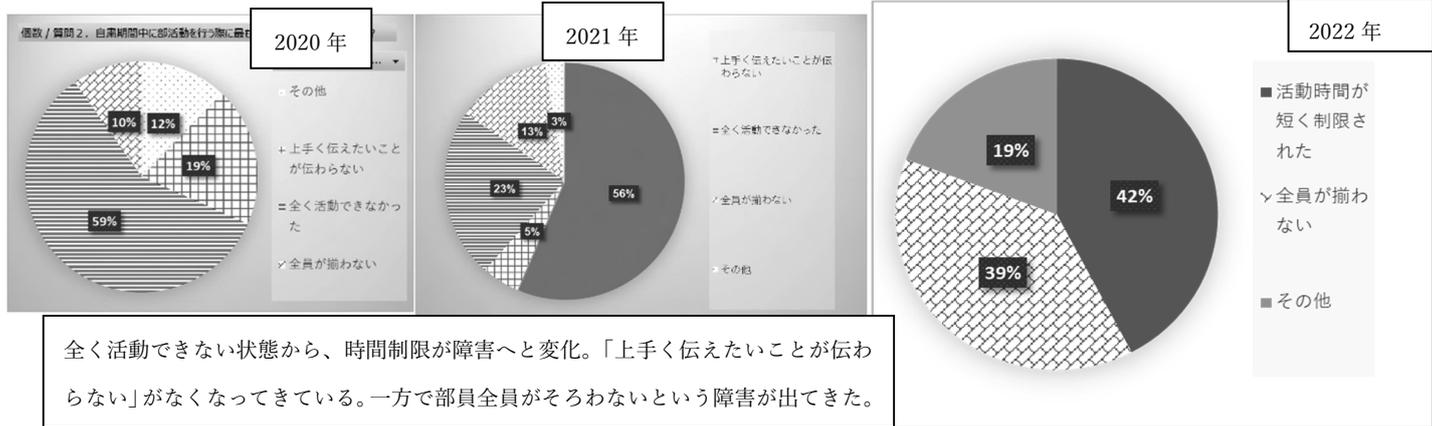


4. アンケート調査結果および考察

質問1 2022年は緊急事態宣言が出されませんでした。部活動の実施についてお答えください。



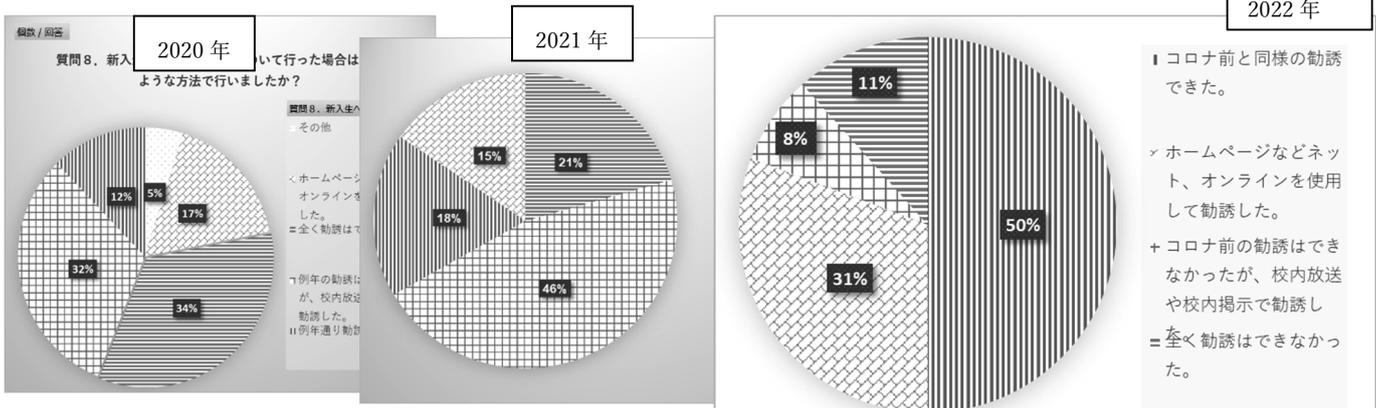
質問3 部活動を行う際に最も障害になったことは何ですか？



質問5. 自粛期間にやりたかったと思うこと、あるいはあった方がよかったものは何ですか？あれば具体的に記入してください。 質問5 高校3年生のために「こうした方がよかった」と思うことは？



質問 1 2 新入生へのアプローチについて行った場合はどのような方法で行いましたか？



■ コロナ前と同様の勧誘
できた。

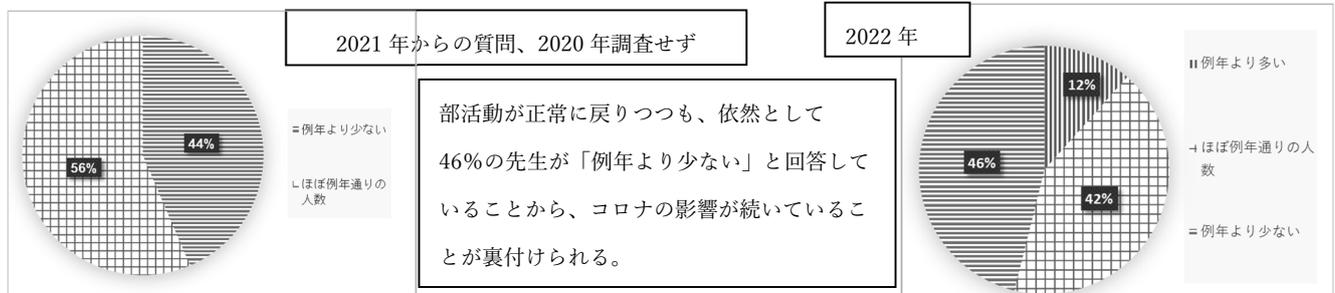
▽ ホームページなどネット、
オンラインを使用した。

+ コロナ前の勧誘はでき
なかったが、校内放送
や校内掲示で勧誘し
た。

= 全く勧誘はできなかつ
た。

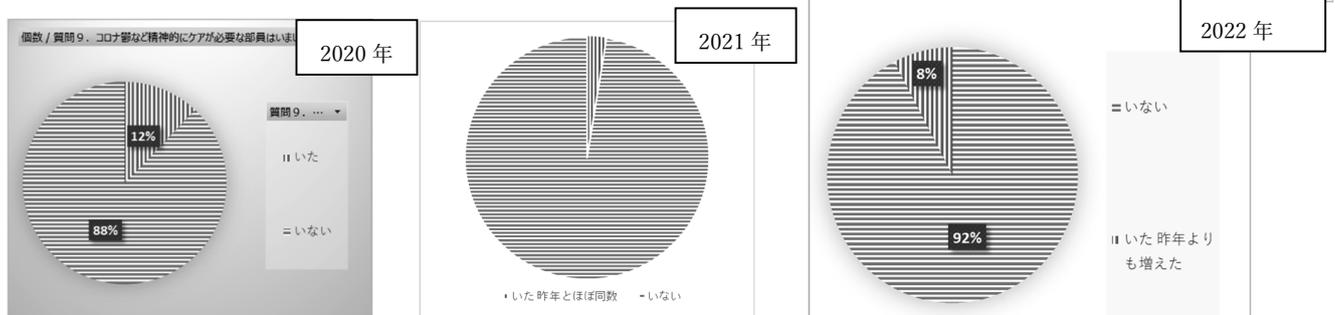
「全く勧誘できなかった」は徐々に減る。「コロナ前と同様の勧誘」が拡大して5割になったが、HP などネットを使用した勧誘が3割を占めるのは、まだコロナの影響が残っていると考えられる。また校内放送や校内掲示の割合が減ってネットに移行していることが特徴で、コロナによる新しい工夫と考えていいかもしれない。

質問 1 3 その結果、現在高校 1 年の部員数は例年と比較してどうですか？



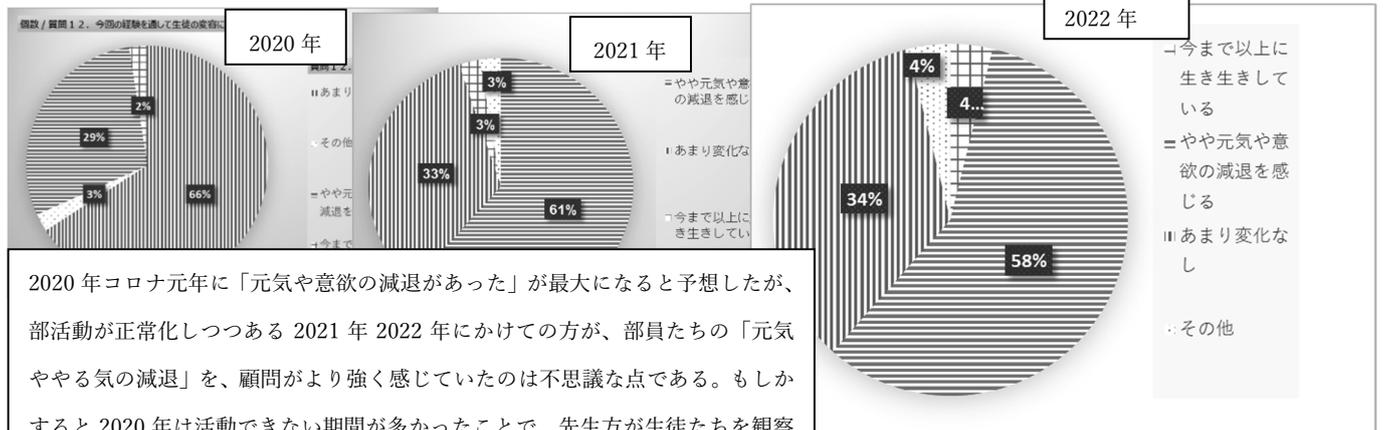
部活動が正常に戻りつつも、依然として
46%の先生が「例年より少ない」と回答して
いることから、コロナの影響が続いているこ
とが裏付けられる。

質問 1 4 コロナ鬱など精神的にケアが必要な部員はいましたか？



2020年から一度減少したにもかかわらず、少し増えている点は注意が必要。コロナ以外の原因かどうかとも注意が必要。

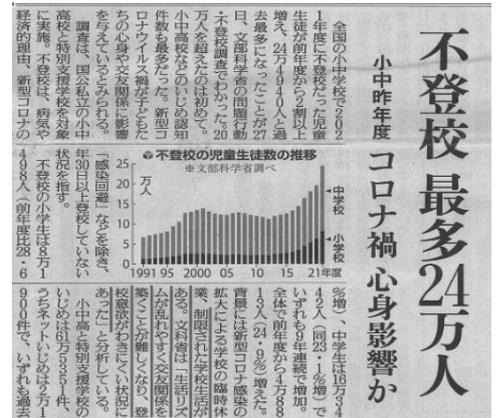
質問 1 5 今回の経験を通して生徒の変容についてお聞きします。



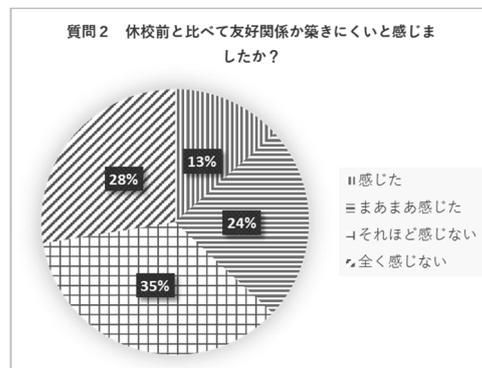
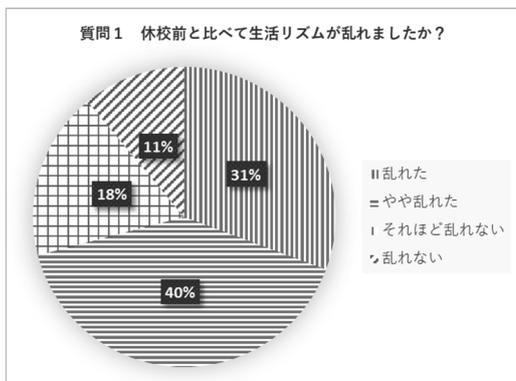
2020年コロナ元年に「元気や意欲の減退があった」が最大になると予想したが、部活動が正常化しつつある 2021年 2022年にかけての方が、部員たちの「元気ややる気の減退」を、顧問がより強く感じていたのは不思議な点である。もしかすると 2020年は活動できない期間が多かったことで、先生方が生徒たちを観察するゆとりがなかったかもしれないとも考えられる。

今までの3年間の調査では高体連研究部員の先生方を対象にしたアンケートであったが、3年間をまとめる意味で生徒に対しても調査を行ってみた。

- (1) 対象 : 東京都高体連研究部員の勤務校高校3年生の運動部活動所属の生徒 (任意: 回答 128名)
- (2) 期間 : 2022年12月
- (3) 調査方法 : Google Forms によるアンケート形式による調査
- (4) きっかけ : 読売新聞掲載、小中学生不登校増加の記事
- (5) 分析 : 文部科学省の見解
 - ・生活リズムが乱れやすく友好関係を築くことが難しくなった
 - ・登校意欲がわきにくい状況にあった
- (6) 仮説 : 部活動のメリットとして「生活リズムを整え、友好関係を築き、登校意欲が湧くのではないか」

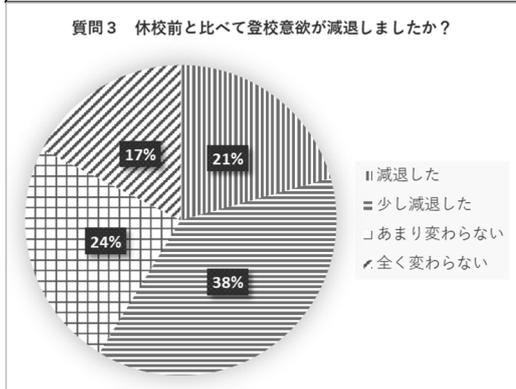


質問1～質問3 コロナで休校になってしまったことで、休校になる前と比べてどうだったか？



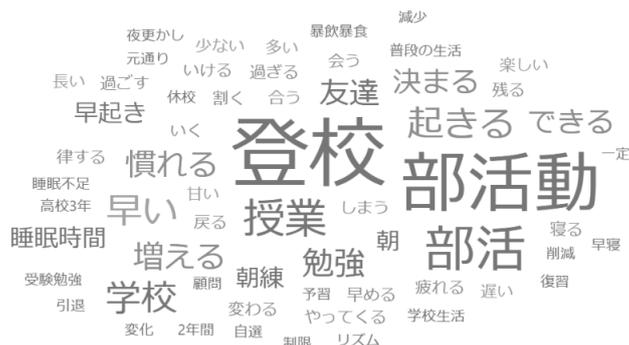
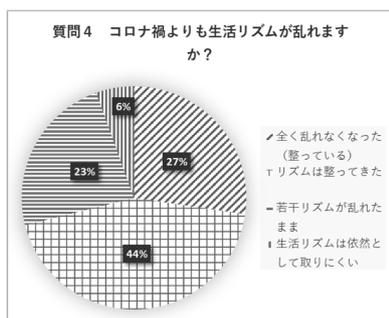
コロナによる休校は7割以上の生徒の生活リズムを乱した。一方でその状況下でも3割の生徒はきちんと自分のリズムを保った。

友好関係が築きにくいと感じるのは4割程度。6割は休校があろうがなかろうが、友好関係を築くことができたと感じている。



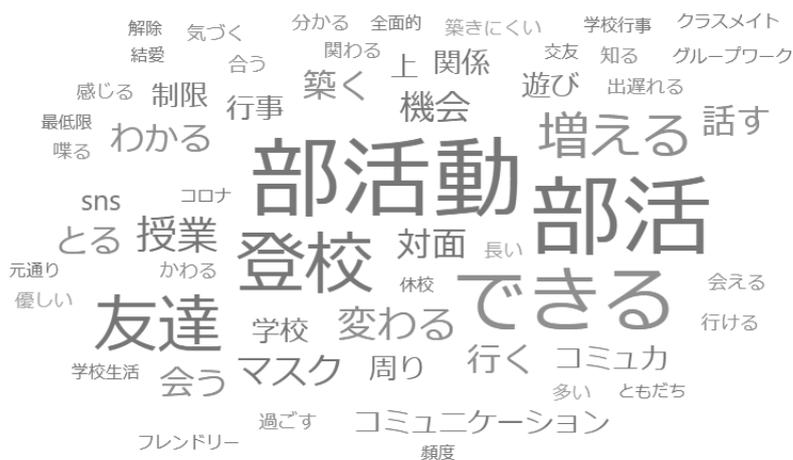
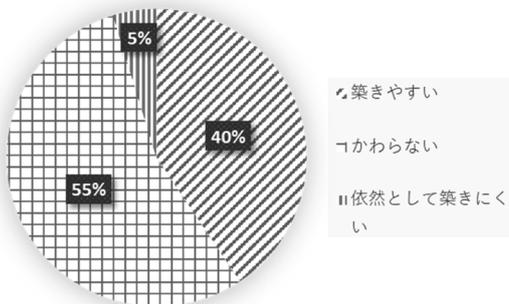
学校にも行かず、部活動ができないことが約6割の生徒の登校意欲に影響を与えた。このうちの特にはっきりと「減退した」と答えた2割は新聞記事の不登校の前年度増加率と一致し、そのままにしておけば不登校になる可能性もあったかもしれない。また、「少し減退した」も含めたこの6割という数字は顧問の先生方が2021年・2022年に生徒の変容について感じていた「やや元気がやる気の減退が感じられる」6割の数字とちょうど合致している。先生方の生徒の様子を見る観察眼が、部活動が正常化するにつれて修正されてきていることを表しているかもしれない。

質問4～質問6 コロナ禍の休校から現在は登校できる状態となって比較するとどう感じているか？またその理由を自由記述で答えて下さい。



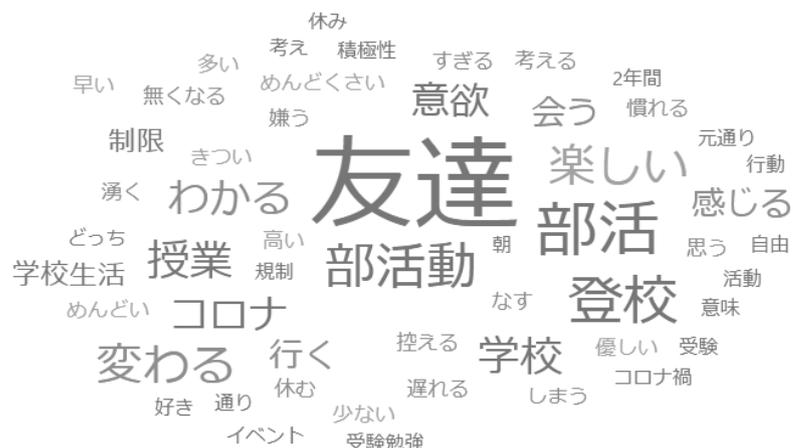
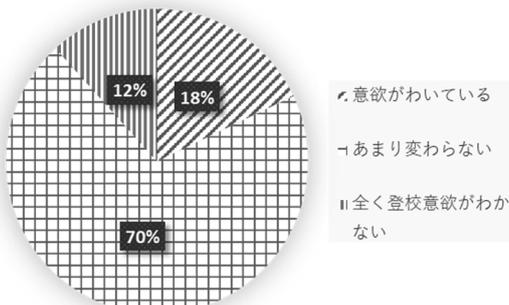
通常登校となり部活動が徐々に正常化される中で、7割の生徒が生活リズムを取り戻している。その理由の大きいものが部活動であり、とても印象深い。部活動が生徒の生活リズム維持に役立っている仮説の証明となるかもしれない。一方で「若干乱れたまま」を含め3割の生徒が依然としてリズムが取れていない。このような生徒が実際に出てしまうことを顧問として認識しておく必要がある。

質問5 コロナ禍の時よりは友好関係を築きやすいですか？



コロナ禍であろうがなかろうが友好関係の築きやすさにはあまり影響がない生徒が5割を超える。ただ、友好関係を築きやすい理由は部活動が大きく出ている。

質問6 コロナ禍よりも登校意欲がわいていますか？



通常登校になり一層「意欲がわいた」のは2割弱にとどまる。7割は通常登校になったからといって意欲が湧くとは限らないことを示している。1割は「全く登校意欲がわかない」とありコロナの影響が残ることを示している。いずれにせよ登校意欲を増大させるのは友達存在であることがわかる。

5. まとめ

2020年コロナ元年から現在まで政府の対応の変化に伴い、学校の対応も変化し、部活動の実施方法が変化し、現在では条件付きの場合もあるがほぼ正常に戻りつつある。感染対策のため大会運営上の顧問の負担は一層増加したが、新入生勧誘ではオンライン使用が拡大するなどコロナの影響は残りつつ、新しい工夫が副産物として出現し、まだ調べきれない工夫があったかもしれないと感じた。日頃部活動で生徒と関わることによって、顧問は生徒一人一人の様子・成長を正確にとらえる観察眼が養われるのではないと思われる。

コロナ感染が危ないから活動停止となれば部活動はどんどん縮小し、長い目で見て生徒がスポーツに触れる機会が激減する。部活動は生徒たちの生活リズムを整え、人間関係の構築に寄与していることも明示され、スポーツを推進する立場の私たち顧問は、どんな状況でも安全に活動するにはどうすべきかという視点を持ち知恵を絞って部活動をとにかく継続していくことが大切であると感じた。

「サッカー審判員の育成と環境について」

東京都高体連サッカー専門部 杉並学院高等学校 杉本直志

0. はじめに

中世のイングランドで発祥したサッカー競技では、はじめ審判員がいなく、選手同士の争いがあり沢山の死者が出ていた。加えて、町や畑も荒らし放題であった。その状況を打破するため、両チームの主将同士で話し合いがつかないときに観客席の紳士に判断を委ねた。その委ねる (refer) は審判員のレフリー (referee) の語源になっている。紳士が通常着用するフロックコートが黒色であることから審判服も通常は黒色であり、紳士の杖は、副審のフラッグになっている。やがて観客席にいたレフリーはピッチに降りて試合を判断するようになり、今の審判員の形に繋がっている。

審判員は試合が安全で公正に行われるようにする責任がある。審判員がいない場合は試合が行われない。サッカー競技において審判員は試合を行う上で不可欠な存在である。しかし、審判員は感謝されることだけではなく、判定に対しての罵声を浴びたり、時には身に危険を伴う場合がある。審判員が選手からボールを故意にぶつけられた事例もある。2013年には試合中に警告を出した17歳の選手に殴られてアメリカの審判員(当時46歳)が命を落とす事件が起きた。審判員だけではなく選手も危険にさらされることがある。1994年のワールドカップアメリカ大会ではオウンゴールをしてしまったコロンビアの選手が母国で暴漢に射殺されるという悲しい事件が起きた。

スポーツは安全で公正に行わなければならないが、法律やルールで守られていても危険な事態を招くケースもある。審判員が批判にさらされ罵声を受けるケースもある。そのため、自ら進んで審判員を行う人物は多くはないが、中には意欲的に審判活動を行う人物もいる。この審判員という大事な役割を担う人物を育成していくことは、スポーツの発展に大きく関わるものである。

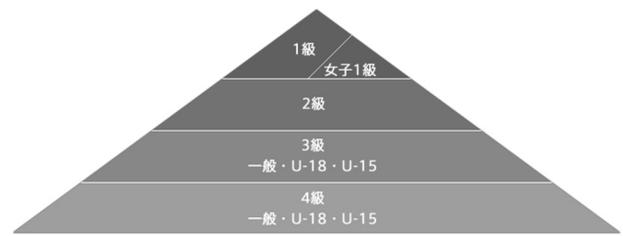
そこで本研究では、高等学校サッカー専門部におけるサッカー審判員の現状(審判員資格の取得状況と審判部育成の実態、及び審判員に対する調査)を明らかにし、今後の指導の一助とすることを目的とする。

1. サッカー審判員の環境について

東京都高体連主催のサッカー公式戦は主に主審1人、副審2人の3人の審判員で行われる。また、第4の審判員として4人目の審判員が充てられることもある。主審は有資格者の高体連役員の教員が行い、副審は対戦する当該校以外の大会参加校の有資格者が行う。そのほとんどの場合副審は生徒が行っている。生徒の審判員の多くは選手を兼ねて審判員を行っていて、審判員を望んで行っていない。それは生徒に限らず、主審を務める大人の審判員でも同様である。校務多忙の中で、審判員を行うことを主としていない。審判員は奉仕の精神で行っているものである。

その審判員に対して審判技術の向上を求める声は少なくない。高体連主催の大会はトーナメント形式であり1度の敗戦で大会敗退となる。部員、指導者はその大会で勝つことを目標として日々の部活動を行っていて、技術のある審判員のもとで試合を行いたいと思うものである。そうして、大会では無資格者が審判員をすることなく、有資格者のみが審判員を行うことと義務付けている。

サッカー審判員は4級審判員からはじまり、3級、2級、女子1級、1級というカテゴリーに分かれている。次の表は、サッカー審判員のそれぞれのカテゴリーの人数とその技能を表している。この表から上級審判員の人数が少なくなっていることがわかる。特にU-18では、4級が70,944人に対して、3級は627人となっており、その割合は0.9%ととても低い(一般での同割合は26.0%)ことがわかる。



ユース年代の3級審判員が少ない理由を考察する。

一つは必要性が少ないためである。ユース審判員が必要とされるのは地区大会の副審であり4級審判員で十分であり、3級審判員の資格を取得する必要性が少ない。

次に4級審判員取得者が各チームに数名しかいないためである。審判員の資格を取得する費用はサッカー部の部費で負担している学校も多くある。部員数が多い学校はそれだけ負担が多くなる。さらに、審判取得講習会の時期や定員に制限がある。高校の会場が抑えられるのは、主に学校の定期テスト前で他の部活動が活動しない時期になる。

級	人数	技能
1級	212人	JFAが主催するサッカー競技を担当することができる
女子1級	53人	JFAが主催・管轄する女子サッカー競技、もしくは2種・3種・4種の試合を担当することができる
2級	0-18：3,734名	地域サッカー協会が主催する試合を担当することができる
	U-18：8名	
	U-15：0名	
3級	一般：34,192名	都道府県サッカー協会が主催する試合を担当することができる
	U-18：627名	
	U-15：33名	
4級	一般：131,190名	都道府県サッカー協会を構成する支部、地区/市区郡町村サッカー協会の参加の団体、連盟等が主催するサッカー競技の試合を担当することができる。※4級審判員で特に優れていると都道府県サッカー協会の審判委員会が認めた審判員については、都道府県サッカー協会主催するサッカー競技の試合を担当することができる。
	U-18：70,944名	
	U-15：26,579名	

そのため会場を使用できる回数が限られる。東京都高体連では年に4回の新規取得講習会を開催している。しかし、各学校では定期テスト前では部活動の活動を禁じているところも多く、テスト前であるがゆえにその講習会に参加できない学校もある。審判講習会は実地型を基本とするが、コロナ禍の中で

審判年間登録料（東京都）					
審判員		JFA	地域FA	東京都FA	合計
3級	一般	3,000	300	2,000	¥5,300
	ユース	1,000	0	2,000	¥3,000
4級	一般	2,500	0	1,500	¥4,000
	ユース	500	0	1,500	¥2,000

の限定ではオンライン型での新規審判員資格取得も認められている。しかし、オンライン型では受講者監視や試験実施の観点から1回の受講人数が50人と定められており、多くの受講生を受けきれない。

2022年度の実地型での講習会は、4回中の2回がコロナ禍のため中止となり、オンライン型と併用して講習会を行った。講習会の実施回数が限られるため1度の審判講習会の参加可能人数は各校2名以内としている。そのため各校での4級審判員はすべての講習会に出たとしても年間に最大でも8人である。そのため各校での有資格の審判員が限られ、4級審判員が各校数名となる。

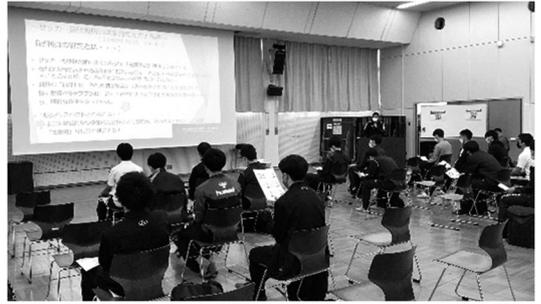
2022年度 東京都高体連主催サッカー審判員資格取得講習会							
所属協会	講習会形式	資格	講習区分	地区	講習会開催日	定員	合格数
東京都	オンライン型	4級	新規	高体連	2022/9/25	50	50
東京都	オンライン型	4級	新規	高体連	2022/9/25	50	33
東京都	オンライン型	4級	新規	高体連	2022/8/5	50	79
東京都	実地型	4級	新規	高体連	2022/7/10	150	183
東京都	オンライン型	4級	新規	高体連	2022/5/22	50	47
東京都	オンライン型	4級	新規	高体連	2022/5/22	50	35
東京都	オンライン型	4級	新規	高体連	2022/4/10	50	57
東京都	オンライン型	4級	新規	高体連	2022/2/27	50	51
東京都	オンライン型	4級	新規	高体連	2022/2/27	50	48
東京都	実地型	4級	新規	高体連	2022/1/16	80	87
合計						630	670

そのため各校での4級審判員はすべての講習会に出たとしても年間に最大でも8人である。そのため各校での有資格の審判員が限られ、4級審判員が各校数名となる。

次に3級審判員の昇級条件が挙げられる。東京都サッカー協会が定める3級昇級条件は①4級審判員の資格を有して半年以上であること②審判実績（主審8試合・副審5試合を含む計15試合）があることの2点である。しかし、ユース審判員が主審を行う機会が十分に与えられていない。高体連主催ではない公式リーグ戦もあるがそこでもユース審判員が主審をする機会は十分に与えられない。それは試合の勝敗を決定する判定をユース審判員に任せることは負担が大きいからである。審判員は選手に対して警告や退場を命じなければならないこともある。あつてはならないことだが選手、指導者から審判員が罵声を受けることもある。技術力や向上心が足りない審判員が公式戦の主審を行うことに寛容ではない環境がある。そのためユース審判員は主審よりも比較的負担の少ない副審を行うことは多いが、主審を行う機会が少ない。3級昇級に向けて向上心のある4級審判員でも、主審経験が規定に達することができない場合が多い。

審判員を前向きに目指す人材が少ない要因を考察する。ほとんどのユース審判員は選手としてサッカーに関わる中で審判員を行っている。各校では数名の審判員を有しているが、その選出方法に問題を抱えている学校も多い。審判員を行う意義目的を顧問の先生が正しくと伝えないと、審判員になることがあたかも罰ゲームの

ように捉えてしまう。加えて、試合中に罵声を受けると審判をやりたくなくなる。また、部員数が少ない学校は、審判を行った直後に自分が公式戦に選手として出なければならず、試合前の十分な準備ができないまま試合に臨んでいる。それを避けるために試合に出ない選手から審判員を選ぶチームも多い。しかし、試合に出ずに審判をすることが嫌でサッカー部を退部してしまう部員もいる。そのため敢えて試合に出るメンバーから審判員を選出したり、中には主将が審判員を行うチームもある。副審をコーチや顧問の先生が行うチームもある。



東京都高体連サッカー専門部審判部は、各校のサッカー部の顧問の教員で運営している。活動内容は、審判資格取得講習会の開催、高体連主催の公式戦の審判の割当、有資格者の審判員向けの講習会の開催、若手審判員の育成など多岐にわたる。高体連の活動は高体連で行うことを原則とし、公式戦の審判は審判部の人も行うが全員体制で行っている。毎年、若手の役員から強化審判員を10～20名ほど選出し、都大会などで積極的に審判員を務めてもらい、上級審判員がアセスメント（審判員に対するアドバイス）をしている。そう



して、若手の審判員の技術を高め、上級審判員の資格をとるように導いている。ユース審判員に対しては高い技術で判定できるように有資格者に対して副審研修会を開催している。さらにレベルを高めたいユース審判員に対しては、東京都の選抜メンバーで構成される研修大会でも主審や副審を行ってもらい、上級審判員からアセスメントを行っている。そうして、向上心のあるユース審判員が上級審判員を目指せる環境を整えている。



まとめ

(1) ユース審判員が育っていくための弊害となる環境について

- ① 3級取得の必要性が少なく、3級昇級する審判員が少ない。
- ② 各チームの4級審判員の人数が限られる（費用、部員数、講習会の時期・回数）
- ③ ユース審判員が主審をする機会が少なく、昇級条件に達しない。
- ④ 審判員の判定に対する罵声がある。
- ⑤ 選手として大会の試合に出場しづらい環境がある。

{2} 審判員を育てる環境整備について

- ① ユース3級審判員を増やす活動をする。
- ② 副審研修会を開催し、審判技術向上をする。
- ③ 審判員の判定の受諾をするように注意喚起していく。
- ④ 大人（教員）の審判員の技術も向上させていく。

2. サッカー審判員に対する質問の回答について

今回、審判員の現状の調査として東京都高体連サッカー専門部に加盟しているサッカー部顧問の先生方にアンケートを実施した。その結果を以下に記す。

- (1) 対象 : 東京都高体連サッカー専門部加盟校の顧問教諭
- (2) 期間 : 2023年11月～12月
- (3) 調査方法 : Google Formsによるアンケート形式
- (4) 回答高校数 : 103校

1. 公式戦（大会・リーグ戦など）で審判員に感謝している

とてもそう思う（87.4%）、そう思う（10.7%）

- ・忙しい中、貴重な時間を割いて審判を行ってもらっているため（多数）
- ・家庭や仕事の事情がある中でも審判を優先して行ってもらっているため（多数）
- ・自チームの試合の直前、直後でも審判を行ってもらっているため（多数）
- ・自チームの試合がなくても会場に赴き審判を行ってもらっているため（多数）
- ・サッカーのゲームは審判員がいて成り立つものであるため（多数）
- ・公正なジャッジを行ってくれるため（多数）
- ・やらない（できない）学校がある中でも行ってもらっているため
- ・時にはジャッジに不平不満を態度に表す選手、指導者、観客（保護者など）がいることを理解したうえで引き受けてもらっているため
- ・体力的にも精神的にも、負担がある中でも引き受けてくれているため
- ・高いレベルの審判員の方が多くいるため
- ・主審は専門委員の先生方のみで行ってもらっているため
- ・自チームの人数が少なく、審判員を当該校から出さないことで助かるため
- ・成長の場になっていて、それも含めて教育になっているため

あまりそう思わない（1.0%）、そう思わない（0%）、その他（1.0%）

- ・自分自身が都大会や地区大会での審判をよく行っており、必要以上に感謝はしていない。お互い様だと思っている。
- ・審判員もサッカーを構成する一員なので、誰もがやるべきだし特別な感謝というのはなく、お互い尊重しながらゲームを進められるようにしたい。

2. ユース審判員（副審）に問題を感じていない（自チーム、他チーム含めてお考え下さい）

とてもそう思う（17.6%） そう思う（41.2%） あまりそう思わない（23.5%） そう思わない（8.8%） その他（8.8%）

3. ユース審判員も主審を行っていくべきだ

とてもそう思う（12.6%） そう思う（32.0%） あまりそう思わない（35.0%） そう思わない（10.7%） その他（9.7%）

4. 公式リーグ戦（地域リーグ、Tリーグなど）の主審は第3者が行うべきだ

とてもそう思う（22.3%） そう思う（41.7%） あまりそう思わない（27.2%） そう思わない（5.8%） その他（1.9%）

5. 審判員（ユース、大人を含めて）は上達すべきだ

とてもそう思う（29.1%） そう思う（60.2%） あまりそう思わない（8.7%） そう思わない（0%） その他（1.9%）

6. 判定の間違いは仕方がないと思う

とてもそう思う（35.0%） そう思う（45.6%） あまりそう思わない（8.7%） そう思わない（0%） その他（1.9%）

7. 自チーム内の帯同ユース審判員（有資格者）について

足りている（20.4%） 足りているがもう少し多くの部員に資格を取らせたい（39.8%）

足りているがもっと多くの部員に資格を取らせたい（20.4%） 足りていない（15.5%）

どちらともいえない（2.9%） その他（1.0%）

8. 自チームの帯同ユース審判員（有資格者）を選出に苦慮している

とてもそう思う（25.2%） そう思う（34.0%） あまりそう思わない（29.1%） そう思わない（11.7%） その他（0%）

9. 自チームの帯同ユース審判員の選出方法があれば記述してください。

指名制

- ・顧問から指名で選出している
- ・経験者で信頼がおける選手から選出している
- ・試合に関わらない選手から選出している
- ・レギュラーメンバー外の選手、もしくは審判経験者や多少知識がある選手から選出している
- ・トップチームになりうる選手とそれ以外の選手から数名ずつ選出している
- ・スポーツ推薦で入学してきた選手に取得させている
- ・部長や主将など責任感のある人物からしか任せられないので難しい
- ・人物を見極めて複数の部員に取得させ、ローテーションしている
- ・レフリーが上手な選手から選出している
- ・信用できる選手から選出している
- ・まじめで成長が見込める選手から選出している

チーム内での話し合い、または立候補

- ・チーム内で話し合いをして選出している
- ・年度初めに生徒同士で部内の役割分担を話し合って選出している
- ・希望者を募っている

- ・講習会を分けて希望者全員4級取得できるようにしている
- ・ユース審判の意義や必要性を説明して、立候補で選出している
- ・希望性が出ない場合は顧問から指名している
- ・チーム内で話し合いをして選出させ、最終的に顧問が相応しいか判断する（多数）
- ・1年生を中心に選出しているが、部員が少ないため2年生からも選出している
- ・以前はじゃんけんやくじ引きで選出していたが罰ゲームのようになってしまったことがあったため、審判員選出の意義を顧問から説明し「役割」として選出するようにマネジメントしている。

全員取得

- ・2年生での審判更新は希望制にしているが、1年生は全員取得させている。
- ・全員に取得させている

その他

- ・くじ引き
- ・帯同審判をコーチが担当している

1 0. 審判講習会について（複数回答可）

- ・4級審判員新規取得講習会の回数を増やしてほしい（51.5%）
- ・4級審判員新規取得講習会の1回の人数枠を増やしてほしい（60.8%）
- ・3級審判員昇級講習会を高体連で開催してほしい（17.5%）
- ・有資格者向けの研修会を開催してほしい（10.3%）
- ・その他（4.1%）

1 1. 記述回答

ユース審判員について

- ・審判をやりたい高校生はたくさんいるため、主審も積極的にやらせて文句を言わず見守る環境を作るべきである。また、試合後に実地でのレクチャーがあればユース審判員の技術力も上がっていく。
- ・ある程度の経験や顧問、専門委員の推薦があれば、ユース審判員の主審も良い。
- ・ユース審判員はできる限りリーグ戦での育成をするべきである。上位の試合やトーナメントだとより重圧が強く、審判活動が嫌になってしまう生徒が出てしまう。ただし、高い意識を持ち3級を有しているユース審判員などは別です。
- ・ユース審判員は上手い下手よりも、一生懸命に取り組むことが絶対条件で、帯同審判を嫌々行う姿勢があると困る。
- ・現状ユース審判員が同世代の公式戦で勝敗を決するジャッジを行うのは重圧が重すぎると考える。
- ・4級の資格のないユースも副審であれば公式戦を行わせても良いと考える。講習会を増やして受講料も安くして資格を取りやすくする。裾野を広げて意欲がある審判員を育成するシステムができると良い。
- ・ユース審判員の難しさとして、人数の少ないチームは、自分の試合後にそのまま審判をすることになり、コンディションや集中力などを保つことが挙げられる。
- ・今はインターネット上にも試合がアップされる時代なので生徒が審判をしたときに、何かあって炎上や拡散などした場合などのリスクマネジメントも必要だと感じる。

第3者が審判を行うことについて

- ・リーグ戦の第三者の審判については、可能ならそのようにしたほうが良いと思うが、グラウンド確保、審判員確保が先にある課題かと思えます。
- ・リーグ戦は本来ホーム&アウェイで行われるもの。ホームチームが運営、審判も用意できると望ましい。
- ・上位のリーグは別として第三者の審判でやる必要はないと考える。
- ・人件費の問題など難しい状況であるが、公式リーグ戦の主審、副審は第3者が行うことが望ましい。
- ・先生方の負担を減らすために大会参加費を高くしてでも第三者の主審を入れるべきだと思います。
- ・リーグ戦に関しても当該チーム同士で出すとなると明らかな警告でもカードが出しづらく、そこから選手の不満も出てきてしまっている。

判定の間違えについて

- ・審判業務を中心として生活していない方が一生懸命やってもらっている中で判定の間違えが起きてしまうことは仕方ないと思っている。
- ・競技規則で定められている内容の間違えはしてはいけないが、その判定が正しいとその場で判断してジャッジしている審判員の判定は尊重されるべきだと思う。
- ・判定の間違えは誰にでもあるが、間違えを仕方ないで済ませてはいけない。間違えをしないようなレフェリングをすることが重要で、どうしたら間違えが少なくなるかを検討し、指導していくべきである。
- ・チームの指導者が文句を言うのが一番育成の足を引っ張っていると思う。
- ・判定にはリスペクトをしているつもりだが、残念ながら未熟な審判員が見受けられる。試合後に、多少なりとも審判員とお互いの向上を目指し意見交換ができると良いと思っている。

審判講習会について

- ・審判講習会の開催日が行事や試験前に当たることが多く困っている。
- ・ユース審判員4級の受講費用が高い。グラスルーツ宣言に逆行している。
- ・資格に関係なく、副審ができるような研修の回数と参加人数を増やしていただきたいです。

- ・審判講習会で毎回2名を上限に申し込みをしているが、その2名の選出や有資格者が公式戦の時に急病で来られなくなるなどの時に対応に追われるため人数枠を増やしてほしい。
- ・審判講習会の1回の人数を増やしてほしい。1日程で多くの人数を講習に行かせられると予定も組みやすく、有資格者が一気に増えることで大会の帯同審判員も決めやすくなる。また、多くの生徒が審判講習を受けることでサッカーのルールの再認識から試合が円滑に進みやすくなるように思う。

□ その他

- ・審判割当にはもっと多くの人が協力するべきである。審判員をやらない（やれない）というスタンスの人が多くいると感じる。
- ・審判活動は感謝されづらい環境にあると思う。
- ・今の若手の先生が当たり前のように審判員をやらずに大会だけ参加しているのは寂しく感じる。
- ・公式戦の主審は必ず3級審判員以上の人が行うべきだと思う。

3. 今後の審判員が活躍するために

ユース審判員が大きな責務のある審判員の役割を担うことは教育上の意味がある。多くの生徒が選手と兼ねて審判員も行うことでサッカーに対する理解が深まり、選手としても成長ができる。

この審判員を行う意義目的が正しく伝わるべきであり、審判員をやりたいと思われないような過度の指導や非難があると、審判員が育たない。それが起こらないように指導者や選手は審判員に対してリスペクトの精神を持ち続け、理解のある対応をするべきである。審判員が判定を誤ることもあるが、異議や過度のアピールは間違いであることを選手も指導者も理解しなければならない。

同時に審判員もより高い技術をもつように目指すべきである。そのために、より多くの試合で上級審判員からアセスメントをもらい、技術向上の講習会に積極的に参加していくべきである。勝ち負けに関わらずチームの代表者と審判員が試合後に話し合いをできるような環境もできると良い。

私は東京都高体連サッカー専門部で審判員資格取得講習会の事務局を行っている。また、自分自身も審判員の活動をしていて、ユース審判員と関わりを持つことも多い。ユース審判員に資格を取得させることやアドバイスをすることで、より良い審判員になる姿を多く見ている。審判員はどんどん成長し、技術を高められる。その芽を摘まないように、選手、指導者、審判員のすべての人がお互いにリスペクトをして、高いレベルの心が震えるような試合が多く行われることを強く望む。



引用文献

- 1) パワーフェードに願いを込めて：サッカーの歴史

https://ashitaka80.blog.jp/archives/cat_50016158.html

- 2) JFA | 公益財団法人日本サッカー協会 <https://www.jfa.jp>

- 3) TFA | 公益財団法人 東京都サッカー協会 <https://www.tokyofa.or.jp/>

東京都高等学校体育連盟「研究部」規約

第一章 名称及び事務局

- 第1条 本研究部（以下「本部」という）は、東京都高等学校体育連盟研究部と称する。
第2条 本部の事務局は、会長指定の高等学校におく。

第二章 目的

- 第3条 本部は、東京都高等学校体育連盟が教育活動の一環として実施する体育・スポーツ活動に関する調査並びに研究を行い、その発展に寄与することを目的とする。

第三章 事業

- 第4条 本部は、前条の目的を達成するために、次の事業を行う。
1) 競技力向上、普及振興、安全対策に関する調査研究
2) 研究会並びに講習会の開催
3) その他本部の目的達成に必要な事項

第四章 組織及び委員

- 第5条 本部は、各競技専門部及び定通制部から選出された委員を以て組織する。
委員の任期は、2カ年とし、再任は妨げない。

第五章 役員

- 第6条 本部に下記の役員をおく。
1) 部長 1名
2) 副部長 2名（1名は委員長及び本連盟の常任理事を兼ねる）
3) 常任委員 10名
4) 監事 2名
第7条 役員は、委員会において選出する。
第8条 役員の任務
1) 部長 部長は、本部を代表し、会務を統括する。
2) 副部長 副部長は、部長を補佐し、部長事故ある時はその職務を代行する。
委員長を兼ねる副部長は、会務を執行する。
3) 常任委員 常任委員は、会務の企画、運営にあたる。
4) 監事 監事は、本部の会計を監査する。
第9条 役員の任期は、2カ年とし、再任は妨げない。補充によって就任した場合は、前任者の残任期間とする。

第六章 会議

- 第10条 委員会は、委員を以て構成し、必要事項を審議決定する。
第11条 常任委員会は、役員を以て構成する。常任委員会は、部長が招集し、必要事項を審議する。なお、緊急事項が生じた場合は、常任委員会で審議決定し執行する。
執行内容については、委員会に報告しなければならない。

第七章 会計

- 第12条 本部の経費は、本連盟の一般会計・研究部費、その他を以てこれにあてる。
第13条 本部の会計は、毎年4月1日に始まり、翌年3月31日に終わる。

第八章 附則

- 第14条 本規約は、本連盟常任理事会の議決を得て変更することができる。
第15条 本規約は、平成13年11月16日より施行する。
(経過) 1. 平成19年4月26日 第一次改定
2. 平成21年4月18日 第二次改定

役員を選出に関する細則

- 1) 部長は、都内高等学校長より選出する。
- 2) 副部長2名（1名は委員長及び常任理事を兼ねる）は、委員の互選により選出する。
- 3) 常任委員は、委員の互選により10名を選出する。
(各分科会代表3名、団体種目系3名、個人種目系2名、武道系2名)
- 4) 委員は、各専門部・定通制部の互選とする。(各専門部より若干名、定通制部より1名)
- 5) 監事は、委員の互選とする。

- ①都高体連の両輪とは、「研究部」と「専門部」とあるという考えのもと、その活動を活性化していく。
- ②研究部規約は、平成 13 年 11 月 16 日より施行されており、委員の任期は 2 ヶ年で、平成 13 年 14 年そして平成 15 年 16 年、平成 17 年 18 年、平成 19 年 20 年となっている。平成 28 年度現在、各専門部において、任期がずれることも多く見られる。
- ③実質的な活動は、平成 14 年からで、会報発行が中心であった。この年に、全国総体において、各県の研究部の実情を調査した。
- ④関東において、東京だけが研究大会を実施していなかったため、平成 16 年 2 月 28 日に、東京都の研究大会開催に向けて準備を進めたが、実施にはいたらなかった。
平成 16 年度に、第一回都高体連研究大会を実施。毎年実施中。
- ⑤平成 15 年度の全国研究大会において、空手道専門部が発表を行った。3 年に 1 度、発表予定である。
平成 18 年度は、サッカー専門部が発表した。平成 21 年度は、剣道専門部が発表した。平成 24 年度は、空手道専門部が発表した。平成 28 年度は、少林寺拳法専門部が発表した。令和 2 年度はソフトボール専門部が発表をする。
- ⑥平成 15 年 16 年に全国高体連研究部監事(都高体連研究部委員長)となり、常任委員会などの会議に出席。
平成 17 年(香川大会)18 年(茨城大会)は、全国高体連研究部事務局(部長・事務局長・事務局次長)を担当。
- ⑦平成 16 年度より、研究部の発展的な活動の為に、都高体連の予算活用をし、その会計処理も研究部で行う。予算上の金額は 20 万円程度であるが、予備費からの支出も可能。
平成 17・18 年度は 50 万円が予算化され、平成 19 年度は 100 万円、平成 21 年度は 120 万円、平成 22 年度は 110 万円、平成 23 年度は 100 万円が予算化された。
全国高体連研究大会への都高体連研究部からの派遣に関わる諸経費は、都高体連より支出される。平成 28 年度より、全国高体連活性化委員会へのオブザーバー参加は、その交通費(実費)を東京都高体連から支出するものとする。
- ⑧研究部の会議は、勤務時間外に行うものとする。
- ⑨役員選出に関する細則の 3)の団体種目系・個人種目系・武道系の分類は、次の通りとする。
- 団体種目系 計 14
 バasketボール 男・女 バレーボール 男・女 ソフトボール
 軟式野球ラグビー サッカー ハンドボール アメリカンフットボール
 ホッケー 登山 ボート チアリーディング
- 個人種目系 計 15
 陸上 男・女 体操 男・女 ソフトテニス 男・女 スキー
 スケート 卓球 男・女 バドミントン 水泳 テニス
 自転車競技 ウエイトリフティング
- 武道系 計 12
 柔道 剣道 相撲 弓道 レスリング ボクシング
 ライフル射撃 フェンシング 空手道 アーチェリー
 なぎなた 少林寺拳法
- ⑩研究部における業務を、会計、紀要作成、研究大会運営、総務の 4 つの業務に分担する。
- ⑪令和 5 年度より令和 11 年度までの期間、副委員長を 2 名とする。
令和 11 年、東京都研究大会開催予定。東京都研究部においては研究の活性化と研究部員の研究大会運営業務の把握は今後も課題。東京都研究部員間で業務を分担することや全国大会運営の実態を複数人で把握することは必要。これらのことを踏まえ、研究部のこれからの業務を検討するために副委員長を 2 名とする。
- ⑫「東京都高等学校体育連盟研究大会における発表団体についての申し合わせ」
これまでと同様に研究部各分科会内で調整して各分科会から研究発表する。また、各競技種目からも研究発表する。各競技団体の発表年度は下記表の通りとする。なお、各競技団体からの研究発表は令和 5 年度から行う。

東京都高体連研究部 競技団体表題提出順

	競技団体目	第一分科会	第二分科会	第三分科会	
1	陸上	○			令和5年度
2	体操		○		
3	バスケットボール			○	
4	バレーボール	○			
5	ソフトテニス		○		
6	ソフトボール			○	
7	スキー	○			令和6年度
8	スケート		○		
9	卓球			○	
10	軟式野球	○			
11	ラグビー		○		
12	サッカー			○	
13	ハンドボール	○			令和7年度
14	アメリカンフットボール		○		
15	バドミントン			○	
16	柔道	○			
17	剣道		○		
18	水泳			○	
19	相撲	○			令和8年度
20	弓道		○		
21	レスリング			○	
22	ホッケー	○			
23	テニス		○		
24	ウエイトリフティング			○	
25	登山	○			令和9年度
26	ボクシング		○		
27	ボート			○	
28	自転車競技	○			
29	ライフル射撃		○		
30	フェンシング			○	
31	空手道	○			令和10年度
32	アーチェリー		○		
33	なぎなた			○	
34	少林寺拳法	○			
35	チアリーディング		○		
36	定通部・通信			○	

第一分科会：競技力向上 / 第二分科会：健康・安全 / 第三分科会：部活動の活性化

(ローテーション導入の趣旨)

- ・発表機会の均一化、発表の活性化を図る。
- (申し合わせ事項)
- ・東京都研究大会における発表は、各分科会からの発表(公募3題)と各競技団体からの順番での発表(6題)。合計で9題の発表を予定する。
- ・令和5年度より実施し、令和10年度に発表ローテーションについての見直しを実施する。
- ・発表に際しては、常任委員会において、発表内容の修正・調整を依頼することがある。

東京都高等学校体育連盟

<研究部>

組織と名簿

令和4年度

2022年

役職名	氏名	専門部	所属	勤務校	〒	所在地	電話	FAX	研究部役職	教科
部長	小宮徳健	柔道		都立六本木	106-0032	港区六本木6-16-36	03-5411-7327	03-5411-7367	都高体連副会長	保健体育
副部長 (委員長)	田中康之	サッカー	団体	都立松が谷	192-0354	八王子市松が谷1772	042-676-1231	042-675-1237	都高体連常任理事	保健体育
副部長 (副委員長)	阿部一臣	ソフトテニス女子	個人	都立高島	175-0082	板橋区高島平3-7-1	03-3938-3125	03-338-4057	第1分科会チーフ	英語
常任委員	阿部一臣	ソフトテニス女子	個人	都立高島	175-0082	板橋区高島平3-7-1	03-3938-3125	03-338-4057	第1分科会チーフ	英語
〃	堀越和彦	自転車競技	個人	日本学園	156-0043	世田谷区松原2-7-34	03-3322-6331	03-3327-8987	第2分科会チーフ	英語
〃	津田弘毅	バドミントン	個人	都立調布南	182-0025	東京都調布市多摩川6-2-1	042-483-0765	042-483-7091	第3分科会チーフ	理科
〃	森 政憲	サッカー	団体	桐朋	186-0004	国立市中3-1-10	042-577-2171	042-574-9898		保健体育
〃	奥 正克	ハンドボール	団体	都立小金井北	184-0003	小金井市緑町4-1-1	042-385-2611	042-382-9522		地歴
〃	杉本直志	サッカー	団体	杉並学院	166-0004	杉並区阿佐谷南2-30-17	03-3316-3311	03-3316-3310		数学
〃	征矢範子	陸上競技男子	個人	筑波大学附属	112-0012	文京区大塚1-9-1	03-3941-7176	03-3943-0848		保健体育
〃	秋月 隼	弓道	武道	都立美原	143-0012	大田区大森東1-33-1	03-3764-3883	03-3764-3854		理科(化学)
〃	藤澤健幸	柔道	個人	成蹊	183-8633	武蔵野市吉祥寺北町3-10-13	0422-37-3818	0422-37-3863		保健体育
〃	眞鍋 健治	少林寺拳法	武道	桜丘中学・高等学校	114-8554	北区滝野川1-51-12	03-3910-6161	03-3949-0677		保健体育
会計	新井理仁	ソフトボール	団体	都立第一商業	150-0035	渋谷区鉢山町8-1	03-3463-2606	03-3463-2050		英語
監事	松里 亮	軟式野球	団体	東洋大学京北	112-8607	文京区白山2-36-5	03-3816-6213	03-3816-6217		国語
〃	藤岡純也	卓球女子	個人	都立東村山西	189-0024	東村山市富士見町5-4-41	042-395-9121	042-392-7276		国語

令和3年度

2021年

氏名	専門部	所属	勤務校	〒	所在地	電話	FAX	前年度役職	教科
征矢範子	陸上競技男子	個人	筑波大学附属	112-0012	文京区大塚1-9-1	03-3941-7176	03-3943-0848	常任委員	保健体育
曾根原龍大	陸上競技男子	個人	日本大学豊山	112-0012	文京区大塚5-40-10	03-3943-2161	03-3943-1991		数学
黒須崇仁	陸上競技女子	個人	江戸川女子	133-8552	江戸川区東小岩5-22-1	03-3659-1241	03-3659-4994		保健体育
杉浦翔太	ボクシング	武道	都立隅田工業	135-0004	江東区森下5-1-7	03-3631-4928	03-3846-6683		工業(電気)
橋本美月	バレーボール女子	団体	都立狛江	201-8501	狛江市元和泉3-9-1	03-3489-2241	03-3489-4312		保健体育
阿部一臣	ソフトテニス女子	個人	都立高島	175-0082	板橋区高島平3-7-1	03-3938-3125	03-338-4057	第1分科会チーフ	英語
佐藤大輔	体操男子	個人	青峰学園特別支援学校	198-0014	東京都青海市大門3-12	0428-32-3811	0428-32-3841		保健体育
新井理仁	ソフトボール	団体	都立第一商業	150-0035	渋谷区鉢山町8-1	03-3463-2606	03-3463-2050	会計	英語
奥 正克	ハンドボール	団体	都立多摩科学技術	184-0003	小金井市本町6-8-9	042-381-4164	042-381-4169	常任委員	地歴
田中康之	サッカー	団体	都立松が谷	192-0354	八王子市松が谷1772	042-676-1231	042-675-1237	委員長	保健体育
松里 亮	軟式野球	団体	東洋大学京北	112-8607	文京区白山2-36-5	03-3816-6213	03-3816-6217		国語
福田昌敏	バスケットボール女子	団体	江戸川女子	133-3659	江戸川区東小岩5-22-1	03-3659-1241	03-3659-4994		保健体育
高部兼太郎	ウエイトリフティング	個人	日大鶴ヶ丘	168-0063	杉並区和泉2-26-12	03-3322-7521	03-3325-0203		保健体育
森政憲	サッカー	団体	桐朋	186-0004	国立市中3-1-10	042-577-2171	042-574-9898	常任委員	保健体育

氏名	専門部	所属	勤務校	〒	所在地	電話	FAX	前年度役職	教科
ウォールボール	ホッケー	団体	早稲田大学高等学院	177-0044	練馬区上石神井3-31-1	03-5991-4151	03-3928-4110		英語
堀川祐司	水泳	個人	都立練馬	179-0074	練馬区春日町4-28-25	03-3990-8643	03-3926-8373		保健体育
眞鍋健治	少林寺拳法	武道	桜丘中等学校	114-8554	北区滝野川1-51-12	03-3910-6161	03-3949-0677	常任委員	保健体育
今井 純	男子バスケットボール	団体	大東文化大学第一	175-8571	板橋区高島平1-9-1	03-5399-7890	03-5399-7891		地歴公民科
糸園容子	アーチェリー	個人	都立第四商業	176-0021	練馬区貫井3-4-5-1-9	03-3990-4221	03-3926-7040		英語
堀越和彦	自転車競技	個人	日本学園	156-0043	世田谷区松原2-7-34	03-3322-6331	03-3327-8987	第2分科会チーフ	英語
坂入 崇	卓球男子	個人	都立白鷗	111-0041	台東区1-6-22	03-3843-5678	03-3841-6925		公民科
藤岡純也	卓球女子	個人	都立八王子北	189-0024	八王子市檜原町6-0-1	042-626-3787	042-627-0174		国語
高田丈裕	レスリング	武道	日本工業大学駒場	153-8508	目黒区駒場1-35-32	03-3467-2130	03-3467-2165		保健体育
上村 謙	フェンシング	武道	本郷	170-0003	豊島区駒込4-11-1	03-3917-1456	03-3917-0007		国語
秋月 隼	弓道	武道	都立美原	143-0012	大田区大森東1-33-1	03-3764-3883	03-3764-3854	常任委員	理科(化学)
藤澤健幸	柔道	個人	成蹊	183-8633	武蔵野市吉祥寺北町3-10-13	0422-37-3818	0422-37-3863	常任委員	保健体育
六車健吉	ライフル射撃	武道	明治大学付属中野	164-0003	中野区東中野3-3-4	03-3362-8704	03-3368-3113		芸術(美術)

氏名	専門部	所属	勤務校	〒	所在地	電話	FAX	前年度役職	教科
中島弘貴	テニス	個人	富士見	176-0023	練馬区中村北4-8-26	03-3999-2136	03-3999-2129		社会(公民)
平野真央	体操女子	個人	大妻女子	102-8357	千代田区三番町12	03-5275-6057	03-5275-6093		保健体育
稲井祥紀	ソフトテニス男子	個人	都立昭和	196-0033	昭島市東町2-3-21	042-541-0222	042-546-0150		数学
北島裕章	バレーボール男子	団体	駒場東邦	154-0001	世田谷区池尻4-5-1	03-3466-8221	03-3466-8225		保健体育
畑山裕幸	スケート	個人	明治大学付属中野	164-0003	中野区東中野3-3-4	03-3362-8704	03-3368-3113		地歴公民
梶浦修平	ボート	団体	都立日本橋	131-0041	墨田区八広1-28-21	03-3617-1811	03-3612-5396		国語
杉本直志	サッカー	団体	杉並学院	166-0004	杉並区阿佐谷南2-30-17	03-3316-3311	03-3316-3310	常任委員	数学
中村豪介	アメリカンフットボール	団体	麻布	106-0046	港区元麻布2-3-29	03-3446-6541	03-3444-2337		保健体育
君塚善宏	柔道	武道	巣鴨	170-0012	豊島区上池袋1-21-1	03-3918-5311	03-3918-5305		保健体育
松坂輝夫	剣道	武道	都立墨田川	131-0032	墨田区東向島3-34-14	03-3611-2125	03-3612-6123		英語
児玉朋生	相撲	武道	明治大学付属中野	164-0003	中野区東中野3-3-4	03-3362-8704	03-3368-3113		英語
田中鶏郎	なぎなた	武道	文化学園大学杉並	166-0004	杉並区阿佐谷南3-48-16	03-3392-6636	03-3391-8272		数学
齋藤 潤	レスリング	個人	日体大桜華	189-0024	東村山市富士見町2-5-1	042-391-4133	042-392-6424		保健体育
櫻井幹久	登山	団体	安田学園	130-8615	墨田区横網2-2-25	03-3624-2666	03-3624-2668		地歴
渡部絹江	チアリーディング	団体	都立文京	170-0001	豊島区西巢鴨1-1-5	03-3910-8231	03-3915-9886		保健体育
津田弘毅	バドミントン	個人	都立調布南	182-0025	東京都調布市多摩川6-2-1	042-483-0765	042-483-7091	第3分科会チーフ	理科
滝田裕幸	スキー	個人	麻布	106-0046	港区元麻布2-3-29	03-3446-6541	03-3444-2337		英語
田草川直希	ラグビー	団体	都立墨田工業	135-0004	江東区森下5-1-7	03-3631-4928	03-3846-6638		数学

令和5年度 東京都高等学校体育連盟 研究部 調査用紙

専門部名

--

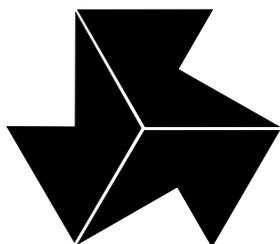
◎令和5年度・令和6年度の2年任期を原則とし、任期の継続をお願いします。
 なお、研究部員は、専門部から複数名出していただくことも可能です。
 ※印欄の内容は、委員名簿には掲載しませんが、事務連絡に使用させていただきます。
 たいので、ご記入下さい。
 ※E-mailでの連絡体制にご協力ください。

研究部員	よみがな		携帯電話番号 ※	
	氏名		メールアドレス ※	
	勤務先学校名		E-mail アドレス ※	
	勤務先〒	勤務先住所	(担当教科)	
	勤務先電話番号		勤務先Fax	
	所属希望分科会	第一希望に◎ 第二希望に○	・第1分科会(競技力向上) ・第2分科会(健康安全) ・第3分科会(部活動活性化)	
研究活動	都高体連研究活動 (研究発表など)に協力いただいた専門部		フェンシング、空手道、剣道、柔道、ホクシング、少林寺拳法、弓道、相撲、サッカー、男子バレーボール、男子バスケットボール、女子バスケットボール、ラグビー、アメリカンフットボール、ソフトボール、ハンドボール、ホッケー、軟式野球、テニス、アーチェリー、陸上競技、水泳、バドミントン、スケート、体操男子、ボート	
	令和5年度以降に、ご協力をお願いしたい専門部		バレーボール女子、スキー、ウエイトリフティング、自転車競技、卓球女子、レスリング、ライフル射撃、体操女子、ソフトテニス男子、ソフトテニス女子、なぎなた、登山	
	ご協力(専門部として研究発表)の予定		令和5年度 令和6年度 令和7年度 ※○印を	
専門部報告	(競技力向上の取組み)			
	(健康安全面での取組み)			
	(部活動活性化＝普及活動での取組み)			
	(専門部として取り組んでいる研究)			

提出期限 令和5年4月6日(木) 令和5年度 東京都高体連研究部委員会 開催予定日 令和5年4月下旬

提出先 研究部(名簿係) 森 政憲 桐朋高校 042-577-2171
 E-mail ms.mori@toho.ed.jp

◇この調査内容は、原則、E-mailで、ご報告願います。
 ※この研究調査用紙は、東京都高体連ホームページからダウンロードできます。
 3月24日(木)以降にアップ予定です。



令和4年度
第57回全国高等学校体育連盟
研究大会紀要

「たぎる情熱 あふれる魅力」

～ 部活で創る 明るい未来 ～

期	日	令和5年1月12日(木)・13日(金)
会	場	ホクト文化ホール(長野県県民文化会館)
主	催	公益財団法人全国高等学校体育連盟
共	催	読売新聞社
後	援	スポーツ庁 長野県教育委員会 長野市教育委員会 長野県高等学校長会
主	管	公益財団法人日本教育公務員弘済会長野支部 公益財団法人全国高等学校体育連盟研究部 長野県高等学校体育連盟

課題研究

1 発表

全国高体連研究部の活性化のために
ー活性化委員長としての12年間の記録と部活動改革への思いー

【発表者】 筑波大学附属高等学校 中塚 義実
(全国高等学校体育連盟 研究部活性化委員会 元委員長)

2 調査報告

令和3年度「各都道府県研究部の組織と活動概要」
第3回調査報告書

【発表者】 千葉県立千葉西高等学校 宮川 明
(全国高等学校体育連盟 研究部活性化委員会 委員長)

全国高体連研究部の活性化のために

－活性化委員長としての12年間の記録と部活動改革への思い－

全国高等学校体育連盟 研究部活性化委員会 元委員長（2008～19年度）

筑波大学附属高等学校 保健体育科教諭

中塚 義実

I. はじめに

1987年の着任以来、異動もなく35年が経過し、2022年3月で定年を迎えた。再雇用者として4月以降も同じ学校に勤務するが、高等学校体育連盟（高体連）研究部の業務からは離れることとなった。

2022年2月の第18回東京都高体連研究大会で「東京都高体連研究部の活性化のために－高体連研究部との20年のかかわりの「記録」と「思い」と題して報告することになった。あいにく研究大会はコロナ禍で中止となったが、新年度の委員が集まるタイミングで、短時間ではあるが話をする機会が得られた。

同報告は東京都高体連のホームページに掲載されている。

https://www.tokyo-kotairen.gr.jp/wp-content/uploads/2022/03/R3kiyou_merged.pdf

このことがあったからか、新メンバーで組織された全国高体連研究部活性化委員会より、第57回全国研究大会（長野）での発表打診があった。長年お世話になった研究部への恩返しの機会でもある。「活性化委員長としての12年間の記録と部活動改革への思い」について、委員長となる前からの研究部とのかかわりや、私自身の学校現場での取り組みにも言及しながら報告させていただきたい。

注) 原則として本文中の個人名は敬称略。肩書や所属は当時のまま。年号は西暦を用いる。

II. 東京都高体連研究部・研究大会創設のころ

1. 研究部創設以前（1980年代後半～1990年代）

東京都高体連サッカー専門部内に「サッカー科学研究会」という名の組織が立ち上がったのは1995年度のことである。発起人は喜熨斗勝史（都立杉並工業^{注1)}、小澤治夫（筑波大学附属駒場中・高^{注2)}と私である。東京教員サッカークラブのチームメイト（当時の私は監督兼選手）であった喜熨斗氏から勉強会の構想を持ち掛けられた私は、当時すでにいくつかの研究会に属していたのであまり乗り気ではなかったが、「小澤さんが乗ってくれるのなら、専門部の総会で承認してもらってしっかりやろう」と逆提案した記憶がある。筑波大学附属学校同士で交流が深かった小澤氏は、現場にしながら医学博士を取得された学究肌の指導者で、高校の指導現場に科学的な手法を取り入れ積極的に情報発信される方である。やるのなら「勝手にやっている」と思われるものでなく、しっかりした形にしたかったのである。1995年1月の全国高校サッカー選手権大会の運営の合間に話を進め、3月の総会で承認、4月に会員を募集することになった。

4月の総会で希望者に名前と住所を書いてもらい、年会費1,000円を徴収する。いまとは異なりEメールはないので、会員には毎月葉書で月例会案内を送った。代表兼事務局は私である。職場の同僚には各分野の研究会を主宰する方が多く、学校の印刷機の葉書印刷機能で案内を作っていたのを参考にした。これらの作業は日常業務が終わって部活動指導も終わる夜間か週末に行く。遅くまで残る先生が多い職場だったので「当たり前」だし負担感はなかった。1996年度にユースサッカー「DUOリーグ」^{注3)}を創設する前年度のことである。

このころの私は、日本サッカー協会（JFA）科学研究委員会の委員でもあった。委員は大学教員が中心で、ゲーム分析や体力測定、全国大会出場チームの活動実態調査などを行っていた。大学院生のころから同

委員会メンバーを中心とする「サッカー研究会」に顔を出すようになったのは、修士論文のテーマを「日本サッカーのプロ化」に定め、情報やアドバイス、そして何よりつながりを求めていたからである。1986年の日本体育協会スポーツ憲章制定とJFAスペシャル・ライセンスプレーヤー（プロ選手）制度導入の背景を、1965年の日本サッカーリーグ発足前後から追う歴史社会学的研究である。当時、アマチュアリズムの終焉とプロ化のうねりが日本のサッカー界に押し寄せ、価値観の相違を乗り越えながら具体的な対策が検討・試行されていた状況は、いまの部活動改革の動きに重なってみえる。

「サッカー研究会」のために筑波から東京へ出てくるのは大変で、毎回の参加は難しかったが、1987年に現職に就いてからは都内で開かれる月1〜2回の勉強会にはほぼ毎回参加した。「サッカー研究会」参加者で社会学や心理学に興味・関心を持つ人による「社・心グループ」の勉強会もこのころ始まり、1990年代になると私が主導するようになっていた。特定非営利活動法人サロン2002^{注4)}につながる研究会である。

もちろん本業は高校教師である。日々の授業や部活動、生徒指導には全力で向き合った。現場にどっぷりつかるとの毎日である。高体連サッカー専門部での大会運営や東京教員サッカークラブでの競技者としての活動もあり、充実の日々であった。このころの仲間は一生の同志である。

一方で、自分の研究テーマであるはずの「日本サッカーのプロ化」は、選手がプロ契約できるようになった段階から仕組み自体が大きく変わり、日本のスポーツの大改革につながる動きになっていた。研究者の端くれとして高校現場からの視点を残しておきたいと考え、「プロリーグの発足と高校サッカーの将来」と題する調査研究を1991〜95年度に実施し、『高校サッカー年鑑』に報告を掲載した^{注5)}。日本サッカー協会機関誌JFAnewsにも連載「ユース年代のサッカーはいま！」^{注6)}の機会を得て、調査からみえるものと、日ごろの実践（ユースリーグや学校運動部のクラブ化など）を紹介した。いまなら研究部の課題研究で取り上げたい、「部活動改革」につながる内容である。

2. 研究部員になったころ（2000年代〜）

「各専門部から研究部に1名ずつ委員を出すことになった。中塚君、やってくれないか」と、サッカー専門部の総会後、当時の専門部委員長から打診されたのは2003年度末か2004年度初めだったと思う。私に声がかかったのは、上記の背景から必然だったと言える。加えて「頼まれればNOとは言わない」私の性格を、先輩方はご存じだったのである。余談になるが、たとえば1994年7月29日の富山市内で、私は当時の東京都高体連サッカー専門部委員長から「東京都サッカー協会（TFA）のフットサル委員をやってくれないか」と頼まれ快諾している。この記憶は鮮明である。前記「プロリーグの発足と高校サッカーの将来」の調査依頼を監督者会議で行うためにインターハイ会場の富山市に赴き、「夜の街」でばったりお会いしたところで声がかかったのである。その場でOKの返事をした私の感覚は、「先輩に言われたら逆らえない」ではなく、「おもしろそう」であった。体育会系の上下関係はあったが、少なくとも私のまわりでそれを感じたことはほとんどない。一方、おもしろそうなことを直感的に判断する習性はある。いまでもTFAフットサル委員会の最古参委員として、高校生年代のフットサルの普及・振興に力を注ぐ原点がここにある^{注7)}。

高体連研究部の会議に私が初めて参加したのは2004年6月18日、会場は「こまばエミナース」であった。各専門部から1名ずつ委員が集まり、説明を受けた。しかし私の頭には何も入ってこない。自分はサッカー専門部の一員であり、研究部については門外漢の意識があったのだろう。「サッカーではすでにやっている」という“上から目線”もあったかもしれない。謙虚さに欠ける姿勢では何も入ってこない。

おそらくそこで取り上げられた議題は、「研究部の組織づくり（規約制定）」と「研究大会の開催」だったはずである。研究部の何たるかを知らず、研究大会を高体連が実施していることも知らない若輩者は、当事者意識の低い“お客さん”であった。はじめて研究部の会議に参加される方は、いまでもこのような意識をお持ちなのではないだろうか。

それでもサッカー専門部を代表して委員となった以上、会議には出なくてはならないし、少しでも存在感を残しておきたい。どのような人が来ているのかにも興味があったので、会議後の懇親会（数人で「行きますか」程度だった）には好んで顔を出していた。ほとんどの人が私と同様、よくわからないまま会議に来ていたことがわかり、打ち解けるのは早かった。

他校の先生と話をする機会は、たいていの場合サッカーを通してである。他の専門部の方と話をする機会はほとんどない。研究部の方々との会話は新鮮で、多くの経験を積んでこられた諸先輩方との交流はとても楽しかった記憶がある。

「東京都高体連サッカー科学研究会」をやっていることももちろん話した。みなに興味を持ち、やがて他の専門部の方も参加するようになった。2004年10月1日は「フェンシング専門部より」の話題、2005年1月14日は「第1回 東京都高体連研究大会準備会」として研究部第3分科会の会議を兼ねて開催した記録がある。当時からいくつかの会を主宰していた私は、複数の性格を会合に持たせ、組織を超えた交流の場とすることをたびたび行っていたのである。サッカー界で指導者向けの講習会が充実してきたからか、「東京都高体連サッカー科学研究会」の求心力の低下を感じ始めた時期でもあった。

同研究会は2005年6月の通算99回を最後に休止した。表向きの理由は、「高体連に研究部が設置され、当初の使命を終えた」ということである。

2005年2月26日（土）に東洋高校で「第1回 東京都高等学校体育連盟研究大会」が開催された。紀要には当時の研究部員の名前が記されている。草木繁生委員長（陸上競技女子）のもと、副委員長は体操男子、常任委員にはバレーボール女子、ラグビー、バドミントン、登山、柔道、剣道、サッカー、監事にはテニス、少林寺拳法の各専門部から委員が名を連ねている。サッカー専門部はもちろん私である。このころは私にも、研究部の“当事者”としての意識が芽生えていたと記憶している。

東京都高体連研究大会は、2006年2月18日の第2回大会から目白大学で開催されるようになり、2月中旬の開催は年間行事に定着した。全国大会同様、3分科会ごとに発表枠を設け、すべての専門部が交替で発表することを求めていた。未発表の専門部には草木委員長から声かけられる。発表者は個人・専門部・分科会などいずれも可であるが、分科会ごとの取り組みが奨励されていた。

それにしても、創設期における草木繁生氏の献身的な働きには頭が下がる。このころ、全国高体連研究部事務局は関東各都県が2年周期の輪番で担当していた。この仕事は、他県では県高体連事務局が請け負うか、そのための要員が加配されることが多いのだが、2005～06年度の東京都ではそのような配慮が為されないまま草木氏が通常業務の傍ら行っていた。相当な負担があったはずである。ときどき愚痴もこぼしておられたが、そこが草木氏らしい、人間味あふれるところである。細かな気遣いとともに、先を見通しリーダーシップを発揮される草木氏のもと、初期の東京都高体連研究部は“ワンチーム”となった。

東京都高体連研究部の会議資料はいまだにそのころのものが使われている。それだけ普遍性の高い準備が為されていたと言えるが、逆にその後の東京都高体連研究部が、ただ単に「前例踏襲」に陥り、せつかくの人材、恵まれた環境をほとんど生かせないまま現在に至るのがもどかしい。

Ⅲ. 全国高体連研究部の活性化

1. 推進委員会（2007）、活性化プロジェクト（2008）、そして活性化委員会へ（2010～）

2007年度から全国高体連研究部の改革が本格的に動き出した。研究部推進委員会の設置である。しかし推進委員の大半は常任委員を兼ねており、委員は全国に分散している。いまと違ってメールのやり取りは滞り、リモートワークは夢物語の時代である。年2回の常任委員会の前に開かれる推進委員会だけでは、スピード感を伴った改革は進まない。

翌2008年度、全国高体連の梅村和伸専務理事の問題提起を受けた山崎廣道全国研究部長から、推進委員

会のサブグループとして「活性化プロジェクト」創設が提案され、人選も含めた組織づくりが私に一任された。集まりやすい東京都内のメンバーで構成する方針で、草木繁生（都立松が谷／陸上競技女子）とともに嶋崎雅規（帝京／ラグビー）、柳清司（都立足立東／剣道）に声をかけ、活性化プロジェクトは2008年7月に始動した。アドバイザーを置くことを提案し、かつて「東京都高体連サッカー科学研究会」にともに取り組んだ小澤治夫（東海大学）にも加わってもらった。多忙を極める小澤氏はほとんど会合には参加できなかったが、Eメールで情報を共有し、適宜アドバイスをいただいた。

新宿の貸会議室で開かれた2008年7月2日の第1回会合は、「いつまでに、何を、どこまで詰めるか」をまず確認した。高体連という大組織で改革を進めるには、意思決定の手順の確認が不可欠である。全国から意見をいただくための「たたき台」をいつ、どこで提示するか、最終的にはどのレベルの会議で意思決定してもらうかについて全体像を把握した。そのうえで、高体連研究部の使命、現状と課題、今後の可能性について思うことを付箋に自由に書き込み、意見交換したのを覚えている。

第2回会合は7月30日、第3回は9月8日に行い、9月18～19日の推進委員会及び常任委員会（このころは1泊2日の開催であった）で「高体連研究部の活性化に向けて－活性化プロジェクト中間報告」を示した。その時点での課題の抽出と改革の方向性を示したものである。いまにつながる重要な文書なので、本文末に資料1として転載した。ぜひご一読いただきたい。

2008年12月7日の第5回会合で、1月の研究部委員会（現「全体委員会」）における提案のなかみを整理した。課題研究の設置はその一つである。2009年1月の全国研究大会（岡山）2日目冒頭の15分間、研究部の時間が設けられ、北海道から10分間「事故対策マニュアル」の報告があり、中塚から改革の方向性と「課題研究」の設置について5分間の話をした。ここがスタートである。

活性化プロジェクトは2008年度は7月から6回、2009年度は11回の会合を開き、2010年度より活性化委員会に受け継がれた。常任委員会の下部組織である推進委員会も活性化委員会に統合し、新しい委員会は「常任委員会に提言する」組織として位置付けられた。

初年度のメンバーは次のとおりである。委員長は引き続き中塚が、2019年度末まで12年間務めた。

中塚義実、草木繁生、嶋崎雅規、南部健（千葉県立船橋高校／水泳専門部）

活性化委員会の構成と任務について、2009年9月28日の議事録には次のように記されている。

<活性化委員会の構成と任務>（活性化プロジェクト&推進委&常任委議事録 2009.9.28.版）

1)位置づけと名称

新委員会は、意思決定機関である常任委員会の下部組織として位置づけられる。名称は「活性化委員会」とする。

2)任務

- ①課題研究に関すること…募集と審査にあたる。課題研究としての質の確保のため、研究段階でのアドバイスも適宜行う。
- ②分科会に関すること … 3分科会の充実のため、研究テーマの例示や優秀発表の表彰について検討する。
- ③研究大会に関すること … 開催県と連携し、分科会の公募数の決定や企画等の提案に関わる。
- ④研究部のあり方、方向性に関すること…全国大会、地域大会、各都道府県大会の充実、および日頃の研究活動の充実に向けた方策を検討する。
- ⑤常任委員会との連携に関すること…各地域代表の常任委員と連絡を密に取りながら上記①～④に取り組む。

3)構成員

研究部長を含めて5名で構成する。メンバーは研究部長の指名による。委員長を置く。

このほかにアドバイザーを加えることができる。

4)任期

2年。ただし再任は妨げない。

なお、「メンバーについては、集まりやすい関東の方々で構成するが、アドバイザーとして各ブロックの常任委員に入ってもいい、地域の事情を汲み取ることができるようにしたい」との考えが山崎部長から示された。

「アドバイザーには大学等の研究者に入ってもらっても必要ではないか」との意見もあった

あくまでも委員会内での確認事項であるが、年度の変わり目には必ず、活性化委員会の原点として共有している。規約や内規との齟齬についても少しずつ見直しを進めており、いまでは活性化委員は常任委員を兼務する形となっている。アドバイザーには早稲田大学の中澤篤史氏と読売新聞社の川島健司氏が長く携わり、毎日新聞社時代のアドバイザーも含め、大変お世話になっている。

関東各都県が2年ごとに輪番で務めていた研究部事務局は、2013年度より全国高体連事務局が担うことになった。これで名実ともに、専門部と研究部が「車の両輪」となったと言える。

活性化委員会は毎年8～10回の会合を開き、高体連研究部の牽引者として現在に至る。

全国高等学校体育連盟 研究部活性化委員会 構成員(2008～22)

年度	研究大会	活性化委員会								アドバイザー			
		部長	副部長(在京)	委員長	委員								
2008	平成20	岡山	山崎廣道	-	中塚義実	嶋崎雅規			草木繁生	柳清司	小澤治夫		
2009	平成21	山形	山崎廣道	-	中塚義実	嶋崎雅規	<千葉>		草木繁生	柳清司	小澤治夫		
2010	平成22	兵庫	山崎廣道	-	中塚義実	嶋崎雅規	南部健		草木繁生				
2011	平成23	鹿児島	熊谷通眞	-	〃	〃	〃		〃		毎日新聞社:高橋宏明・落合博(戸山芳樹)		
2012	平成24	栃木	熊谷通眞	-	中塚義実	嶋崎雅規	南部健	<山梨>			毎日新聞社:高橋宏明・落合博(阿相久志)		
2013	平成25	岐阜	熊谷通眞	-	〃	〃	〃	小澤和真					
2014	平成26	徳島	野口敏朗	熊谷通眞	中塚義実	嶋崎雅規	南部健	<山梨>	<埼玉>				
2015	平成27	宮城	野口敏朗	庄司一也	〃	塩田伸隆	〃	三浦和雄	秋元秀之		<読売新聞社>	<早稲田大学>	
2016	平成28	富山	庄司一也	清水智之	中塚義実	〃	南部健	〃	〃	<茨城>	川島健司	中澤篤史	
2017	平成29	島根	庄司一也	清水智之	〃	塩田伸隆	〃	-	阿部 守	須藤崇文	川島健司	中澤篤史	
2018	平成30	山梨	庄司一也	清水智之	中塚義実	鞠子智秋	南部健	<神奈川>	津田孝弘	-	川島健司	中澤篤史	
2019	平31/令元	滋賀	庄司一也	高野 学	〃	〃	石毛宏幸	松尾賢太郎	-	-	川島健司	中澤篤史	
2020	令和2	長崎	高野 学	小宮徳健	鞠子智秋	中塚義実	宮川 明	松尾賢太郎	-	-	庄司一也	川島健司	中澤篤史
2021	令和3	青森	高野 学	小宮徳健	〃	〃	〃	〃	<北海道>	-	庄司一也	川島健司	中澤篤史
2022	令和4	長野	小宮徳健	高野 学	宮川 明	-	-	〃	竹田安宏	-	-	川島健司	中澤篤史

注)2008～09年度は活性化プロジェクト

2. 活性化委員会によるさまざまな取り組み

活性化委員会は、高体連の研究活動、あるいは部活動そのもののあり方について、比較的自由に意見交換できる場であった。発足当初は全国の常任委員ともEメールで頻繁に、情報や意見を交換していた。

以下は、こうしたやり取りの中で、「いま何をすべきか」を考え、進めてきたことである。実現できたことと途上段階のものがある。「これから」については“当事者”である皆さんで考えていただきたい。

1) 課題研究の導入(2009～)

課題研究は研究大会改革の目玉である。2009年度の山形大会の2題は、課題研究にふさわしいものをパイロット研究として依頼したが、次の兵庫大会からはすべて公募による発表である。研究奨励費を受けて課題に取り組み、全体会で発表する。高体連が、あるいは高校の運動部活動が抱える課題を皆で共有し、ともに解決策を見いだしていくのが課題研究設置の意図である。

研究に取り組む側が自ら課題を設定するところがポイントである。キーワードに示される“課題”は、“可能性”でもある。蓄積することで、高体連の“課題”や“可能性”がみえてくる。

全国高等学校体育連盟 研究大会 課題研究一覧(2009～22)

年度・開催地	発表	テーマ	キーワード
平成21年度 (2009) 山形	宮城県	どんげかしたい宮崎県の部活動 －顧問支援ハンドブックの作成と活用	部活動運営、顧問支援
	東京都 (ラグビー専門部)	複数校合同運動部活動の成果と課題に関する研究 －ラグビー専門部の取り組みから見えるもの	少子化、部活動の運営組織、競技団体との連携
平成22年度 (2010) 兵庫	広島県	高体連活動に新しい意義と価値を見出す広島風アプローチ －感動発信！広島県高校生レポーターキャラバンがつぐむスポーツコミュニティ	高体連活動の新たな意義・価値、 「みて・伝えて・支える」スポーツ
	千葉県	運動部活動と社会人形成 －社会人基礎力をはじめとする社会のニーズと運動部活動の方向性	運動部活動の意義、キャリア教育、人間形成
平成23年度 (2011) 鹿児島	宮崎・東京(ラグビー)・広島・千葉	シンポジウム:高体連活動の可能性と課題をさぐる －課題研究への取り組み(日常)と東日本大震災(非日常)を中心に	－
	宮城県	東日本大震災と宮城県高体連 －“非日常”からみえる可能性と課題 (「BUKATSU2011」－部活に入ろうキャンペーンの展開)	東日本大震災、被災と復興、部活動の意義、 スポーツの意義、学校と地域、非日常 (部員の勧誘・確保、部活動による学校の活性化、 生涯スポーツの継続)
平成24年度 (2012) 栃木	北海道	北海道高体連主催大会参加者災害補償制度の導入の経緯と現状	制度設立、災害補償、保険
	岩手県	東日本大震災と岩手県高体連 －県総体総合開会式と北東北総体への取り組みをめぐって	総合開会式開催の意義、震災下での競技会、 東日本大震災、復興支援、復興に向けて
平成25年度 (2013) 岐阜	愛知県	運動部活動顧問を取り巻く現状と課題 －東海4県の顧問対象意識調査から見えること	顧問対象意識調査、若手指導者へ伝えたいこと、 指導者を取り巻く環境
	(石川県)	(インターハイブロック開催2年目を終えて －2012北信越かがやき総体から見えてきたもの)	(インターハイの意義、地域の活性化、県と市実行委員会 の設置・役割、固定開催、経費削減と収入確保)
	活性化委員会	活性化委員会からの報告と提言 －今後の「研究」と「実践」のために／「体罰」のない運動部活動への視点	－
平成26年度 (2014) 徳島	徳島県	学校体育・スポーツの充実を図る徳島県の取り組み－スポーツ助手の活動	選択制体育授業の充実、指導者の確保、 指導者のキャリア、スポーツ助手、ICTの活用
	JISS	スポーツでの映像の活用－高校生の指導現場にどう活かすか	スポーツ教育、スポーツ映像、映像の活用、 運動技術の指導、見るスポーツ
平成27年度 (2015) 宮城	千葉県	一人ひとりの生徒が輝く運動部活動を求めて －部内専門委員会の立ち上げとその取り組み	部活動の意義、クラブマネジメント、スポーツの可能性、 学校内外との連携、「する・観る・支える・調べる・伝える」
	活性化委員会	研究大会50年のあゆみ	－
平成28年度 (2016) 富山	北海道	「学び」を生かす多角的アプローチ － 札幌南高校陸上競技部の取り組み	学び、アプローチ、アクティブラーニング、生きる力
	富山県	高校運動部活動の魅力を探る － 富山県高体連における追跡調査を通して	少子化、運動の継続、男女差、開設部活動数、 運動部活動の魅力創出、経年的調査
平成29年度 (2017) 島根	活性化委員会	2020年へ向けて － 高体連研究部の新たな使命	－
平成30年度 (2018) 山梨	千葉県	安全・安心な部活動を目指して －千葉県における安全情報の普及・浸透への取り組み	安全管理、事故防止、災害補償、安全管理マニュアル
	活性化委員会	シンポジウム:高体連研究部の新たな使命Ⅱ －安全・安心な部活動に向けた「みえる化」と「できる化」	－
令和元年度 (2019) 滋賀	東京都	運動部活動が育むものとは何か －部活動の存在意義についての東京都の調査研究	部活動の意義、健全育成の実態、教育的価値、 社会人基礎力、充足度、見える化
	活性化委員会	シンポジウム:高体連研究部の新たな使命Ⅲ －部活動で育まれるものの「みえる化」と「できる化」	－
令和2年度 (2020) 長崎【中止】	長崎県	持続可能な部活動を目指して －長崎県の実態と取り組み、そしてこれから	顧問の意識、退部者、途中入部者、 生徒の自発的・自主的な参加、ガイドライン
令和3年度 (2021) 青森	福井県	高校生の夢の舞台を実現するには －持続可能なインターハイ登山大会	インターハイ、ウィズコロナ、安全・安心な大会、 人・物・財源・場所の最適化
	活性化委員会	シンポジウム:持続可能な部活動 －コロナ禍で改めて見えてくる大切なこと	－
令和4年度 (2022) 長野	元活性化委員長	講義:全国高体連研究部の活性化のために －活性化委員長としての12年間の記録と部活動改革への思い	－
	活性化委員会	発表:各都道府県研究部の組織と活動概要	－

研究部が総力を挙げて取り組む課題研究に、活性化委員会は準備段階からさまざまな形で関わった。当該県の研究担当者や研究部関係者と電話やEメール等で連絡を取り合い、ときには現地へ出向いてFace to Faceで意見交換した。宮城県、宮城県、岩手県、富山県には私が、愛知県には南部氏が、徳島県には嶋崎氏が出かけた。本務の合間を縫っての訪問には厳しいものがあったが、地域に固有の課題や可能性に触れることが

できた。研究を進めるだけでなく、信頼感・安心感が得られ、互いにとって有益であったと感じる。

「開会式後の90分」が課題研究の発表の場であり、毎回2題の発表枠を設けている。しかし実際はなかなか手が上がらない。1枠、あるいは2枠分を、活性化委員会からの報告や問題提起に充てることも多い。課題研究奨励のために各都道府県にアンケートを依頼し、全体委員会で意見交換する場を設けたこともあった。

ハードルが高いと感じられるのだろうか。課題研究への応募が増えてこないのがもどかしい。

部活動改革は待ったなしの状況にある。いまこそ課題研究への積極的な取り組みを求めたい。

2) 分科会研究の充実—発表ローテーションの見直しと表彰制度導入 (2010～)

かつて分科会研究は、各都道府県に3年に一度回ってくるものであった。このローテーションが、各都道府県研究部の活動サイクルとなっていたが、逆に研究活動を硬直化させる様子も伺えた。

ローテーション方式を維持すべきか否かについても活性化委員会で議論した。最終的に、各都道府県の発表機会の保証と計画的な研究活動の促進のために「必要である」と判断し、2010年度からは以下の方針で現在のローテーションに改めた。

- ① 各都道府県は、4年に一度担当する（3年に一度から改めた。割り当てられたところは必ず発表する）
- ② 各都道府県は、第1→第2→第3分科会の順で発表する（従来どおり）
- ③ ローテーション枠は、原則として各分科会4題とする（1～2題の公募枠を確保しておく）
- ④ 開催都道府県の属するブロックが発表できるよう配慮する（うち1題は開催県の発表）

3年周期から4年周期に改めたのは、公募枠を設けてタイムリーな、また意欲的な研究を積極的に受け付けるためである。例えばローテーション枠の前後の年に、進捗状況や事後報告をすることも大歓迎である。

分科会研究の評価は助言者からのコメントのみであったが、兵庫大会から優秀発表の表彰制度を導入し、鹿児島大会からはそれらに毎日新聞社賞が授与されるようになった。いまの読売新聞社賞である。共催する新聞社の紙面に優秀研究が掲載されることで、研究大会の認知度アップに貢献できたのではないだろうか。

3) 地方からの活性化—各ブロック・各都道府県の現状把握 (2011、2017、2021)

全国研究大会の内容を充実させ認知度を高めるのに並行し、全国各地の研究活動を盛り上げていきたいと考え、現状把握のための調査を実施した。「各都道府県研究部の組織と活動概要調査」である。1回目は2011年度で、5年周期（調査年が1年ずれた年がある）で実施する。昨年度の第3回調査は本紀要に掲載されている。47都道府県と9ブロックの現状を量的に把握するだけでなく、各地域の現状と課題、実践事例を共有化することがねらいである。全国各地の意欲的な取り組みを参考にしてもらいたい。

各地域には固有の課題がある。例えば、都市部は人（高校生も教員も）が多く交通の便もよいので集まりやすいが、グラウンドなどの体育施設は不足気味である。地方では競技会場は確保できるが人が少なく、移動の手段も限られている。地域固有の課題がある一方、少子化の進行や部活動離れは全国共通の課題である。コロナ禍における部活動のあり方、地域移行の方向性が示された部活動改革の行方も全国共通の課題である。各地域の小さな取り組みを共有し、できることから指導現場に反映させることが重要である。

研究発表のための研究でなく、現場のための研究こそが、高体連研究部には求められる。

4) 高等学校文化連盟（高文連）との連携 (2013年度～)

前記のとおり2013年度から、研究部事務局は全国高体連事務局に置かれるようになった。その直前の2013年2月14日、全国高体連事務局において、全国高体連と全国高文連の連携の可能性について話し合いの場が設けられた。「全国高文連会長・事務局長と、熊谷部長、中塚委員長が出席。議題は、総体と総文祭の連携（日程調整）、高体連と高文連の連携」（130207活性化委員会議事録）であった。

高校生の部活動を、ともにささえあう組織である。初会合の場では、互いの研究大会の視察から始めることで合意した。そして2013年12月、秋田県で開催された全国高文連研究大会に熊谷部長、嶋崎委員と私が参加、その後も活性化委員が交替で参加し、全国高文連とのつながりは保たれている。

2020年の東京オリンピック・パラリンピックは、高体連と高文連の連携を一気に加速させるチャンスであった。しかしコロナ禍の影響もあり、活性化委員会からの次のアクションができないまま、現在に至る。両組織の連携・交流は、今後とも大事にしていきたい。

5) 研究大会 50年のあゆみ (2015年度)

2015年度の宮城大会は全国研究大会50周年の節目の年であった。この機会に「50年のあゆみ」をまとめようということになった。「各都道府県の調査」は空間的な広がりからの学びであるが、「50年のあゆみ」で歴史からの学びを志向した。委員で手分けして資料を集め、課題研究枠で発表することにした。

やりがいのある作業であった。各大会の研究紀要は全国高体連事務所に保管されているが、どのような資料があるかは一つひとつあたらないとわからない。夏休みに集まり、資料と対峙しながら過ごすことが何度もあった。最終的には「活性化委員会からの報告—研究大会50年のあゆみ」(第50回全国高体連研究大会紀要、2016年1月発行)にまとめることができた(掲載できなかった資料は活性化委員会が保管)。

第1回～第15回まですべて東京都で開催された全国研究大会は、第16大会の和歌山開催を機に全国持ち回りとなる。社会の変化を踏まえながら、高体連研究大会はそのすがたを変えてきた。そして節目ごとに、キーパーソンとなる方が力を注いできたことがわかった。逆に、キーパーソンに依存するだけで“魂”を継承しないと、あつという間に停滞・衰退する様子も見えてきた。歴史からの学びは貴重である。

6) 新たな使命—オリンピック教育 (2015年度～)

2013年9月に、2020年の東京オリンピック・パラリンピックの東京開催が決まった。これを機に「オリパラ教育」が、スポーツ庁はじめさまざまな組織によって進められたのは周知のとおりである。

これより先の2010年度から、私の勤務校ではオリンピック教育への本格的な取り組みが始まった。筑波大学オリンピック教育プラットフォーム(CORE)^{注8)}が設置され、特別支援学校を含む11の附属学校と大学の連携が始まったのである。「中塚君、附属学校のオリンピック教育の取りまとめをやってくれないか」と当時の附属学校教育長から依頼され、私自身も深く関わることになった。勤務校での実践に加え、国際ピエール・ド・クーベルタンユースフォーラム^{注9)}への高校生の引率や、派遣生徒の選考を兼ねた国内ユースフォーラムの企画・運営などが新たに取り組んだことであり、現在に至る。

近代オリンピックの創始者、ピエール・ド・クーベルタンの思想—オリンピズムとは、まずはスポーツによる青少年の健全育成であり、高体連の目的と合致する。日本独特の学校スポーツを統括する高体連は「オリパラ教育」の担い手となるべきだということを、私は活性化委員会で何度も主張した。

委員会内で賛意が得られ、2015年度の宮城大会の「開会式後の90分」における野口敏朗部長の発言につながる。「いまオリンピックの開催を目の前に控え、オリンピック教育の推進という意味も含めまして、生徒の研修の場としての「高校生の研修会」が新規事業としてできないだろうかということを模索し始めたところです」(第50回全国高体連研究大会報告書、2016年3月発行)。

しかし全国高体連の主催事業にはつながらない。総論として賛成であっても、事業化にはいくつものハードルがある。そこで当面、2020年(実際は1年延期の2021年)のホストシティである東京都高体連研究部が国内ユースフォーラムを共催または協力し、告知と募集に協力するかたちをとることとなった。

しかしオリンピックが終わった2022年度に、東京都高体連研究部はこの事業への協力から外れることとなった。私が東京都高体連研究部から離れ、担い手がいなくなったからだろうか。真相はわからない。

組織が取り組むべき事業は、組織の使命・設置目的から導かれなくてはならない。前例踏襲だけでなく、時代の要請を見据え、何をすべきかを常に検証し続けなくてはならない。もちろん、ただやみくもに新しいものに飛びつくのはダメである。現実的に実現可能か。誰が担い手となり、継続の見通しはあるのかも重要な視点である。

学校教育全体のスリム化が求められる中、何をすべきかの取捨選択は重要である。

IV. おわりに

2008年度の活性化プロジェクトから12年間委員長を務めた私は、2020年度より鞠子智秋（都立清瀬／サッカー）に委員長を譲り、委員として2年間、側面からサポートした。再雇用者となった2022年度からは委員会から離れ、いまは外部から見守る立場である。宮川明委員長のもとで編成された今年度の委員会には、集まりやすい関東の方だけでなく、北海道の委員も含まれている。コロナ禍の副産物として全国各地がオンラインでつながるようになった。今後が楽しみである。

12年間の記録は、データとともに何冊かのファイルにまとめ全国高体連事務局に置かれているが、本当に大切なのは記録やマニュアルには残せない、“思い”や“魂”である。コロナ禍で引き継ぎがうまくいかなかったところもあった。“魂”の引継ぎはこれからでも遅くはないと信じ、いまこれを書いている。

最後に、歴代研究部長に触れておきたい。ときには体を張って主張すべきことを主張し、ときには腹の中にぐっとしまい込んで活性化委員会を見守り、ささえてくださったおかげでここまでやってこられた。

私が委員長を務めた12年間の歴代研究部長の名を改めて記し、心より感謝の意を表したい。

山崎廣道（2008～10）、熊谷通眞（2011～13）、野口敏朗（2014～15）、庄司一也（2016～19）

山崎部長は全国高体連という大きな組織と指導現場の間に立ち、調整にご尽力くださった。山崎部長がいなければ、いまの研究部はない。

熊谷部長の時代に、学校運動部における「体罰」・暴力問題が大きく取り上げられた。学校運動部だけでなくすべてのスポーツ関係者が、日々の活動を見直さねばならない事態に直面した。第48回全国研究大会（岐阜）では「活性化委員会からの報告と提言」の中でこの問題を取り上げた。別刷として配布したものを資料2として転載する。私自身の「部活動改革への思い」もここに反映されている。

研究部事務局を全国高体連事務局に移管したのも、高文連との連携も、熊谷部長時代の成果である。活性化委員会のさまざまな挑戦は、熊谷部長が体を張ってくださったおかげである。

高体連研究部のオリンピック教育への取り組みを全国研究大会で語られた野口部長も、活性化委員会を強く支援してくださった。研究大会50周年を野口部長のもとでまとめられたのはよき思い出である。

庄司部長はそのときから副部長として活性化委員会に関わるようになり、「50年のあゆみ」をともにまとめることができた。歴史を共有できたからこそ、いまを見据えた改革に挑戦できたのである。退職後もアドバイザーとして残ってくださった庄司部長は、コロナ禍で大変な時期に、とてもありがたい存在であった。

活性化委員長時代の研究部長は上記のとおりだが、委員長退任後の2年間、同世代の高野学部長（2020～21）と現小宮徳健部長（2022～）と過ごしたコロナ禍で大変な時期も忘れることができない。懇親会がほとんどできなかつたのは残念だが、厳しい時期をともに過ごした“同志”である。

新型コロナのパンデミックは丸2年続き、私たちの生活は一変した。部活動改革も思わぬ形で進行したと言える。いままで放置していた課題が浮き彫りになり、新たな可能性がみえてきた。

コロナ後は、以前のすがたに戻すのではなく、続けるべきことと改めるべきことを見きわめ、新たな時代に向き合わねばならない。部活動改革も同様である。そういう意味で、いまこそチャンス到来である！

全国高体連研究部のますますの発展を心より願いつつ、報告を終えたい。

＜ 注 一 覧 ＞

注 1) 喜熨斗氏は都立高校に籍を置きながら東京大学大学院で学んだのち転職しJリーグでトップチームのコーチを歴任。名古屋グランパス時代に現セルビア代表監督のドラガン・ストイコビッチとのつながりが生まれ、2015年には中国スーパーリーグへ。2021年からはセルビア代表コーチを務める。

注 2) 小澤氏は2004年度末で筑波大学附属駒場中・高を離れ、北海道教育大学、東海大学を経て、2017年度より静岡産業大学スポーツ科学部開設に尽力された。

注 3) いまでは全国に広がるユースサッカーリーグのモデルであり、文京区・豊島区の高校サッカー部とクラブユースで始まった。中塚は1996～2014年度まで初代チェアマンを務めた。拙稿「補欠ゼロ、引退なし、自主運営のサッカーリーグ」『運動部活動の理論と実践』、大修館書店、2016などを参照されたい。

注 4) 前身はサッカーの指導者・研究者の勉強会「社・心グループ」。1993年Jリーグ開幕、2002年FIFAワールドカップ開催など、サッカーを取り巻く環境が激変する中、1997年度より「サロン2002」と改称。「人と情報の交流の場」として開かれる月例サロンは2022年10月で通算312回を数える。2014年度には特定非営利活動法人となり、現在に至るまで理事長は中塚が務める。<https://www.salon2002.net>

注 5) JFA 科学研究委員会の事業として、全国高体連主催の全国高校総体サッカー競技および日本クラブユースサッカー連盟 (JCY) 主催の日本クラブユース (U-18) 選手権大会の出場選手・指導者を対象に5年間、質問紙調査を実施した。調査結果は各組織の機関誌等で報告、高体連加盟校には1992年2月発行の『'92高校サッカー年鑑』から『'96高校サッカー年鑑』まで、毎年4～6ページにわたり「プロリーグの発足と高校サッカーの将来」と題して紹介した。この調査の企画・実施・報告に携わったことから、中塚は1997～2007年度にはJCY理事・科学研究委員長となり、飲水タイム導入 (1997年度) や、学校運動部・地域クラブ・Jクラブの連携の模索に、クラブ側からも携わることになる。

注 6) 日本サッカー協会機関誌 JFAnews 「ユース年代のサッカーはいま」は、以下に掲載されている。

1997年6月号 (No.156)、7月号 (No.157)、8月号 (No.158)、10月号 (No.160)、11月号 (No.161)、12月号 (No.162)、1998年1月号 (No.163)、3月号 (No.165)

注 7) TFA フットサル委員会では全国に先駆け、U-18年代のフットサル大会を2001年度に開始した。この取り組みは、JFAの支援を受けて全国に紹介され、各地域でU-18フットサル事業が徐々に始まり、2014年度からはJFA主催の全国大会が開かれるようになった。学校とクラブが融合するU-18フットサルを取り巻く状況は、運動部活動を含めたユース年代のスポーツの今後のあり方を示唆するものである。2021年3月にはNPOサロン2002主催で「東京都におけるU-18フットサルの20年 一過去・現在・そして未来に向けて」が開かれた。同法人HPのアーカイブに報告書が掲載されている。

https://www.salon2002.net/src/pdf/monthly_report/2021/2021-3.pdf

注 8) 嘉納治五郎生誕150周年の2010年に発足した筑波大学の学内組織で、日本初のOSC (Olympic Study Center) としてIOC (国際オリンピック委員会) から認定を受ける。11校ある附属学校を活かしながら「オリパラ教育」事業に先駆的に取り組み、スポーツ庁委託事業「オリンピック・パラリンピックムーブメント全国展開事業」をリードしてきた。

注 9) 2年に一度、各国持ち回りで開かれる、高校生対象のオリンピック教育事業。主催はCIPC (国際ピエール・ド・クーベルタン委員会)。世界中から100名以上の高校生が集い、座学や討議、スポーツやアート活動を通してオリピズムを学び、交流する。日本からは2009年に生徒2名がオブザーバー参加し、2015年からは7名のフルメンバーを派遣する。選考を兼ねた国内ユースフォーラムは、COREや中京大学、NPOサロン2002やJOA (日本オリンピック・アカデミー) 主催で開かれてきたが、2021年度からはCIPCの下部組織であるCJPC (日本ピエール・ド・クーベルタン委員会) 主催となる。

資料 1

高体連研究部推進委員各位

2008.9.18.

高体連研究部の活性化に向けて

9月18日の常任委員会で
出た意見をここに書き加え
ることで報告とします。

－活性化プロジェクト中間報告－

高体連研究部活性化プロジェクト委員会
委員長 中塚義実

I. はじめに

高体連の活動において「専門部と研究部は車の両輪」と言われています。高校スポーツをめぐるさまざまな問題が噴出する中、ことに財団法人化以降、高体連には単なる「運動やさん」「イベントやさん」としてだけでなく、高校生の体育・スポーツ活動を包括的に捉え、よりよい方向に導くことが求められており、研究部の活動の重要性は高まっています。いくつかの都道府県においては先進的な取り組みも為され、徐々にではありますが、研究部の活動が活性化の兆しを見せているようにも感じられます。

しかし全体的にみると、高体連活動の中心は、依然として「総体」を頂点とした「競技」の部分であり、「研究」活動には、あまり大きな力が注がれないまま来ている傾向は否定できません。

「全国研究大会」は、実に42回の歴史を誇る、高体連の大きな行事として位置づけられています。しかしその実態は、ずっと先まで発表順が決まっており、指名された担当者が仕方なく自分の持ちネタ（こうして〇〇部を強くして全国大会に出場しました、など）を披露するという、単発的・個人的な研究が数多く見られます。また、研究がなされる場合も、研究大会があるから、発表しなければならないからという理由からの研究であり、継続的な研究にはなりにくいように感じられます。

「高体連」は、様々な現場を持っており、これを活かせば、多くの素晴らしい研究が生まれ、「運動部活動」をよりよいものに変えていくための大きな力になるはずです。そのためには、研究活動に組織的・継続的に取り組んでいく必要があります。

本プロジェクトは、平成20(2008)年5月16日の「企画委員会」において梅村専務理事から示された「全国高体連専務理事の経営方針」を受けて、東京都内のメンバーで発足したものです。年3回の「研究推進委員会」を補う形で、研究部および研究大会の活性化へ向けて検討し、提言を行うことを目的としています。メンバーは次のとおりです。

委員長：中塚義実（筑波大学附属高校/サッカー専門部）

副委員長：草木繁生（都立松が谷高校/陸上競技専門部）、嶋崎雅規（帝京高校/ラグビー専門部）

委員：柳清司（都立足立東高校/元剣道専門部）

アドバイザー：小澤治夫（東海大学）

これに、全国高体連研究部長の山崎廣道先生も加わり、7月2日と7月30日の2回にわたって検討を進め、「高体連研究部の活性化に向けて（素案）－活性化プロジェクト中間報告（第1報）」にまとめました。8月中旬に全国の推進委員の方々に送付し、意見をいただいた上で9月8日にプロジェクト委員で集まり、修正したものがこの中間報告です。

本中間報告はあくまでも「たたき台」です。引き続き推進委員の皆さまからご意見をいただき、平成21(2009)年度の山形大会での試行を経て、平成22(2010)年度の兵庫大会からの本格的な改革につなげていきたいと考えます。並行して事務局機能の強化に務め、継続的に取り組めるような組織を作ることも求められるでしょう。

課題は多々ありますが、本中間報告が、今後へ向けての議論の活性化につながれば幸いです。

II. 高体連における研究部・研究大会の現状と課題

高体連の先生方には、研究活動に熱心な方も大勢おられます。その成果は体育学会などの学会で発表されることも多々あります。

こうした意欲的な取り組みは今後とも続けていただきたいのですが、高体連の研究部・研究大会の性格を踏まえると、そこで求められるのは学問的な成果よりもむしろ、現場に持ち帰ってすぐに生かせる研究や、日々の部活動の現場で悩んでいることが解消するような研究であると言えるでしょう。研究のための研究には、現場の先生方は興味を示してはくれません。いま、何が求められているか。それを考えることによって、高体連としての研究課題が浮き彫りになるものと思われま

す。競技団体が取り組まねばならない研究課題もあります。競技団体によっては高体連に大きく依存しているところもありますが、どこまでが高体連の取り組みなのか、どこからが競技団体が取り組むべきことなのかを整理する必要もあります。

こうした観点から、高体連における研究部・研究活動の現状をみると、いくつかの課題が明らかになってきます。プロジェクトでは、次の3点に整理し、対策を考えました。

1) 現行の3分科会が対象とする内容が分かりにくい

→ 各分科会の趣旨と求めるテーマを明記する

現行の3分科会は、第1分科会「競技力の向上（競技力）」、第2分科会「健康と安全（安全）」、第3分科会「部活動の活性化（普及）」とされています。大まかなイメージとしてはわかるのですが、たとえば「部活動の活性化」を「普及」に置き換えてよいものでしょうか。そもそも「何をもって活性化というのか」が明確でなく、そのため、「競技力を高めることによって部員が増え、学校に活力が戻った」事例や、「競技団体と協力して取り組み、競技人口が増えた」事例などが「部活動の活性化」として取り上げられています。それも確かに「活性化」には違いないのですが、「高体連として」どうとらえるのかがあいまいです。

現行の3分科会を尊重しつつ、より良い方向に改善するには、各分科会がどのような考えで設置されているのかと、そこで求められるテーマを、一般の方にもわかりやすく明示する必要があると考えます。

また、研究の活性化のために、高体連らしい、よい研究には「優秀研究賞」を出すことも考えられます。

出さないこともあるし、複数出すこともある。お金ではなく名誉であるが、「お金も名誉も」という意見もある。優秀研究については高体連ジャーナルに掲載したい。

2) 現行の3分科会では網羅しきれない内容がある

→ 分科会の枠にとらわれない複合的な研究を受け入れる

指導現場における取り組みは、常に複合的な要素を含んでいます。指導面での工夫として、例えば安全面への配慮が入部者増につながり、競技力も高まったといったケースは、分科会では網羅しきれない、複合的な内容として捉えられるでしょう。また、こうしたテーマにこそ、高体連として取り組む価値のある内容が含まれていると考えられます。

「課題研究」という枠を設け、分科会では収まりきれない、包括的な内容を取り上げてみてはどうでしょうか。また、課題研究への取り組みを促すために、「研究奨励費」を出すことも考えられるでしょう。

課題研究だけでなく、各分会においても研究奨励費があつてよいのではないかと意見もあつた

3) 意欲的な個人研究を拾うことができない

→ 個人研究を受け入れる

意欲的に研究活動に取り組み、さまざまな学会で発表されている方も高校の先生方にはおられます。学術研究としての精度はなくても、研究成果を日々の実践に活かしておられる方を含めると、もっと

「目立ちたいだけ」の人が出てこないとも限らない。本当に高体連として望ましい研究が発表されるか、注意が必要。

過去の大会でも個人研究を受け入れたことがあるが、連絡ルートの確立が必要。

大勢おられます。こうした意欲的な取り組みを、高体連の研究大会で取り上げることも大切です。

しかし、前記のとおり、発表順が都道府県別に決まっており、タイムリーな、意欲的な研究が入り込む余地がほとんどないのが現状です。

まずは「課題研究」を中心に、意欲的な個人研究を発表できる場を設けることはできないでしょうか（分科会においても個人・グループの研究発表を積極的に受け入れてよいと考えます）。

Ⅲ. 高体連の研究課題として考えられることー「課題研究」テーマ例

Ⅱに挙げた現状と課題に対する対策案として、まずひとつは「課題研究」枠を設けることを提案します。分科会の枠を越えた研究であり、各都道府県単位で事前に申し出て、「研究奨励費」を得て取り組む形をイメージしています。個人研究でもグループ研究でも受け付けます。

高体連研究部の研究活動として、現場にフィードバックできる研究課題として、今後10年間はこれらのテーマを掲げ、全体会の中で発表していただくことを考えています。

テーマ例は次のとおりです。

- 1) 部活動と学業（学校生活）をめぐる問題（キャリア教育・進路の問題を含めて）
- 2) 部活動と家庭との連携（金銭負担を含めて）
- 3) 部活動と地域との連携（外部指導者との連携を含めて）
- 4) 学校間連携（部活動の共有）
- 5) 教員の異動と部活動
- 6) 顧問の位置づけ（サービスの扱い、人材育成等）
- 7) 競技会の工夫（誰もが参加できる競技会の工夫、競技会運営の工夫）
- 8) 体育の授業と部活動の関係
- 9) 競技団体と部活動の関係
- 10) 身近なスポーツ医科学

必ずしもこだわらない。

例えば「グローバル化とスポーツ」「スポーツとリスクマネジメント」「キャリア形成」などの大項目でまとめつつ、具体的なテーマ例を示す形はどうか。「ここに高体連として、研究部としての方向性が示されている」とするのは重すぎる。「目下のところこういうことが気になっている」というものでよいのではないか。

Ⅳ. 各分科会の目指すものと具体的な研究テーマの例

各分科会の求める内容がわかりにくいという問題に対しては、次のような説明を加え、分科会の趣旨と求めるテーマを明示していきたいと考えます。

（中略）

「ずっと先まで県別に発表順が決まっている」ことについては、「研究大会・研究部の活動の硬直化の原因である」という見方がある一方で、「一定の発表数を確保するために必要」「各都道府県の高体連研究部の活動を活性化させるにはこうするしかない」という意見もあります。引き続き検討していきたいと考えます。

一つの方策として、都道府県別の発表順は残しつつ、発表順にとらわれない、個人・グループ・都道府県単位の発表を広く受け入れる形が考えられます。「研究」というと敷居が高く感じられますが、「実践報告」「事例報告」「調査報告」などのカテゴリーを設け、日頃の取り組みを報告していただけるよう工夫することも考えられます。

いずれも、今後の検討課題です。

確かに敷居の高さは問題だが、全国研究大会としてのステイタスもある。ローカルな話ばかり出てきても…。どこまで認められるかを検討する必要がある

全国研究大会開催基準要項の「9.研究大会の参加者」に、「(3)開催県実行委員会が認めた者」を加えることとなった。

V. 研究大会の日程の見直し

分科会とは別に、全体会の中で課題研究の発表の場を設けたいと考えます。また、最終日まで会場に残っていただくためにも、現行の日程の見直しが必要です。参加者も、高体連研究部の委員の方々だけでなく、各年代のスポーツ指導者、保護者、あるいはスポーツの勉強をしている学生など、幅広く募集してよいでしょう

(高校生の参加については否定的に捉えています。やはりこの場は、高校生を取り巻く「大人の」ミーティングでありたいものです)。

平成 21 (2009) 年度 (山形) について、時程案を作ってみました。平成 20 (2008) 年度まではすでに決まっているものですが、平成 20 年度の 2 日目にある「研究部」の枠を拡大して初日に移し、そこで「課題研究」報告をパイロット的に実施する案です。完成年度である翌 22 (2010) 年度 (兵庫) も同様の時間配分で、「課題研究」は公募の形で、研究奨励費を受けて取り組まれ、発表される形になればと考えます。

時程については、開催県の事情もあるので調整が必要。開催県実行委員会の裁量の範囲を明確化することが必要。

	午前					午後
	平成十九年度	1 日目	受付	開会式	講演	昼食
	2 日目	全体会 (分科会報告・講評)		講演	閉会式	
	午前					午後
	平成二十年度	1 日目	受付	開会式	分科会	昼食
	2 日目	研究部	全体会	講演	閉会式	
	午前					午後
	平成二十一年度	1 日目	受付	開会式	課題研究/ 研究部	昼食
	2 日目	全体会 (分科会報告・講評)		講演	閉会式	

はじめにも申し上げましたが、ここに書かれた内容はあくまでも「たたき台」です。さまざまな方からご指摘、アドバイスをいただき、より多くの方で共有できるものに仕上げていきたいと思えます。

高体連における研究活動は、欠かすことのできない重要なものであるということを前提として、今後ともご意見いただければ幸いです。

以上

1 月の推進委員会までに“各論”の詰めをする。山形大会での「課題研究」候補をリストアップし、兵庫大会以降の研究大会の持ち方を具体的に検討する。活性化プロジェクトがたたき台を作り、推進委員に投げかける。会議の時だけでなく、メール等の意見交換を事前に行えるようにする。

研究部・研究大会の活動の認知度アップが不可欠。そのためにも HP の活用を。HP に過去の研究発表を掲載し、ライブラリー化を進めるべく全国高体連事務局と相談。

資料 2

「体罰」のない運動部活動へ向けての視点

—活性化委員会からの提言—

2013年8月、滋賀県の立命館大学宇治キャンパスで開かれた日本体育学会第64回大会では、各専門領域で「体罰」や暴力、セクハラ問題を取り上げたシンポジウムが目白押しであった。活性化委員長の中塚義美は、体育社会学専門領域のシンポジストとして登壇し、高校の指導現場から報告する機会を得た。

本報告は、同シンポジウムでの発表内容を中心に、活性化委員会での議論と関係者からのアドバイスを踏まえて整理したものである。「研究」を進める際の視点として、またそれぞれの「実践」を見直す際の視点として、参考にしていただければ幸いである。

1. 日本のスポーツ環境をどうとらえるか

1990年代以降、日本でも欧米型のクラブを育てようという機運が高まり、いまでは全国各地に生涯スポーツの受け皿としてのスポーツクラブができつつある。総合型地域スポーツクラブ育成モデル事業（1995）がその始まりであるが、Jリーグ発足（1993）により、底辺から頂点のプロまでが一体となった、地域に根差すスポーツクラブのイメージが示された意義は大きい。

地域クラブは学校体育と対比して捉えられることが時折あるが、むしろ学校体育の延長上にあるものにとらえるべきである。明治以降の近代教育の中で、体育（当時は体操）の授業が児童・生徒の運動機会を保障し、運動部活動はより専門的な活動の場として機能した。1890年代に「校友会」「運動会」の名で登場して以降、学校運動部は青少年スポーツの受け皿であり続け、学校間対抗競技会での勝利を目指して競技に取り組む姿は、日本のスポーツモデルとなった。運動部活動は学校の一体感を醸成し、地域社会に夢や希望を提供するものでもある。

このように世界に誇れる日本の学校体育は、一方で、スポーツのあるべき姿を覆い隠す側面もあった。

スポーツの教育的意義を否定するものではない。しかしスポーツの意義は、教育のみにあるわけではない。スポーツとはそもそも楽しみや気晴らしを意味する言葉であり、広義にはプレイから競技まで含まれる幅広い概念なのである。しかし日本のスポーツは、初期の担い手が高等教育機関の学生であったことから、彼らの意識がスポーツ観に色濃く反映され、「真面目な」ものに傾斜して

いく傾向にあった。また、学校間対抗競技会が新聞社などのメディアによって支援されるという日本独特の環境は、育成年代であるはずの高校生の競技会の過熱化をもたらす一因となった。高校生にとって励みとなる一方で、一つの勝敗にあまりにも大きな付加価値がついてくるようになり、楽しみや気晴らしでは収ま

世界に誇れる日本の学校体育

- ◆12年間の「体育実技」が保障されている！
 - ・すべての児童・生徒が、学校で、定期的に運動する機会が設けられている
 - ・すべての児童・生徒が、さまざまなスポーツを経験できる
- ◆学校の中でさまざまなスポーツイベントがある！
 - ・運動会がある。学校主催の野外行事がある（林間学校、臨海学校）
- ◆部活動が、より専門的な活動の機会を提供している
 - ・放課後すぐに活動できる。学校教育活動なので保護者は安心
- ◆全国的な競技会が整備され、注目されている
 - ・高校生の競技会に、多くの観衆が集まりメディアが注目する
- ◆卒業生のつながりや地域社会の誇りとなっている
 - ・学校運動部や学校行事が、卒業生のきずなを深める
 - ・学校運動部の活躍が、地域社会の誇りとして認識されている（例：高校野球）

その一方で...

- ◆体育とスポーツが混同
 - ・青少年期の教育の手段としての“スポーツ”
- ◆プレイ(遊び)の否定
 - ・競技志向で「道」を究める姿が求められる
- ◆チームのみで「クラブ」は育たず
 - ・競技会への参加単位である「チーム」優先
 - ・チームは学年進行。「引退」して「OB・OG」に
- ◆「コートの外」はあともわし
 - ・更衣室・シャワー室・談話室がない体育施設
 - ・下校で部室を追い出された生徒はコンビニへ
- ◆「最後の大会」が終わると「引退」？
 - ・「年度単位」、「競技志向」、「チームのみ」

なぜ日本のスポーツ観・スポーツ環境はこうなったのか？

- ・明治維新以降に外来文化として輸入されたスポーツは、高等教育機関の学生が学校単位で取り組み、定着した。
- ・彼らの持つ、上昇志向、エリート意識、武士道精神が、まじめさを求め、道を究める独特のスポーツ観を育んだ。
- ・学校間の対抗競技会は、スポーツと教育の問題を誘発した（例：野球害毒論争）。競技会の様子は、独特のスポーツ観とともに、メディアによって繰り返し伝えられた。

↓
学校体育の充実と、貧困な生涯スポーツ環境
“偏ったスポーツ観”にもとづく
“限定的な(閉鎖的な)スポーツ習慣”が定着

らないものになっていくのである。

この傾向は、すでに戦前から顕著にみられた。1911年から東京朝日新聞紙上で展開された「野球害毒論争」と、その結果として1915年に誕生した大阪朝日新聞社主催の全国中等学校優勝野球大会（いまでいう「夏の甲子園」）、その後も過熱する野球に対して当時の文部省が出した「野球統制令」（1932）は、ヒートアップする運動部活動を教育的見地から制御しようとする試みであった。戦前からもっとも盛んであった野球で顕著にみられたこの現象は、サッカーをはじめ、他のスポーツでもみることができる。

スライドにもあるように、学校体育の充実と貧困な生涯スポーツ環境は、いまに始まったことではない。“偏ったスポーツ観”に基づく“限定的な（閉鎖的な）スポーツ習慣”が学校運動部の中に見られ、その中で「体罰」問題が発生したということができらるだろう。

2. 「体罰」問題の背景をどうとらえるか

学校運動部の指導にかかわる者として、「体罰」問題で命を落としたり、夢や希望を失う生徒がいることは、心苦しい限りであり、慚愧に堪えない。

このことを決して他人事にはしてはならない。部活動に関わるすべての者が考え、少しでも良くなるよう、改善に取り組まねばならない。「体罰」の背景を、個人の問題、組織の問題、構造（仕組み）の問題の三層で捉えることによって、さまざまな切り口が明らかになる。それは、指導現場を改善するための視点であるとともに、研究テーマとなりうるものでもある。

1) 個人の問題

個人の問題としてまず思い浮かぶのは「勉強不足」という言葉である。「勝つことがすべて」と勘違いしている指導者は、スポーツがどのような文化なのかを学ぶ機会がないまま指導現場に立ってしまったのかもしれない。指導する種目の勉強が不十分なため、指導言葉が追いつかず、手が出てしまうケースもあるだろう。トレーニングに無理や無駄が多いのは、生理学や医学・心理学の知識が不足していることに起因する場合が多い。いずれも勉強不足によるものであり、どこかにしわ寄せがくる。

自分をコントロールできないなど、パーソナリティそのものに問題がある指導者がいるのも事実である。これは指導者としての資質・適性の問題（進路選択の問題）なのか、それともやはり勉強不足によるものなのか。いずれにしろ現場で解決せねばならない。

教員養成の段階で、部活動指導者に求められるものをしっかりと学ばせるべきである。と同時に、現場の指導者に対する継続的な研修が必要である。競技団体が指導者養成・研修を担うのは当然だが、高体連としての研修会も必要である。「研究部」がリーダーシップをとっていくべきではないだろうか。各都道府県、各ブロック、全国の研究大会が指導者研修の機会となることを願ってやまない。研究部の責務は大きい。

「体罰」の背景Ⅰ：個人の問題

1. 勉強不足である

- 1) 文化としてのスポーツの理解が不十分
- 「競技」のみ、「チーム」のみ、「する」のみ...
- 2) 指導する種目の理解が不十分
- 分析し、修正する力がない = 観察する目と、アイデアの不足
- 言語化できない。経験に依存
- 一般化できない → 広がらない → 閉鎖空間を形成する
- 3) 指導対象の理解が不十分
- レベルやニーズを把握できていない

2. パーソナリティに問題がある

3. 置かれた状況に問題がある - 組織の問題

「体罰」の背景Ⅱ：組織の問題

1. 学校の中で...

- 1) 厳しい指導を担わなくてはならない立場に置かれる
- 体育教師=生徒指導担当教師として
- 生徒にいちばん近い存在として
(「なにも先生」よりも「部活先生」の方が熱心)
- 2) 勝つことが要求される
- 学校の経営戦略として
例) スポーツで名を上げたい
- 進路の選択肢を保証・開拓するために
例) 推薦入学枠の確保、特待生の確保と保証
- 教師としての身分を維持するために
例) 勝たなかったら「クビ」となる私立学校の講師

2. 競技団体の中で...

- 競技団体に代わって“選手強化”を担われる学校運動部 → 構造の問題

2) 組織の問題

「置かれた状況に問題がある」場合は、個人の問題というよりも組織の問題ととらえる方がよいかもしれない。熱心な「部活先生」は、おそらく生徒と接する機会も多いことだろう。だから生活指導場面における生徒の問題行動も目につきやすく、特別指導を担う立場に置かれることが多い。

熱心な「部活先生」に依存しきっている「なにも先生（なにもしない）」の存在が、「部活先生」を行き過ぎた熱心さに追い込むこともあるかもしれない。組織として学校が機能するにはどうすればよいのだろう。このようなことも課題研究のテーマとなるかもしれない。

「勝つことが要求される」背景にはいろいろあるが、そもそも「勝つことが要求される」こと自体、スポーツの自立、プレイヤーの自立の観点からはほど遠い。研究部から「あるべき姿」を、勇気をもって発信していきたい。

3) 構造（仕組み）の問題

競技団体に代わって強化を担わされているということは、組織の問題というより構造（仕組み）の問題である。そして構造の問題にこそ、高体連が真剣に向き合わねばならない課題が内包されている。

いくつかのキーワードで課題を指摘しておきたい。

・勝利至上主義 … 勝利を“志向”するのは当然だが、“至上”となると歪んでくる。

・選手制度 … 一つの学校で一つのチームだと多様性を受け入れられない。

・閉鎖体質 … 単一の学校、チームやクラブの中で閉じている。指導現場に閉鎖体質がある。

・長時間の練習 … 低強度で長時間の練習は、指導者の無知にも原因がある。生活指導の観点から生徒の「拘束」が容認されている風土もある。

・長期間の拘束 … シーズン制の概念も、メンバーシップの概念もない。そもそもこのようなことを考えることすらない。

・他の活動との両立不能 … 「試験1週間前に部活動禁止にして勉強させる」ことのおかしさ。

・ノックアウト方式の競技会 … 短期間にチャンピオンを決める方法としては有効だが、負ければ終わりの環境ではグッドルーザーが育たないし、スポーツを生活の一部にできにくい。

・偏ったスポーツ観 … 「日本的スポーツ観：これまでとこれから」参照

・「する」のみの部活動 … 「する」だけでなく、「みる」「語る」「ささえる」も重要。

・活かされない学校施設 … 学校運動部が占有。地域社会とのデュアルユースの可能性を探りたい。

・活かされない人材 … 「引退」をなくせば多世代型クラブが育つ。クラブのメンバーを大切に。

3. 「体罰」根絶へ向けて

繰り返すが、この問題は他人事ではない。高体連に関わる全ての人、またスポーツ指導に関わる全ての人、この問題を捉え、真摯に向き合い、改善していかねばならない。ユース年代のスポ

「体罰」の背景Ⅲ：構造(仕組み)の問題

1. 学校運動部の構造の問題①－“スポーツ”の観点から

1) 選手制度

- ・一つの学校に一つのチーム。部員が多いと補欠増、少ないと競技会参加不能
- ・3年間同じ「チーム」に所属し、「選手」を目指す
- （活動は学校(生徒会・同窓会・後援会含む)がささえてくれる)

2) トーナメント中心の競技会

- ・負ければ終りのノックアウト方式。常に「勝つ」ことが求められる。
- 「グッドルーザー」が育ちにくい。
- ・勝てば勝つほど負担(金銭的・時間的)が増大。ミスマッチも生じやすい。

3) 在校生のみを対象とする

- ・少子化、ニーズの多様化で、部活動が維持できない
- ・現状では、他校生や卒業生のための受け皿とまなりえない

4) 競技団体が担うべき部分を、学校運動部が請け負ってしまっている

2. 学校運動部の構造の問題②－“教育”の観点から

1) 生徒も教師も、あまりにも多くのエネルギーを注ぎすぎている

2) (多くのエネルギーを注いでいるので)多くの教育的効果が期待されている

- ・プレイ空間としてでなく、規律を学ぶ場として期待されている
- ・教師－生徒の関係を基盤として指導が為される

ーツ習慣を、スポーツ観を、抜本的に見直す契機とするべきである。

学校にできることはまだまだある。

体育の授業は、スポーツの担い手を育てるように工夫され、計画的に実践されているだろうか。運動部活動は多様な価値観を受け入れるゆたかなスポーツの受け皿となっているだろうか。

「引退」をなくせば学校運動部は多世代型クラブになるはずだが、教師が部活動を私物化して卒業生を排除してはいないだろうか。

小さな工夫、モデルとなるような実践事例は、おそらく全国各地に多々あるだろう。心ある指導者のささやかな実践の積み重ねが、学校体育をささえてきたのである。

こうしたささやかな実践を、研究大会で紹介しあうことが大切である。

課題研究は、可能性の追求でもある。よい事例、よい挑戦を、どんどん出していてもらいたい。

本報告の最後に、活性化委員長が自身の指導現場で取り組んでいることをいくつか紹介したい。学校運動部のクラブ化や、リーグシステムの導入事例である。

「あなたの学校だからできるでしょ」とよく言われる。確かにその通りである。「あなたの学校だからできる」ことを、それぞれが勇気をもって実践

し、それを発信してみてもはどうだろう。一人での発信が難しければ、仲間とともに組織を作り、発信してみてもはどうだろう。研究部はそもそもこのようなニーズから生まれた組織である。現場からの小さな問題意識や小さな改革が研究活動の活性化につながるのである。

なお、次ページ以降は、森川貞夫編著『日本のスポーツは暴力を克服できるか』（かもがわ出版、2013）の、中塚の執筆部分である。同書には嶋崎の原稿も掲載されている。ご参考いただければ幸いです。

以上

「体罰」根絶へ向けて

スポーツ習慣を改め、スポーツ観を見直すために！

1. ユース年代のスポーツ環境の抜本的な改革を！

1) 学校でできること ⇒ もっとある！ 新たな可能性の追求を！

① 学校という“組織”でできることは...

- ・保健体育の授業の充実 → 「スポーツ観」を見直すスポーツ教育を！
- ・学校運動部の“活性化”

→ レベルやニーズに応じた「スポーツ習慣」を形成するための多様な活動を！

② 学校という“施設”でできることは...

→ 競技団体or地域社会or卒業生や保護者etc. ... もっともっと活用できる！

2) 学校でできないこと ⇒ 無理してやらない、抱え込まない！

競技団体or地域社会or卒業生や保護者etc.に任せる

(「学校でしなければならないこと」には責任を持って取り組む。当然かつ前提)

タテ割り意識とヨコ並び意識をなくし、よりオープンに！

2. あるべき姿の共有を！

1) スポーツと勉強の二者択一でなく、“文武一道”を強く推進する

2) ロールモデルとなる人や組織をメディアで取り上げ、あるべき姿を共有する

⇒ オリンピック教育への期待

日本的スポーツ観：これまでとこれから

<これまで>

<これから>

チーム → クラブ

選手 → プレイヤー

多くの補欠 → 補欠ゼロ

競技志向 → プレイ・スポーツ・競技

大会中心 → 日常生活中心

トーナメント → リーグ

引退あり → 引退なしの生涯スポーツライフ

単一種目年中実施 → 複数種目シーズン制

「する」 → 「する」「みる」「語る」「ささえる」

単一価値観に集約 → 多様な価値観を認める

学校・企業 → 地域

全国高等学校体育連盟 研究部 活性化委員会

委員長 中塚義実 (筑波大学附属高校)

委員 小澤和真 (山梨県立吉田高校)、嶋崎雅規 (帝京高校)、南部健 (千葉県立船橋高校)

第1分科会

競技力の向上

会場：ホクト文化ホール 大ホール

- 1 駅伝王国福島
～強さの秘訣を部活動へ～
福島県立相馬農業高等学校 小 泉 元
- 2 横浜地区高体連 競泳における競技力向上を目指した10年間の取り組み
～トップ強化からボトムアップを狙った普及強化への転換～
横浜市立南高等学校 立 貞 栄 司
- 3 栄養指導に関する取り組みについて
～高等教育機関と連携して～
徳島県立鳴門渦潮高等学校 竹 内 靖 人
- 4 競技素人顧問達が、全国優勝24度の強豪校を作り上げたメソッドを分析する
～人間力向上に繋がる?!射撃競技の魅力とは～
大分県立由布高等学校 野 畑 卓 宏

【助言者】 信州大学
准教授 廣 野 準 一

【司会者】 新潟県高等学校体育連盟
理事長 間 健 太 郎

駅伝王国福島

～強さの秘訣を部活動へ～

福島県立相馬農業高等学校

小 泉 元

1.はじめに

2019年1月20日、天皇盃第24回全国都道府県対抗男子駅伝競走大会において悲願の初優勝を果たすことができた。これまで第4回大会と第15回大会の2位が最高順位。第15回大会においては3秒差で優勝を逃している。入賞も11回を数え、区間新記録を記録した区間もあり、優勝に向けて福島県の陸上関係者・陸上競技ファンからの期待は大きかった。福島県民が駅伝への関心が高い理由は、福島県出身者の全国的な活躍が大きい。1964年の東京オリンピックマラソン競技にて銅メダルを獲得した円谷幸吉選手を筆頭に、北京オリンピック出場の佐藤敦之選手、マラソン元日本記録保持者の藤田敦史選手など多くの著名選手を輩出している。駅伝では全国高等学校女子駅伝の第10回大会（平成10年）に田村高校が優勝、男子は優勝こそないものの多くの入賞を数え、第69回大会（平成30年）に学法石川高校が3位と結果を残している。大学駅伝では、元祖「山の神」でお馴染みの今井正人選手（順天堂大学卒）二代目「山の神」の柏原竜二選手（東洋大学卒）など毎年多くの福島県出身者が出場し大会を賑わせている。福島県はマラソン・駅伝において全国的な活躍をしている。今回は実業団企業が立地していない不利な条件にありながらも天皇盃全国都道府県対抗男子駅伝競走大会「優勝」に至った23年間の経過をたどることにより、部活動の競技力向上に貢献できるかを考察する。

2.調査方法

(1) 歴代の出場選手に福島県が優勝した要因についてのアンケートを実施し、好成績を残している要因についてまとめる。歴代監督・スタッフに福島県の優勝までの強化についてまとめる。

(2) 優勝監督である安西秀幸氏が重視するフィジカルトレーニングについてまとめる。

(3) フィジカルトレーニングを部活動で実施し、効果について検証する。

3.出場選手の見解

福島県チームが第1回から第24回大会までの全国都道府県対抗男子駅伝競走大会において優勝1回、準優勝2回、入賞8回と好成績を収めている要因について、選手として福島県チームに貢献した方々に以下のアンケートを実施し、多角的に優勝した要因を検証する。

(1) アンケート内容

優勝までの23年間の振り返り福島県チームが優勝した要因、好成績を収めている要因について ※原文掲載

○藤田 敦史氏（駒沢大学陸上競技部ヘッドコーチ マラソン元日本記録保持者）
優勝できた要因としては、福島県チームとして、過去に2度準優勝したことがあります。その悔しさを選手だけでなく、指導者の先生方がずっと持ち続けていたことが挙げられると思います。選手は毎年変わりますが、先生方が過去の選手たちの悔しさをいつも選手たちに話してくれていたことが大きいと思います。都道府県駅伝での優勝は、先人の思いを受け継いで、後に続く人たちが実直に頑張った結果だと思います。また、都道府県駅伝は、中学、高校、大学、実業団と幅広い年代でチームを組むだけでなく、様々なチームの選手の集合体となります。その上で福島県チームとして戦う難しさがあると思いますが、福島県は団結力が非常に強いように感じます。「福島のため」という強い意識が各選手や先生方にあることも強みだと思います。

○佐藤 敦之氏

（中国電力陸上競技部ヘッドコーチ 北京オリンピックマラソン代表）

第1回大会から5位入賞を果たし第4回大会で2位になったことで早い段階から優勝を目指せる雰囲気が出来上がっていた要因が大きい。第1回から入賞できた背景には平成7年の福島国体開催による強化と平成元年から始まった市町村対抗ふくしま駅伝の存在が大きい。振り返ると国体、ふくしま駅伝による選手強化がターニングポイントである。特にジュニアの先生方が熱心で当時、全国で活躍していた田村高校の練習内容を積極的に取り入れていた。

円谷幸吉選手をはじめ、福島県の指導者は功績を残した選手の練習や生活態度など取り入れるべきところを大会や合宿の際に伝え、伝承できていると感じる。

○小川 博之氏（国士舘大学陸上競技部駅伝助監督）

平成7年の福島国体が開催されるにあたり、平成元年から市町村対抗ふくしま駅伝の開催や高校によっては、選手を集めるなど強化を始めた事、また県強化合宿の開催数が増えた事、県をあげた強化が始まったことで競技人口の増加やジュニア選手達のモチベーションアップに繋がった。

中学、高校時代に全国などで活躍した選手が大学、実業団へ行き、駅伝や全国大会、世界大会などで活躍し、子供たちにとって憧れの選手が増えた事でジュニアの競技人口増加に繋がった。また、福島に誇りを持っている選手が多い。

○今井 正人氏（トヨタ自動車九州陸上競技部主将 元祖 山の神）

指導者が縦（中→高）と横（中→中・高→高）の情報交換や育成に向けて、強固な連携や協力体制が昔からある。選手間でも分け隔てなく教える・教わる雰囲気があり、上の世代の方々に対して憧れや目標とする選手が多いのも特性にある。

福島県選手団に選ばれる事（他県に比べてレベルも競争率も高いため）に強い誇りと憧れがあり、そこで活躍したいと思っている選手が私も含め多い。

どの世代にも、日本を代表する選手が居て、その選手に憧れや目標にする意識が強く芽生え、また下の代が同じ感情を抱ける。

ふくしま駅伝の存在。様々な年代の選手が多く出場でき、また市町村を代表して走るという経験が、走る事に対しての誇りや憧れ・楽しさに繋がっている。

○柏原 竜二氏（富士通株式会社 二代目 山の神）

我々の時代の強化合宿は情報交換の意味合いも強かったように感じます。また、代表になった経験をチームに持ち帰り、強化につながっているようにも感じました。他県との県代表ではそこまで差がないようにも感じますが、市町村対抗駅伝（ふくしま駅伝）は中間層の競技力向上には良い大会だと感じています。

○相澤 晃氏

（旭化成陸上競技部 現 10000m日本記録保持者 東京オリンピック 10000m代表）

中学生のときから年間数回の強化練習（合宿）を通して、他中学校生との交流や練習ができる。

強化合宿は中学校に陸上部がない場合（私の中学校では特設陸上部しかなかった）、練習メニューを勉強できる機会として有効であった。

学法石川高校ではトラックメインの練習メニューをこなしている。その結果、全国トップクラスの成績を残している。また、ロード練習をあまり行わないことによって実業団まで息が長い。

*私自身、オリンピックを通して学生時代はトラック練習に重きを置いた方がよいと感じた。そうしないと、世界には通用しない。

4. 福島県の強化策

（1）県陸上競技協会における強化

夏合宿

中長距離の発展を目的として毎年8月に実施している。強化指定選手以外にも参加を希望する高校生が参加でき、向上心に溢れる高校生が集結している。参加者を制限しない取組により、柏原竜二氏、相澤晃氏が述べていたように、各校の練習メニューなどの情報交換が行え、合宿後も切磋琢磨できる環境が整っている。開催地は県内の避暑地である会津地方の桧原湖周辺（標高800m）にて5泊6日の合宿を実施している。地元の協力もあり全天候型の400mトラックが4レーンと3kmのクロスカンントリーコースが整備されている。

春合宿

2月～3月にかけて実施しており、県内の上位選手（1～2年生）を召集している。春合宿では各種全国大会において好成績を収めることを目的に質の高い練習を実施している。練習場所は、温暖な太平洋沿岸の浜通り地方（いわき市）を中心に2泊3日程度の期間で実施している。近年はより充実した練習環境を求め、実業団にお世話になったり、県外へ遠征したりしている。

（2）ふくしま駅伝における強化

もう一つの強化策は、佐藤敦之氏、今井正人氏など多くの歴代選手が挙げた、1989年（平成元年）に始まった「ふくしま駅伝」である。ふくしま駅伝は、福島県のスポーツ振興、各市町村の「ふるさとおこし」という目的に加え、1995年の「ふくしま国体」開催を控え、中・長距離選手の育成・強化を目的に始まった。福島県陸上競技協会、福島民報社主催による県内全市町村対抗の駅伝で、中学生から一般まで

全 16 区間（95 k m）を走る大規模な駅伝大会である。テレビ、ラジオで生中継され、翌日の新聞は一面を飾るほど県民の注目度は高く、秋の風物詩となっている。特に中高生にとってはテレビ、新聞等で大きく取り上げられることもあり、ふくしま駅伝を走ることは陸上競技選手にとってステータスとなっている。また、箱根駅伝や実業団で活躍している選手も出場することもあり、憧れの選手の走りを体感できる貴重な機会でもある。県内選手は、ふくしま駅伝を経て全国に羽ばたいている。

5. 福島県チームの新たな取組

第 22 回大会より駒沢大学在学時に箱根駅伝総合優勝 2 回、日清食品グループでは 2012 年のニューイヤースタート駅伝でアンカーを務め優勝に貢献した安西秀幸氏が現役を引退し、福島県に戻ってきたことを契機に全国都道府県対抗男子駅伝の監督に就任した。

安西氏は、就任当初からトレーナーの桑井太陽氏（サンイリオス桑井鍼灸院）をチームに招聘し、理想としてきた長距離走を効率よく走る体の使い方を目的としたトレーニングを実施した。代表チームのため、安西氏と桑井氏のトレーニングは年末の 2 泊 3 日の合宿（中学生対象）、年始の 4 泊 5 日の合宿（中高年対象）、大会期間の 1 週間と限られた期間しか実施できない。そのため、選手からの感想、意見を大切にし、桑井氏とともにバージョンアップを重ねながら伝えるべきトレーニングを厳選して選手にフィードバックしている。選手は、トレーニング目的を理解しながら、質の高いトレーニングを実施している。

優勝後の第 25 回大会（2020 年）からは合宿でのフィジカルトレーニングをより効果的・効率的に実施するため、年始合宿（3 泊 4 日）の開催地を本県サッカー施設として有名な J ヴィレッジに変更した。J ヴィレッジには 400mトラック 4 レーン（照明付き）・悪天候時にも練習ができる屋根付きの屋外運動場・各種用具を備えたフィットネスルームなど充実した施設を有している。また、トラックが宿舎に隣接しているので、練習後すぐに食事・休息にあてられるため、選手がトレーニングに集中する環境が整っている。食事でのサポートも充実しており、管理栄養士によるアスリートに特化した栄養フルコース型の食事が提供される。

第 27 回大会（2022 年）に向けての年始合宿では、フィジカルトレーニングをベースとして、新たに走り方の特徴を A・B・C の 3 パターンに分類した。これまでは理想的とされる走り方を皆で追い求める傾向があったが、そこに合致しない走り方をする選手は修正を求められていた。しかし、骨格等の身体の作りは十人十色で

ベーシックエクササイズ（器具なし編）

1. 肩甲骨動き作り

- ◆ ヘリコプター
- ◆ 左右交互回旋→腕振り

2. 体幹

- ◆ フェイジックシェイク（クロス1分交替計2分）
- ◆ クロスシットアップ（10-5-5-5-5）
- ◆ ツイストV-Sit

3. 股関節動き作り・筋トレ

- ◆ サイドランジ（戻り・立位）
- ◆ フロントランジ左右ターン
- ◆ スプリットスクワーズ
- ◆ 壁ドン「両腕→回旋→腕振り」段階的に
- ◆ ケツドン（ヒップレンジツイスト）

4. アニマル



※ トレーニング内容の一例

あるため、全選手に1つの理想的な走り方がフィットするとは限らない。1つの理想的な走り方を求めることがかえってパフォーマンス低下につながる事象も起きていた。そういった事象に着目し、選手個々に適した走り方をA・B・Cの3パターンに分類した。パターン毎に特化した動作を実施すると、指導されてすぐにできる動作とそうでない動作が明確になる。円滑に実施できるパターンがその選手に該当する走り方のパターンとなり、個々の特性に応じたフィジカルトレーニングを実施している。各選手の特性を伸ばすフィジカルトレーニングにより走り方を効率的・効果的に高めて競技力向上に繋げている。

○パターン判別の動作チェック

A パターン



B パターン

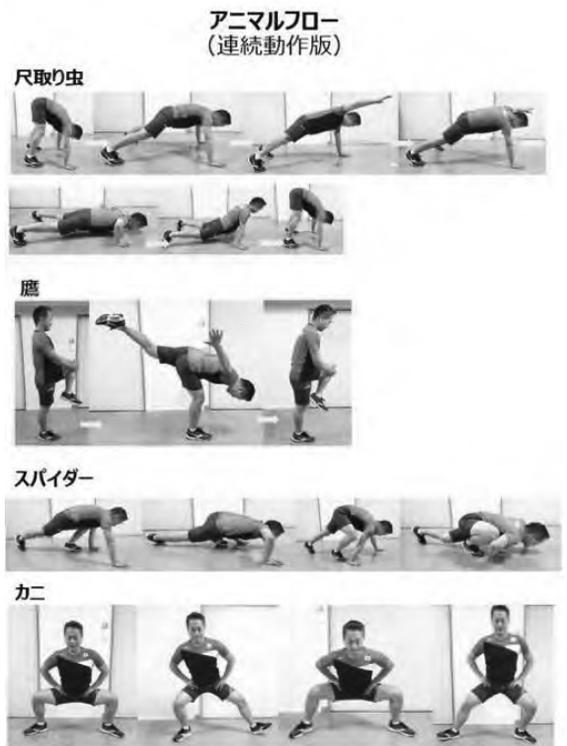


C パターン



6. 部活動での実施

私が顧問を務める陸上競技部(男子3名)では、赴任した4月から毎週月曜日をフィジカルトレーニング(アニマル中心)にあてている。1時間程度の実施ではあるが、休みなく実施するため短時間のトレーニングでもやり切ったという満足度は非常に高い。勤務校の部活動は活発に活動していることから、サッカー部7名、バドミントン部35名、バレーボール部13名にも協力してもらい各部活動のウォーミングアップとして6月上旬から基礎的なフィジカルトレーニングとして、アニマルを20分間実施している。アニマルは器具を必要とせず、場所を選ばず、覚えやすいトレーニングであることから、アニマル(4種目)を実施している。生徒にはアニマルの目的と効果が期待できる各競技の動作に関連させた説明をしたうえで実施しているため、高い意識をもって取り組んでいる。



○目的（アニマル）

- ・体幹強化
- ・下肢支持筋力の向上
- ・関節可動域の向上
- ・協調性（身体操作の学習）※長距離選手の不得意分野

★アニマルは伸ばしたい身体機能「トレーナビリティー」（伸びしろ、可能性）を引き出すトレーニング

生徒たちは、回を重ねるごとに本練習中の動作が安定し、体幹が向上していると実感する顧問もいた。生徒もアニマルに慣れ、身体の調和性を理解できるようになると細部のフォームにまで気を配れるようになってきた。2～3ヶ月という短期間での実施なのでパフォーマンス向上への効果は来年に期待だが、集中的に実施している陸上競技部男子生徒2名の成果と対象生徒58名へのアンケート調査を示す。

陸上競技部

男子生徒A（2年）

100m 4月 12秒13 ⇒ 8月 11秒59 0.54秒短縮

※地区新人大会（8/26～28）100m、200m第1位

男子生徒B（1年）

100m 4月 13秒08 ⇒ 6月 12秒37 0.71秒短縮

アンケート

・肩周りの筋力が向上したことでスタートの姿勢が安定して、スタートで先行できるようになった。上半身が厚くなったと言われるようになった。

（陸上競技部男子）

・2週間以上間隔が空いてアニマルトレーニングをすると次の日は動けない。

（陸上競技部男子）

・高く跳べるようになり、ヘディングの姿勢が安定した。（サッカー部男子）

・アニマルトレーニングの後は高く跳べる気がする。（サッカー部男子）

・特に変化を感じていない。初めのうちはキツかったけど続けていくうちに楽に出来るようになった（バレーボール部男子）

・股関節の動きが大きくなった。ネット際の球が拾いやすくなった気がする。だけどアニマルトレーニングはキツイ。

（バドミントン部女子）

7. まとめ ～部活動への還元について～

(1) 出場した著名選手へのアンケート調査から部活動の競技力向上へ

ふくしま駅伝

今井正人氏をはじめ多くの選手があげたふくしま駅伝はテレビ中継(一部生中継)もあり盛大に開催していることから、中高生にとって出場することがモチベーション・ステータスとなり、高い「向上心」につながっている。特に町、村では大いに注目を集めるため、選手の「自己有用感」の醸成に貢献している。生徒の「向上心」や「自己有用感」に資する活動を部活動に取り入れることが競技力向上に繋がる。

強化合宿

相澤晃氏などがあげた強化合宿は所属校に陸上競技部がない生徒にとって、専門的で競技力向上につながる練習メニューを経験できた。また、練習メニューを持ち帰り、個人だけでなく部活動に取り入れることで、チームの強化にも活用できるといったメリットがあった。強化合宿により強くなるためにすべきことを中学生の段階から明確になり、高い「向上心」に繋がった。

(2) 歴代監督・スタッフからの聞き取り調査から部活動の競技力向上へ

強化合宿

アンケート調査と同様に歴代監督・スタッフも強化合宿の効果をあげていた。特に夏合宿は選抜選手以外でも希望する選手を受け入れており、全国で活躍するための練習を経験することができた。合宿での練習を各学校に持ち帰り、部員と共有することで強豪校以外でも全国で活躍できる選手が現れるようになった。監督・スタッフは所属の枠を超えて強化のために必要な練習内容を福島県内に提供し続けた。ここが福島県長距離界の強さの基盤を作り出した。自校の強化だけでなく各校の取組みを合宿中などに語り合える風通しのよさが部活動の競技力向上に貢献した。

(3) 福島県チームのトレーニングから部活動の競技力向上へ

フィジカルトレーニング

多くの生徒は、一つ一つの動作が安定的にできるようになり、体幹の向上を感じていた。能力の高い生徒は、発展的なフィジカルトレーニングにも取り組んでおり、指導しながら生徒の身体操作の協調性が確実に向上していることが感じられた。地区大会等での効果を期待したい。紹介したアニマルは、専用の器具を必要とせず、自重のみで実施できる非常に導入しやすいトレーニングである。慣れてくると20分程度の短時間でも完結できるので、各競技に応じた専門的なトレーニング時間は確保できる。トレーニング効果の即効性は期待できないため、遠回りに思えたとしても継続的なフィジカルトレーニングは競技力向上には必要である。特に身体が発達途上の中高生は、協調性を高め、効率的な身体操作を身に付け、怪我をしない身体を作り上げてから本格的なトレーニングに移行しても遅くはない。今回の研究によりアニマルは陸上競技だけではなく、様々なスポーツ分野に応用できると感じた。部活動におけるウォーミングアップ等の導入として、アニマルを中心としたフィジカルトレーニングを取り入れることは、全ての部活動において競技力向上が十分に期待できる。

競技素人顧問達が、全国優勝24度の強豪校を作り上げたメソッドを分析する

～人間力向上に繋がる?! 射撃競技の魅力とは～

大分県立由布高等学校

野 畑 卓 宏

1. はじめに

近年の「#教師のバトン」炎上問題や「働き方改革」の流れからか、中学校を対象に部活動の社会体育化が推進され始めた。多忙な教育現場にあって、また、未経験の部活動を担当する不安や負担も訴えられる中で、この流れは社会の要請かもしれない。高校部活動においても、今後こうした流れの影響は少なからず受けることが予想される。しかしながら、これまで教育現場における競技力向上や人間形成において、部活動の果たしてきた役割が大きいことには変わりないであろう。そうでなければ、すでに部活動という存在自体が淘汰されているはずである。

大分県立由布高等学校（以下「本校」と略す）射撃部は、全国優勝や、国民体育大会における競技得点獲得など多くの活躍の歴史がある。しかしながら、その活躍は専門性のある顧問によってなされたわけではなく、未経験の部活動を担当する中で試行錯誤を繰り返しながら、また多方面からの強力なバックアップをいただきながら培われたものである。

本研究は本校射撃部の競技力及び人間力向上の取り組みと成果を分析、発表することにより、他競技にも応用可能な競技力向上のメソッドを提供するとともに、専門性のない部活動顧問による部活動指導への参考資料にさせていただくことを目的としたものである。

2. 研究の目的

- (1) 競技専門性のない顧問団による競技力向上のメソッドを自己分析する。
- (2) ライフル射撃競技の魅力进行分析し、これからのスポーツの在り方を探る。

3. ライフル射撃競技と本校の紹介

(1) ライフル射撃競技について

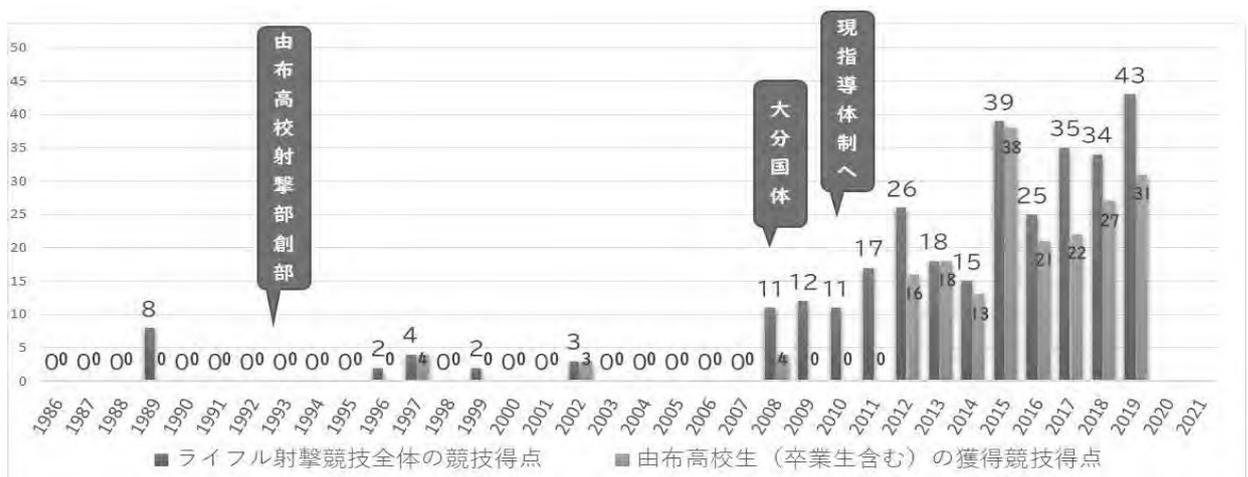
射撃競技と聞くと、まずはクレー射撃を思い浮かべる方が多いと思われるが、我々が行っている競技は固定された標的に向かうライフル射撃競技である（詳細は  ）。

(2) 本校と本校射撃部について

本校は、人口3万人強の由布市唯一の普通科高校である。全校生徒数は約250名（一学年80名ほど）の小規模な学校で、平成4年に本校から約2.5km離れた場所に県立庄内屋内競技場（射撃場）が新設され、それにともない本校に射撃部が創設された。

(3) 本校射撃部の競技力について

① 国民体育大会において



上図は1986年から2019年の間の国民体育大会ライフル射撃競技における本県の競技得点と、その得点内における本校射撃部(卒業生含む)の得点を示したものである。

一見して明らかなように、2008年の大分国体を境に得点が伸び始め、現強化体制となってから2年後の2012年から本校射撃部部員の得点が急激に上昇している。

② 本校射撃部の3学年部員数と主な競技成績

(2010年以前は、全国優勝、国際大会出場 とともになし)

年度	3学年部員数	全国大会	国際大会
2011(H23)	3名		
2012(H24)	5名		
2013(H25)	7名	団体優勝(1) 個人優勝(1)(2)	国際大会出場(1)
2014(H26)	5名	団体優勝(2)(3) 個人優勝(3)(4)	国際大会出場(2)
2015(H27)	12名	団体優勝(4) 個人優勝(5)(6)	国際大会出場(3)
2016(H28)	9名	個人優勝(7)(8)	
2017(H29)	9名	個人優勝(9)(10)	国際大会出場(4)
2018(H30)	14名	個人優勝(11)(12)	国際大会出場(5)
2019(R1)	16名	団体優勝(5)(6)	
2020(R2)	17名	個人優勝(13)(14)(15)	国際大会出場(6)
2021(R3)	14名	個人優勝(16)(17)	国際大会出場(7)(8)
2022(R4)	5名	個人優勝(18)	

()内は、本校射撃部としての通算回数

射撃競技歴皆無の私は、2011年度から本校射撃部の監督を務めるようになった。右も左もわからなかった私が、顧問達とどのような実践を行ったかを以下にまとめる。

4. 競技力向上メソッドの自己分析

(1) 専門性の高いトップコーチとの連携

2008年の大分国体に際して、磯部直樹氏が大分県チームに加わった。同氏は現役の射撃選手であり、過去に国際的な大会で活躍された実績を持つ。現在、県競技力向上スーパーコーチを務めており、2021年東京五輪では日本ライフルチームのヘッドコーチを務めるなど、名実ともにトップレベルのコーチである。

本校射撃部は、そのようなトップコーチと一緒に練習ができる環境にあり、また同氏も、我々に対して丁寧な指導を行ってくださるため、我々は非常に贅沢な環境にあるといえる。同氏は、2016年以降、日本代表選手の強化に携わっていて、年間の多くを東京や海外で過ごす多忙な身であり、直接指導の機会は減っているが、逆に我々は同氏から世界最先端の情報を得ることができるため、大分の指導法は日本最高レベルと自負している。

(2) 大分県からの金銭的支援

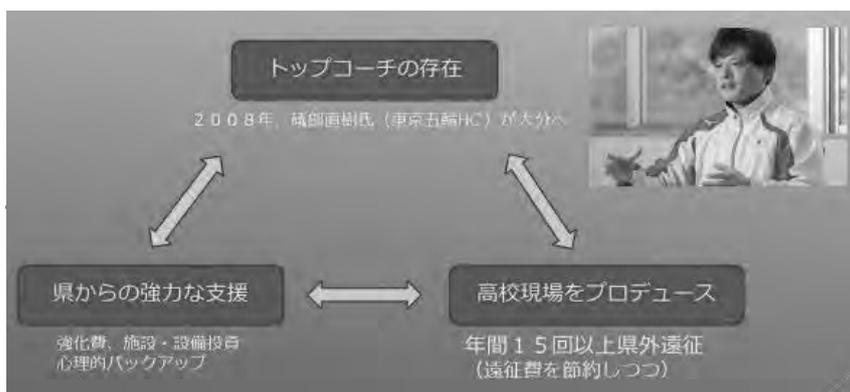
本校射撃部は、県から最重点の強化指定を受けており、競技用の高額な機材の購入

費や、遠征費を工面できていることも大きな助力となっている。

射撃競技に使用する機材は、銃自体はもとより、標的や得点処理用の機器など多岐にわたり、それぞれが大変高額なものである。機材の不足はすなわち練習量の不足につながるため、この点を支援していただけているのは非常にありがたい。

また、射撃競技は部活動として行っている学校が少ないため、競技力向上のためには他県で開催される大会への参加や、他県の射撃部との合同練習の実施といった活動が必要となる。その際の旅費に関しても県からの支援のおかげで、選手の負担を最小限におさえることができている。

- (3) トップコーチ、県、現場の3者が信頼関係を築き、ひとつの目標に向かうことで、大分の競技力の向上に繋がっている。



5. 現場のプロデュース

(1) 有効な遠征計画作成

① 費用対効果が最大限に得られるような計画を立案

遠征費について県からの支援をいただいているとはいえ、その予算は限られている。そのため、参加させる選手は競技力の高さだけでなく、向上心や規範意識も持ち合わせた者に限定している。

② 校内選考も含めて強化に活用

県外遠征参加選手選考方法は数ヶ月前から部員に周知し、主に練習の参加率や学校生活での規律遵守を前提に、参加基準得点(国体入賞レベル)を複数回クリアすることを条件にするなどして、総合的に判断している。こうした具体的な目標を設定することで、選手もモチベーションをもって練習に臨むことができている。

(例) 令和2年12月末に発表した関東遠征についての通知

関東遠征 参加選手決定方法	
遠征日程	令和2年3月19日(木)～22日(日)
派遣選手数	ライフル種目6～7名、ピストル種目2～3名 計9名
参加費用	4,000円
選手選考について	
(1) 選考期間	1月4日～3月8日
(2) 選考対象試合	上記期間のあらゆる記録会
(3) 選考方法	練習出席率9割以上 かつ 派遣基準得点を2回以上クリア
(4) 上記の決め方で派遣選手数に満たない場合	記録会の「上から3番目の得点」上位者から順に選出。
練習勤勉者の優遇措置	練習出席率100%以上の者は、「上から3番目の得点」に2点加点。

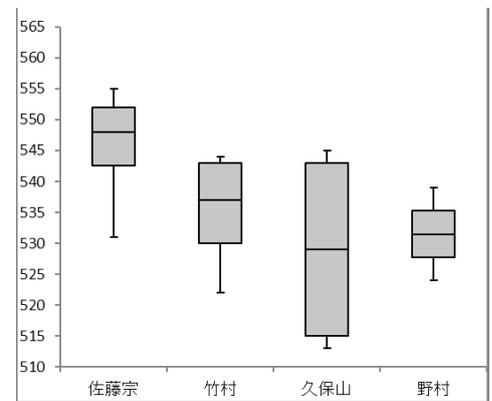
③ 選手選考資料は、中央値、箱ひげ図を活用

選手選考資料として、平均値ではなく中央値を利用している。その理由は、1度でも低い得点を撃つと平均点は大幅に下がってしまう。それに対し、中央値は最低点がどんなに低くても変わらない。また、四分位数や箱ひげ図も活用している。

(例) 国体選手選考資料(得点列举版)

	3月19日	3月26日	4月9日	4月24日	5月7.8日	5月22日	6月5日	6月11日	6月18日	6月24日		
	めじろん	全国高校選抜	国体予選	全九州	国体予選	春季BSS	県総体	国体予選	九州高校	西日本		
	大分	三重	大分	大分	大分	大分	大分	大分	佐賀	熊本		平均値
佐藤宗	544	541	553	547	531	549	542	552	555	552		546.6
竹村	528		543	544	544	522	537	530	542	533		535.9
久保山	513			515			543		545	529		529.0
野村				524				539				531.5
		2019	2018	2017	2016	2015	平均					
国体入賞得点		544	543	357	353	347						
60発換算		544	543	535.5	529.5	520.5	534.5					

これを箱ひげ図にすると右図のようになり、各選手の安定感が一目瞭然である。なお、これは高校1年時に学習する数学Iの内容である。



(2) メンタルマネジメント

どのスポーツでもメンタル面の強化は必要であるが、射撃競技はその精密性において高度なメンタル・マネジメントが要求される。

① 射撃は対戦ではなく採点競技

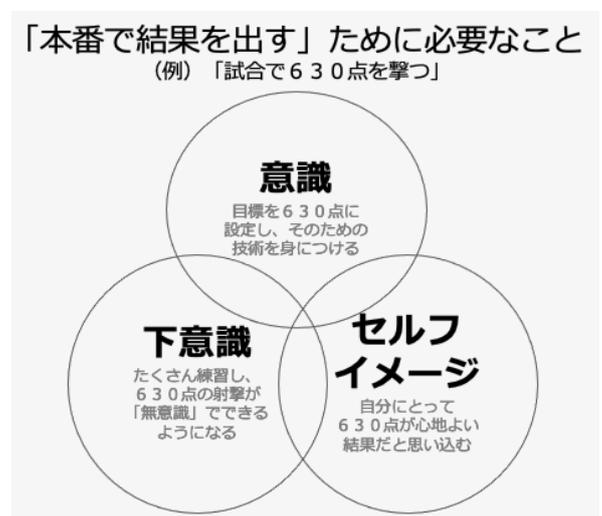
射撃競技は、対戦競技ではなく採点競技であることを強調している。試合は、「相手と戦う」のではなく、「同じように技術を磨いてきた仲間と同じ方向を向いて行う発表会」という意識を持たせている。試合時に「ライバルに勝ちたい」と願う選手は、練習通りの結果が出せないことが多い。逆に、自分の持っている競技に関する情報を包み隠さずライバルに助言できる者は、試合でも勝負強い。

② 結果ではなく、過程を重視

採点競技であるがゆえ、順位は自分では決められない。たとえ自己ベストを出したとしても、相手がそれを上回れば結果としては負けだが、ライバルを称える

③ セルフイメージを高める。

ラニー・バッシュャム(注1)や白石豊(注2)といった書籍にも学び、そのノウハウを部員にもわかりやすい形で提供するようにしている(右図)。



④ 選手にとって最適な声掛けで試合をコントロール

良くない声掛け

- ・ ○は△点撃ったみたいだから、君は△点以上じゃなきゃ勝てないよ。
⇒意識が得点に向いてしまい、リミッターがかかる。
- ・ 優勝したらご褒美に○○をあげるよ。
⇒採点競技なので、順位は自分で決められない。
- ・ ミスをしないように気をつけろよ。
⇒選手が負のイメージを持ってしまう。

良い声掛け

- ・ 競技中、フォロースルーだけを意識しよう！
⇒得点ではなく、感覚に目を向けさせる。
- ・ 死ぬわけじゃない（笑）。射撃スポーツを楽しんだらいいよ。
⇒これこそスポーツの原点。
- ・ この先の試合（色々な場面）に向けて、いい経験を積もう。
⇒この試合での経験は、必ず次につながる。

6. 射撃競技の魅力

(1) 社会人基礎力が向上する。

これまで本校射撃部の競技力向上のための取り組みをご紹介してきたが、部活動として学校現場の教員が顧問を務める以上、競技力だけではなく、これから社会へ出ていく部員たちの社会性もしっかり育成したいと考え、そのための指導も行ってきた。経済産業省は2006年に「社会人基礎力」として下の12の能力要素を提唱している。

- ・ 主体性 (物事に進んで取り組む力)
- ・ 働きかけ力 (他人に働きかけ、巻き込む力)
- ・ 実行力 (目的を設定し、確実に行動する力)
- ・ 課題発見力 (現状を分析し、目的や課題を明らかにする力)
- ・ 計画力 (課題の解決にプロセスを明らかにし、準備する力)
- ・ 創造力 (新しい価値を生み出す力)
- ・ 発信力 (自分の意見をわかりやすく伝える力)
- ・ 傾聴力 (相手の意見を丁寧に聴く力)
- ・ 柔軟性 (意見の違いや立場の違いを理解する力)
- ・ 状況把握力 (自分と周囲の人々や物事との関係性を理解する力)
- ・ 規律性 (社会のルールや人との約束を守る力)
- ・ ストレスコントロール力 (ストレスの発生源に対応する力)

これらの力が射撃競技を通して身についたかどうか、全国の射撃部部員415名と本校射撃部卒業生70名に協力をお願いし、Google フォームを用いて調査、集計を行った。(図1・図2)

図1 全国の射撃部回答

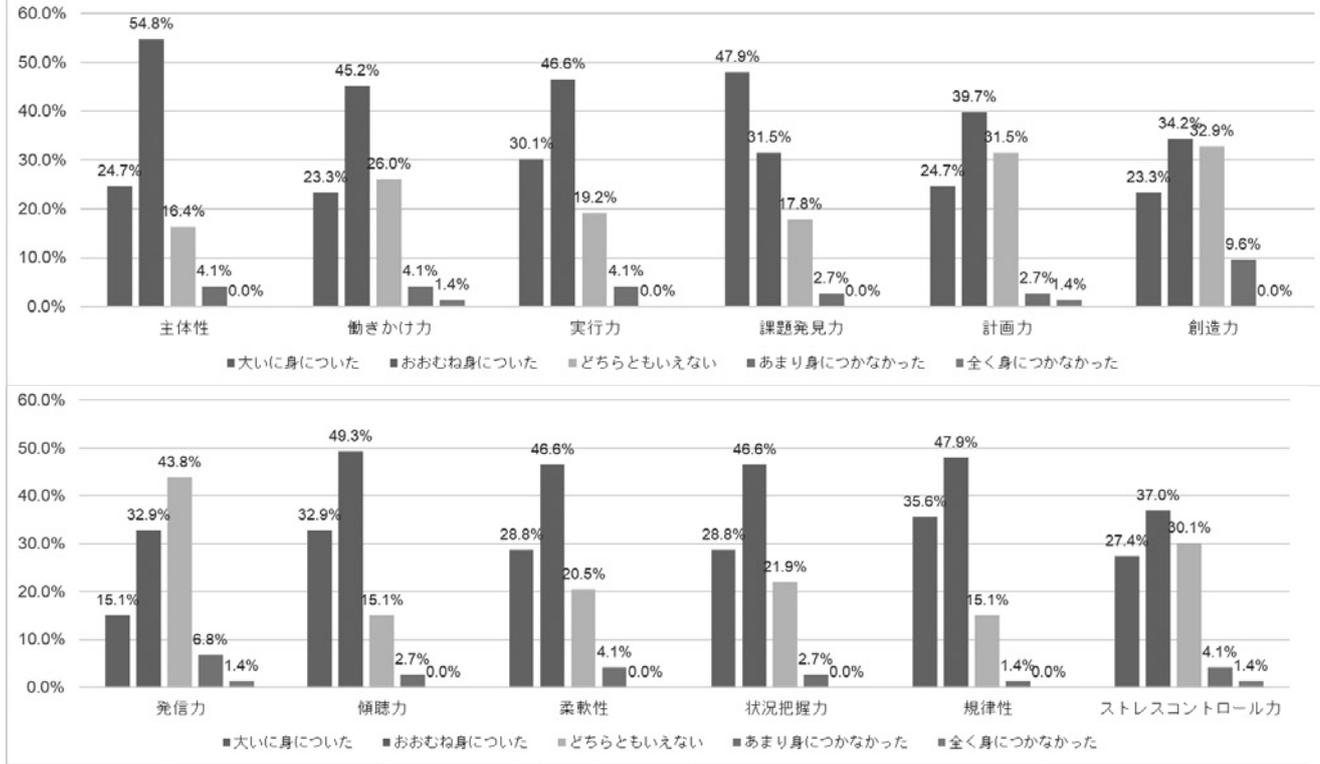
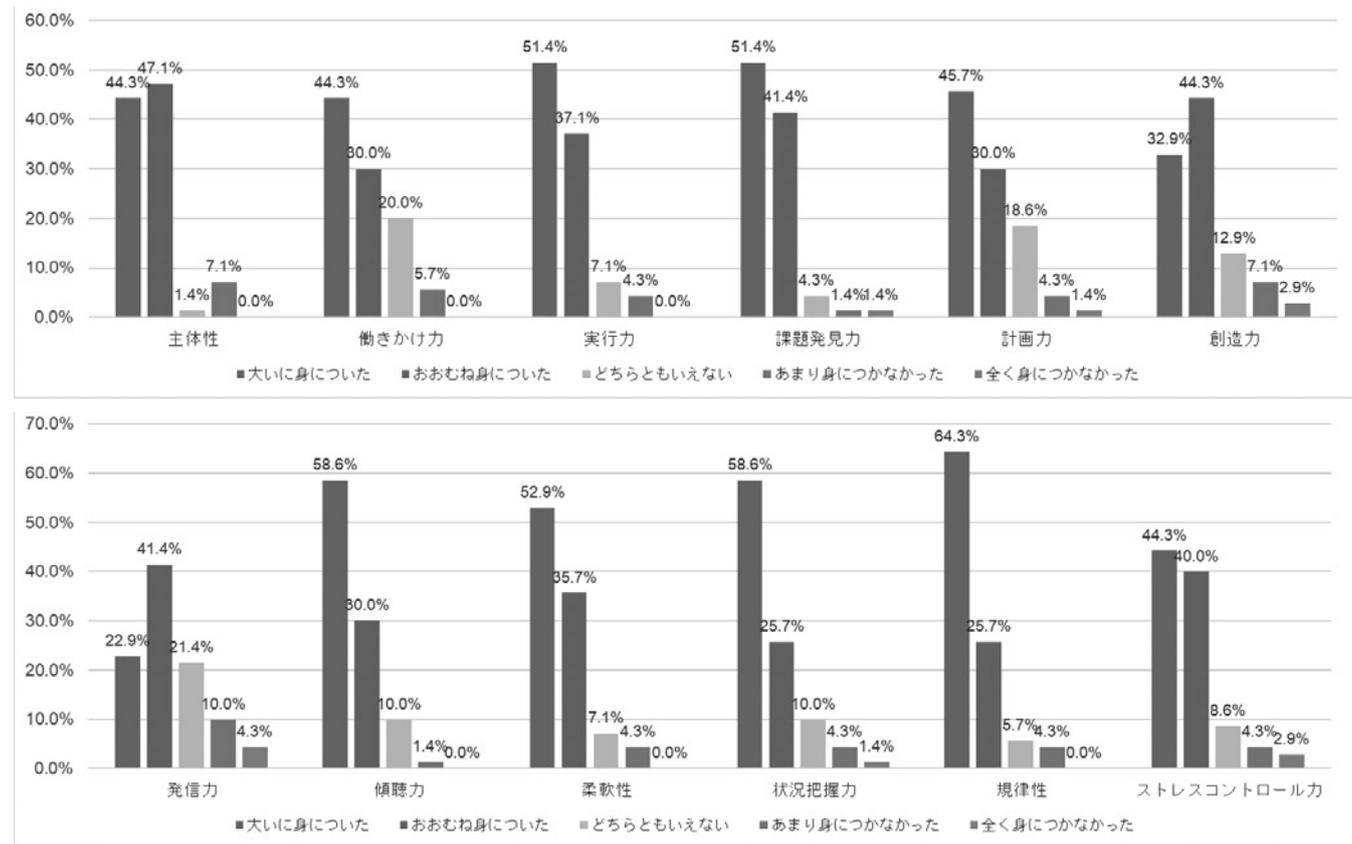


図2 本校射撃部卒業生の回答



多くの項目で、図2の方が好結果であるが、図1は全国の高校射撃部に所属する現役生が対象。それに対して、図2は、本校射撃部卒業生（過去10年間）が対象であるため、このデータは全国と本校の比較ではなく、現役生と卒業生との比較と捉えるべきデータである。つまり、3年間射撃競技を経験することで社会人基礎力が向上する可能性を示唆するものとなっている。

射撃競技のルールは、性善説に立っていることが多い。例えば、弾を込めずに引き金を引くと、空砲となる。ルール上、空砲を撃った場合は0点となる。射撃競技は、わずか1点で順位が大きく変動するため、空砲≒予選落ちとなる。選手は、空砲を撃った場合、審判に自己申告をしなければならない。しかしながら、誰が空砲を撃ったかは、審判にはほぼ分からない（音で射撃場内の誰かが空砲を撃ったと気付きはするが）。

選手は、自分が空砲を撃ったことを申告するには相当な人間力が必要である（自分の順位だけならまだしも、それが団体順位を左右することもあるし、ましてや高校3年間最後の試合が空砲で終わるとなると）。ここで誠実に、しかも即座に「空砲を自己申告できるかどうか」が、ある意味、3年間で身につけた人間力が問われる場面となる。

その他にも、射撃選手は、試合中コーチの指示を受けて戦うことはほとんどないため、自ら課題を発見し、課題を解決する能力が必要となる。銃刀法を扱うため、規律性も必要ともなる。このように、射撃競技は人間力向上にうってつけなのである。

7. 考察と課題

以上が本校射撃部の競技力向上の取り組み、そして我々が感じる射撃競技の魅力である。本校は、周囲の環境に恵まれている特異なケースであって、他校では応用できないように感じられる点も多いかもしれない。しかし、他校においても代替可能なリソースは自治体ごとに存在している可能性は十分にあるものと考え。自治体が行っている事業や指導力に長けた人材等のリソースは、アンテナを張って主体的に探せば意外に見つかるものである。業務過多のため余裕のない教育現場ではあるが、そうしたリソースを有効に活用することで、競技力の向上だけでなく指導の負担の軽減等、部活動の効率的な運営も図れるかもしれない。

今回、全国の射撃部員だけではなく、その部の顧問の先生方にも併せてアンケートを実施させていただいた。私と同様に射撃経験のない状態で顧問をされている方が47.3%と約半数に上る中、顧問を20年以上続けている方の合計は約30%となっており、未経験でも射撃という競技に魅せられ、競技に関わり続けている方の多さがうかがえた。また、どの顧問の先生も、生徒の成長が見られる点が魅力であることを挙げられていたことを嬉しく感じた。

1で述べたように学校現場における部活動のあり方が問われている現在ではあるが、本研究が競技力の向上だけでなく、部活動のあり方やその魅力を再考するヒントになることを願い、結びとしたい。

注1 ラニー・バッシュム／藤井 優『メンタル・マネージメント―勝つことの秘訣―』星雲社
(1997年2月12日)

注2 白石 豊『本番に強くなる―メンタルコーチが教えるプレッシャー克服法―』筑摩書房
(2009年6月1日)

第2分科会

健康と安全

会場：ホクト文化ホール 中ホール

- 1 道高体連のリアル二刀流 安心・安全と当番校業務
～ハンドブックとマニュアルの合わせ技一本を目指して～
市立札幌藻岩高等学校 原 大 輔
- 2 部活動における安全対策意識向上の必要性
～重大事故の教訓を生かして～
群馬県立渋川青翠高等学校 金 子 裕 晃
- 3 高校サッカー部員の熱中症に対する意識と予防行動の現状と課題
長野県中野西高等学校 坂 巻 裕 史
- 4 応急手当の技能を身に付ける教育活動について
～愛媛県の現状と各校の取組より～
愛媛県立今治西高等学校伯方分校 関 本 祐 太

【助言者】 松本大学
准教授 中 島 節 子

【司会者】 石川県高等学校体育連盟
理事長 糀 高 晴

道高体連のリアル二刀流 安心・安全と当番校業務

～ハンドブックとマニュアルの合わせ技一本を目指して～

市立札幌藻岩高等学校

原 大 輔

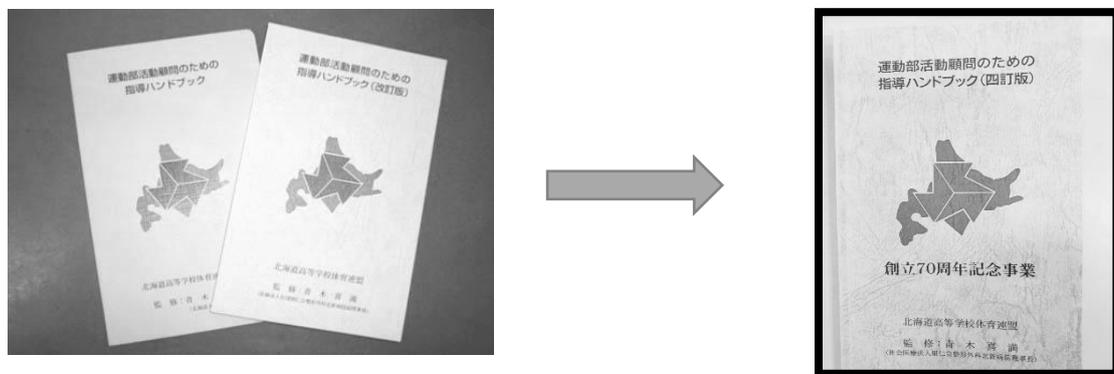
1 はじめに

北海道高等学校体育連盟（以下：道高体連と略す）の研究部設立が平成元年である。活動当初から顧問における「専門外」「指導の初心者」「怪我への緊急対応」などの課題解決を目指し「運動部活動顧問のための指導ハンドブック」（以下：ハンドブックと略す）を平成 14 年 7 月に発刊し、平成 16 年度「全国研究大会三重大会」活性化部会において発表している。その後の利用状況調査から平成 17 年、平成 25 年に改訂版を発刊した。

次に「安心」をキーワードに捉え、平成 18 年度より 2 カ年計画で「運動部活動顧問のための安全対策マニュアル」（以下：安全対策マニュアルと略す）の策定に取りかかり、種目別の安全対策チェックリストの作成を各専門委員長と協力しながら作成し平成 20 年に発刊した。このことについては平成 22 年度の全国研究大会の「健康安全分科会」において発表している。

それらの発表から 10 年以上経過し部活動を取り巻く環境は変化し大会運営や顧問の先生方に求められることが多くなっている。この現状を鑑み前回の発刊、研究発表から得られた知見を生かし道高体連設立 70 周年記念事業の一環として内容の大幅な更新を行いハンドブックは平成 31 年 3 月、安全対策マニュアルは令和 2 年 11 月に発刊した。

今研究大会では道高体連研究部が総力を挙げて取り組んだハンドブック・安全対策マニュアルの改訂版発刊にあたり経緯と背景を振り返り、今後の更なる活用策を探ることを目的とした。



2 研究の概要と内容

(1) ハンドブック作成、改訂の経緯

道高体連組織の活性化を促す意味から、運動部活動を指導する立場の先生方に何らかのアプローチが必要と考え平成 11 年度から作成に取りかかり 3 年の歳月をかけて平成 14 年度に完成した。内容は傷害の基礎知識を中心に事故発生時の対応を掲載した。

今回は道高体連創立 70 周年記念事業として、本ハンドブックの改訂を行ったが、改訂のコンセプトとしては、運動・スポーツの経験があるなしに関わらず、北海道の全ての運動部活動顧問の先生方が、部活動の運営や指導に当たる際の一助となればと作成したものである。従前から載せているスポーツ医・科学を踏まえた専門的知識、事故やケガの防止に向けた内容に加え、スポーツや部活動の意義、運動部活動の望ましい在り方、運動部活動の指導の充実に向けた取組など、多方面にわたる

観点から役立てられる内容を掲載している。

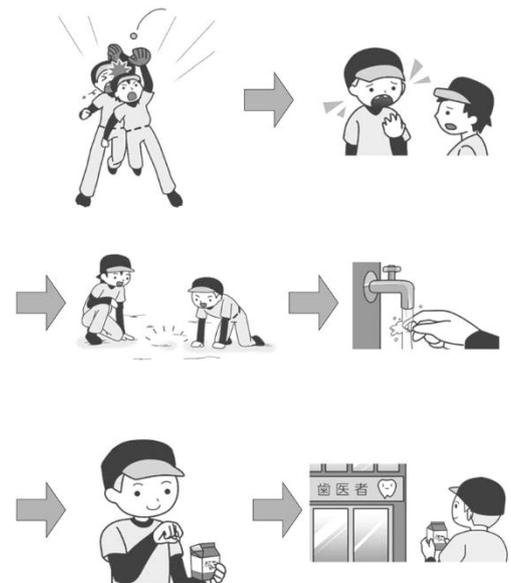
今回は運動部活動の望ましい在り方（適切な休養日の設定など）運動部活動の指導の充実に向けて（指導者の資質能力の向上、外部指導者の活用、体罰の防止）を追加した。更に歯に関する知識や栄養・休養に関する知識について大学教授、専門ドクターの監修を受けるなど多くの関係者からご協力を頂いた。

（2）追加部分（抜粋）

歯の脱離

歯の怪我によって、歯が歯を支える骨から抜け落ちた場合は抜けた歯を持って速やかに歯科医院を受診する必要がある。その場合の注意事項を示す。

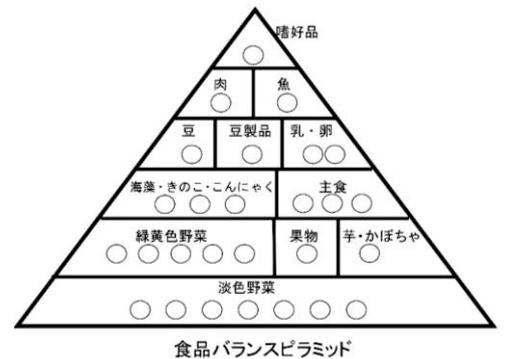
- ① ケガで抜けた歯が汚れている場合は、歯または歯と思われるものを探し、まず流水のみで洗浄する。
- ② 歯の根について肉には毛細血管が付いているので洗ったり歯の根の部分に触ったりしない。
- ③ 新鮮な牛乳につけて速やかに歯科受診する。新鮮な牛乳がない場合は本人の口の中に入れて受診する。牛乳使用の理由としてはヒト唾液の濃度に近く、保存液より予後が良い。
- ④ 口の中の抜けた部位は清潔なガーゼなどで圧迫し止血する。
- ⑤ 歯科への受診が早ければ早いほど元に戻る確率は高く予後も良い。



（3）栄養・休養に関する知識

栄養バランスを簡易的に自己評価する方法の例
食事ごとに食べた食品（食材）の種類分だけ色を塗る。一日の終わりにピラミッドを見て全ての○が満遍なく塗られている場合は、食事バランスはかなり良いと評価する。

1日に1つのピラミッドを使って1週間連続して記入すると、自身の食事傾向がほぼ理解できる。また記録をつける行為それ自体で食品群の構成の理解が進み、栄養バランスに意識を払うようになることが期待される。多くの選手たちにおいてマスコミ、指導者、チームメイトからの情報によりスポーツに有用な栄養素名の理解は進んでいる。しかしその栄養素がどの食材（食品）に含まれるかの食品学知識が乏しく、食事メニューを考えたり、コンビニ等で食品を選択する力量が不足している場合が多い。その他として近年「炭水化物低減」を謳った特



食品群	例
淡色野菜	キャベツ、白菜、レタス、きゅうり、大根、かぶ、なす、ごぼう、玉ねぎ、長ねぎ、れんこん、もやし、カリフラワー、とうもろこし、グリーンピース、セロリ、ラディッシュ
緑黄色野菜	ほうれんそう、小松菜、にんじん、トマト、にら、グリーンアスパラガス、ブロッコリー、ピーマン、オクラ、さやいんげん、青じそ、パセリ、香葱、クレソン、サラダ菜、三つ葉
果物	いちご、みかん、グレープフルーツ、バナナ、ブルーベリー
芋・かぼちゃ	じゃが芋、さつまいも、長芋、里芋、かぼちゃ
海藻・きのこ・こんにやく	わかめ、ひじき、もずく、のり、昆布、しいたけ、しめじ、えのきだけ、マッシュルーム、なめこ、まいたけ、こんにやく、しらたき、寒天、とろろ芋
主食	ごはん、パン、そば、うどん、中華めん、スパゲティ
豆	大豆、いんげん豆、うずら豆、あずき、そら豆、枝豆
豆製品	豆腐、油揚げ、厚揚げ、納豆、豆乳、高野豆腐、きな粉
乳・卵	牛乳、スキムミルク、ヨーグルト、チーズ、鶏卵、うずら卵
肉	牛肉、豚肉、鶏肉、ハム、ベーコン、ソーセージ、レバー類
魚(介)	あじ、さけ、いわし、さば、たら、まぐろ、いか、えび、たこ、あさり、しじみ、しらす、たらこ、ちくわ、かまぼこ
嗜好品	ジュース、ケーキ、クッキー、ゼリー、プリン、チョコレート、大福、おはぎ、アルコール飲料、ダイエット食品、(サプリメント)

(大野誠 肥満の生活ガイド, 2001より)

殊な食事方法が話題になっているが、PFC比をゆがめる可能性について留意すべき点や、サプリメント多用による過剰症の例などについても警鐘を鳴らしている。

(4) 安全対策マニュアル作成、改訂の経緯

指導者として安全対策を十分に行い「生徒が安全に活動でき」「保護者が安心して指導を委ね」「指導者が安心して指導に携われる」安心・安全の組織運営を目指した安全対策マニュアルづくりを手掛けた。事故を未然に防ぐ対策、事故防止のためのチェックリストをまとめ平成19年度に作成した。

この安全対策マニュアルのコンセプトとしては、運動部活動中に発生する可能性がある残念な事故を防止することである。初版においては、運動部活動中の事故防止に向けた種目別のチェックリストを中心に掲載したが、今回の改訂版では、種目別のチェックリストに加え、体育活動中の事故の未然防止、事故発生時の対応など、運動部活動中の事故防止に向けた取組等について掲載するとともに、各学校が健康・安全に配慮した全道大会等の当番校運営ができるよう、大会の事前準備や期間中の運営、事象ごとの危機管理マニュアルなど、当番校業務の円滑な推進と危機管理について掲載した。なお、当番校とは、北海道特有の大会運営の方法である。北海道の広域性から、高校総体（全道大会）を一カ所で行うことは困難であり、そのため、競技ごとに各地区で予選の地区大会を行って全道大会を開催する方式になっている。これらの大会の実施に当たっては、当番校となる学校の教員や生徒の協力が不可欠であり、競技ごとにローテーションを決めて地区大会や全道大会を行っている。

運動部活動顧問のための 安全対策マニュアル (改訂版)



北海道高等学校体育連盟

柔道

1. 代表的な事故事例

- (1) 頸部外傷・・・脳震盪→頸部打撲直後に意識障害（ボートしている）、頭痛、吐き気、気分不良、けいれん。
- (2) 頸部外傷・・・頸椎の脱臼や骨折によって頸髄が圧迫され、運動障害や感覚障害などが生じること。（技をかけた者のアイピンダなどでおこる）
- (3) 熱中症・・・Ⅰ度～めまい、失神・筋内の硬直、気分の不快、手足のしびれ。
Ⅱ度～頭痛、吐き気、嘔吐、倦怠感、虚脱感。
Ⅲ度～上記症状に加え、意識障害、けいれん、手足の運動障害・高体温。
- (4) 骨折・捻挫・脱臼・打撲・裂傷など。

2. 事故防止のためのチェックリスト

施設・設備・用具	<input type="checkbox"/> 活動スペースが十分に確保されているか。 <input type="checkbox"/> 柔道場の温度や湿度、換気等が活動に適しているか。 <input type="checkbox"/> 畳の劣化・表面に破損はないか。 <input type="checkbox"/> 畳がずれないように固定されているか・段差がないか。 <input type="checkbox"/> 畳の上や周囲に危険な物がないか。 <input type="checkbox"/> 畳の角や柱には防護対策がとられているか。 <input type="checkbox"/> 畳が湿度などの原因で滑りやすくなっていないか。 <input type="checkbox"/> 畳に汚れがなく衛生状態が保たれているか。 <input type="checkbox"/> 柔道衣は規定のものか。 <input type="checkbox"/> 柔道衣に穴が開いていたりしていないか、また衛生状態が保たれているか。
活動	<input type="checkbox"/> 活動計画が立てられているか。 <input type="checkbox"/> 練習時間や内容が体力・能力に合っているか。 <input type="checkbox"/> 危険な動作や禁止技を理解しているか。 <input type="checkbox"/> 起こりやすい怪我や事故について理解しているか。 <input type="checkbox"/> 健康状態に留意して活動しているか。 <input type="checkbox"/> 適度な休憩時間や水分補給が確保されているか。 <input type="checkbox"/> 練習内容により安全が確保されるスペースとなっているか。 <input type="checkbox"/> 相手の体格や技量に合った練習ができているか。 <input type="checkbox"/> 投げ技では周りの状態を確認しながら技をかけたり、返したりできているか。 <input type="checkbox"/> 固め技において「参った」の合図を理解し、同時に技を解くことができているか。 <input type="checkbox"/> 絞め技や関節技が怪我に繋がらないことを理解しているか。 <input type="checkbox"/> 活動後は清拭や手洗いやなどができているか。 <input type="checkbox"/> 脳震盪が疑われる場合は必ず医療機関を受診する。 <input type="checkbox"/> 脳震盪受傷後の活動復帰には必ず医師の診断を必要とする。
救急体制	<input type="checkbox"/> 応急処置に必要な物品を備えているか。 <input type="checkbox"/> 応急手当てについて理解し、行うことができるか。 <input type="checkbox"/> 緊急時の対応が周知され、連絡体制を整えているか。 <input type="checkbox"/> 脳震盪のチェック方法。 <input type="checkbox"/> 呼びかけの一目を開け、話すか。・無応の有無→打撲の状態を覚えているか。 <input type="checkbox"/> 頭痛、気分不良などの自覚症状の有無。 <input type="checkbox"/> 頸部の負傷の場合は体をゆすったり、動かしたりせずに救急隊の到着を待つ。 <input type="checkbox"/> 熱中症はⅠ度・Ⅱ度の症状がある場合は医療機関搬送・救急搬送を行う。

令和4年度全道高校体育大会当番校一覧 ※抜粋

No	種目	期日	支部	当番校	会場
1	陸上競技	6月14～17日	釧根	釧路明輝	釧路市民陸上競技場
2	体操	6月10～12日	専門部		道立野幌運動公園体育館
3	水泳（競泳）	7月1～3日	札幌	札幌手稲	道立野幌運動公園プール
	水泳（飛び込み）	7月1日（予定）	専門部		道立野幌運動公園プール
4	バスケットボール	6月17～20日	室蘭	北海道栄	苫小牧市総合体育館
5	バレーボール	6月14～17日	オホーツク	北見北斗	道立北見体育センター
6	卓球	6月14～17日	小樽	小樽桜陽	小樽市総合体育館
7	ソフトテニス	6月6～9日	空知	岩見沢緑陵	花咲スポーツ公園テニスコート
8	テニス	6月6～9日	札幌	札幌西陵	道立野幌運動公園テニスコート
9	バドミントン	6月21～24日	釧根	釧路工業	湿原の風アリーナ釧路

北海道10支部で持ち回りで大会運営に当たっている。

(5) 事象ごとの危機管理マニュアル

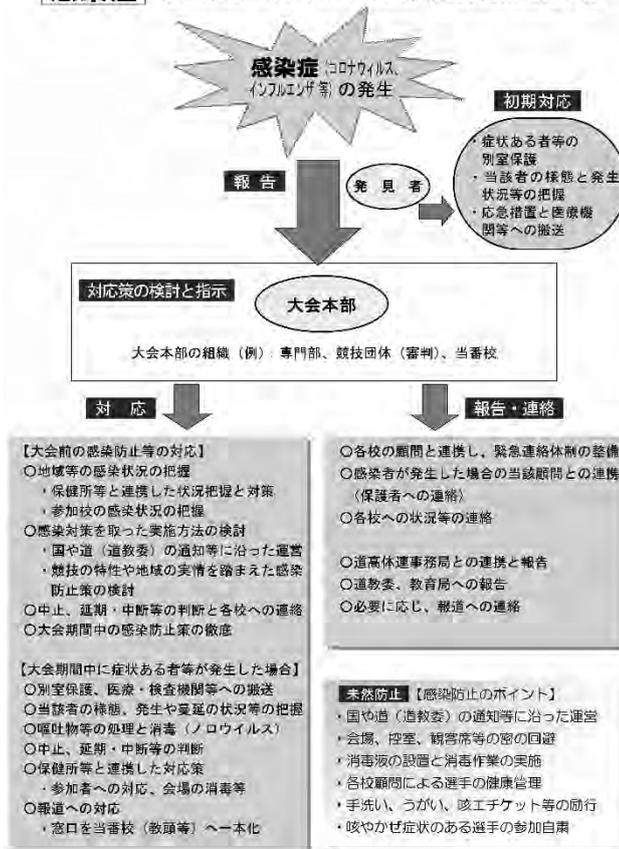
事象ごとの危機管理（雷、熱中症、食中毒、地震、感染症）対策を追加した。

大会運営に当たっては、参加する選手、観戦者、審判、運営者など、関係する全ての人々が健康・安全に競技を実施することが大前提である。そのため安全管理が不可欠であり、まずは、想定しうる危険因子をできるだけ排除して、健康安全を損なう事象の未然防止に万全を期することが重要である。しかし、どんなに万全の備えを行ったとしても、健康・安全を損なう事象は起こりうるものであり、万が一発生した場合に備え、危機管理マニュアルを作成するなどして構えを整えておく必要がある。各事象ごとの危機管理マニュアルの例を掲載した。このマニュアルの基本的な流れとしては、事象発生後に、発見者等が大会本部への連絡とともに行うべき初期対応を示し、大会本部に指揮系統が移った後は対応と報告・連絡とに大別し、取るべき行動の例を簡素化して示した。

各事象

- ・事故・ケガ・荒天（台風、大雨、落雷、暴風雪）
- ・自然災害（地震、津波、火山噴火）
- ・火災
- ・熱中症
- ・不審者、不審物
- ・感染症（コロナウイルス、インフルエンザ、ノロウイルス等）

感染症（コロナウイルス、インフルエンザ、ノロウイルス等）発生時のマニュアル



3 研究（調査）の方法

令和4年度に実施された全道大会の当番校と各競技専門委員長にハンドブック、安全対策マニュアルを事前に配布（道高体連）し大会に関する業務を運営してもらった。その後アンケートに回答いただき、その結果から役に立った項目、更新が必要な項目、新たに追加した方がよい項目などを調査した。アンケート回答集計にはグーグルフォームを利用した。

4 結果及び考察

(1) 当番校アンケートより

・活用された項目

事故防止のチェックリスト、悪天時の対応に活用した。

以前の大会で救急車の要請があったため事故発生時の対応、事故後の対応は参考になった。

・更新が必要な項目、新たに追加した方がよい項目

各競技専門部のガイドラインに明記してあるがコロナ陽性者が出たときの対応例があると良いと感じた。

・その他意見

冊子を大会時に持参するよりはHP上に載せて活用していく方がよいのではないかと感じる。高体連の大会運営での「する」スポーツ以外の価値づけがなされていない様に感じる。普遍的な価値を守りながら新たな価値を付加する「変化」がスポーツ教育に求められるのではないかと感じる。

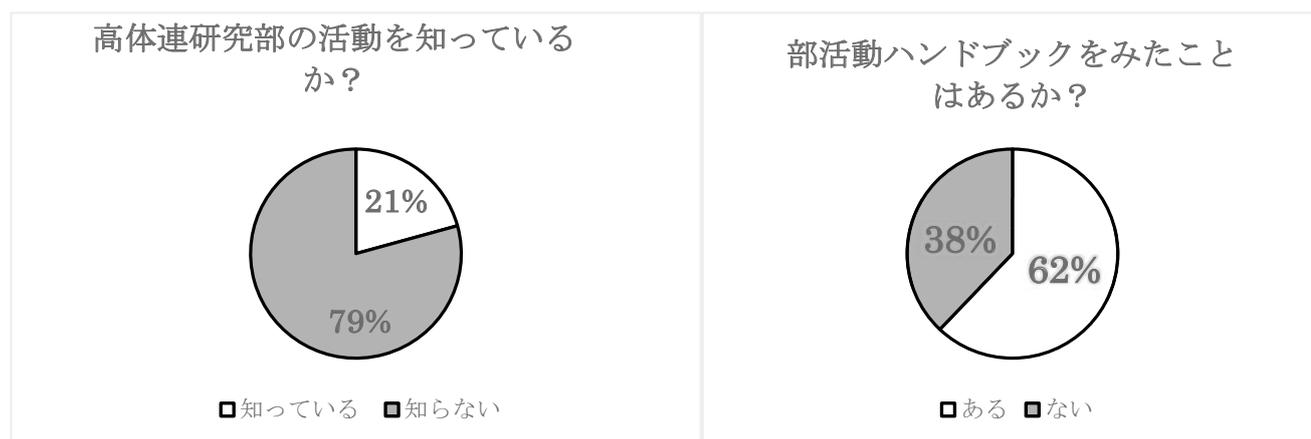


アンケート結果を受けて、今年度の北海道大会では大きな事故は起きずに無事終了したが、大会運営を行う上で不測の事態に備えて事故発生時の対応を当番校としては確認することができてマニュアルの意義があったと感じた。様々な事象に対応できるものにするために早めにコロナ陽性者が出た時の対応についてのマニュアルの作成や有観客で大会を運営した際の健康チェックや検温などのシステム等についても作成できたら良いと感じた。天候判断の中で雷に対する部分で雷には警報はなく注意報までしかないと判断するため競技を続行かどうかの判断を行う際に当番校へ注

意喚起する必要性があると感じた。紙媒体からスマホやタブレットなどの端末で様々な情報を確認することが多いので HP 上に必要なことを随時更新していくことを行いたい。それに伴い運動部活動顧問や選手が見たくなる情報を掲載する HP の運営も考えていかなければならない。最後に「する」スポーツ以外の部分に視点をもっていくことも検討事項として考えていく必要性がある。まさに今回新たに興した当番校業務は「支える」側の教員、ボランティア、補助生徒の活動が必要不可欠である。このような活動を通してスポーツへの関わり方の「支える」ことに興味を持ち自発的なボランティア活動に参加して、人の役に立っていることや人々との出会いを喜びとして感じるようにし、スポーツとの出会いに様々な選択肢を用意してあげることが必要であるのではないかと感じた。この内容をマニュアルなどにどのように落とし込んでいくかを今後の課題としていきたい。



(3) 令和3年度初任者研修アンケートより



昨年度より、新型コロナウイルス感染拡大防止のため初任者研修がオンラインでの実施になっている。各個人にハンドブックは1冊配布されている。安全対策マニュアルは運動部活動の部活数を各学校に配布済みであるが、保管や活用については各学校に一任している。年度当初の部活動顧問会議などで積極的に活用されるように啓蒙活動が必要である。少しずつではあるがハンドブックの周知、活用は増えてきているように感じる。しかしその活動を支えている研究部についてはあまり周知されていない現状がある。

5 まとめ

運動部活動は学校教育の一環として、スポーツに興味と関心を持つ同好の生徒の自主的、自発的な参加により、顧問の教員をはじめとした関係者の取り組みや指導の下に運動やスポーツを行うものであり、各学校で多様な活動が行われている。(効果的な運動部活動の推進リーフレットより)

その活動の中で自身の経験のない競技を受け持つことになった顧問や、指導経験豊かな顧問の両方をサポートできるハンドブック、事故、ケガの未然防止や危機管理マニュアルを含めた大会運営での注意事項をまとめた安全対策マニュアルを活用いただけるように今後も更新を重ね、現場の声を取り入れたものを作成していきたいと考える。このようなハンドブック、安全対策マニュアルを今まで以上に周知、啓蒙活動を行い安心・安全な運動部活動の更なる発展を研究部一同願っている。

最後に、お忙しい中アンケートに協力いただいた当番校や各競技専門委員長の先生方に感謝を申し上げます。

高校サッカー部員の熱中症に対する意識と予防行動の現状と課題

長野県中野西高等学校

坂 卷 裕 史

1. 緒言

近年、人間の産業活動に伴って排出された二酸化炭素やメタン等の温室効果ガスに起因するとされる地球温暖化が問題となっている。こうした温暖化を背景として、特に夏場には全国で熱中症により救急搬送される人が続出し、連日メディアを賑わしている。熱中症の発生を少しでも抑制できるよう、環境省や総務省消防庁、日本スポーツ協会、日本スポーツ振興センターなどにより熱中症予防のガイドブックや啓発動画、マニュアル等が作成され、熱中症予防の啓蒙活動が行われている。学校現場においても、現在は様々な場面で熱中症への注意喚起が行われ、対策が取られているものの、全国的に学校管理下における熱中症の児童生徒の発生が後を絶たない。とりわけ中学校と高校の運動部活動における熱中症の発生件数は際立って多く、日本スポーツ振興センターが毎年刊行している「学校の管理下の災害」によると、毎年計 3000 件ほどの熱中症事例が報告され、記録的な猛暑となった 2018 年は計 4000 件にのぼる。この件数は、中学校と高校における全熱中症事例件数の 60% を超える。また、同センターの学校事件事例検索データベースを用いて 2005 年度から 2020 年度における死亡見舞金の支払い事例を調べると、小学校・中学校・高校における熱中症での死亡事故は 32 件が確認でき、そのうち 71.9% に当たる 23 件は高校での運動部活動中に起きた事故である。このことから、高校での運動部活動における熱中症予防対策が重要な課題であることがわかる。

日本スポーツ協会は、スポーツ活動時の熱中症事故は無知と無理によって生じるものであり、適切な予防措置さえ講ずれば防ぐことが可能であることを指摘している。また、発症した場合でも、迅速かつ適切な処置をとることによって回復できる疾病である。運動部活動での熱中症を防ぐためには、顧問の教師だけではなく生徒自身が熱中症について正しく理解し、適切な予防行動を実践することが特に重要である。しかし、高校生運動部員が熱中症に対してどのような意識を持ち、部活動の現場で実際にどのような予防行動を行っているかの資料はきわめて少なく、実態は明らかになっていない。

そこで本研究では、高校生運動(サッカー)部員を対象にアンケート調査を行い、今年度および今までの部活動における熱中症様症状の経験の有無、今年度経験した時期、状況とその症状、実施した対処法、熱中症に対する意識、部活動中に行っている熱中症予防行動について明らかにすることを目的とし、得られた結果から、今後生徒の熱中症を予防するためにどのような対策を取るべきか考察する。

2. 研究方法

(1) 調査対象者

調査対象者は、長野県北信地区の高等学校 13 校のサッカー部に所属する高校 1～3 年生 302 名とした。データに欠損のある生徒を除いた 300 名を有効回答とし、有効回答率は 99.3%であった。

(2) 調査方法

調査期間は 2022 年 8 月 19 日から 2022 年 9 月 10 日までとし、無記名選択式および自由記述式を併用した質問紙調査を行った。各校の顧問の先生にアンケート用紙の配布および回収をお願いした。

(3) 調査内容

①対象者の学年

②熱中症様症状の経験

昨年度以前の部活動および今年度の部活動において、「暑さで具合が悪くなったことがありますか」の質問に対して、「ある」、「ない」、「わからない」のいずれかで回答を求めた。また、今年度の部活動において「ある」と回答した者に対して、経験した時期、経験した時の状況、経験した症状、対処方法についてそれぞれの選択肢（「その他」は自由記述）の中から複数回答可で回答を求めた。

③熱中症に対する意識

熱中症に対する意識 10 項目を作成し、「当てはまる」、「やや当てはまる」、「やや当てはまらない」、「当てはまらない」の 4 件法で回答を求めた。そこからさらに、「当てはまる」、「やや当てはまる」を「思う群」、「やや当てはまらない」、「当てはまらない」を「思わない群」とし、熱中症様症状の経験、熱中症予防行動について両群の比較を行った。

④今年度の部活動における熱中症予防行動

今年度の部活動中、どのような熱中症予防行動を行っていたか、熱中症予防行動 9 項目を作成し、「当てはまる」、「やや当てはまる」、「やや当てはまらない」、「当てはまらない」の 4 件法で回答を求めた。また、熱中症経験別や熱中症に対する意識の違いによって予防行動に差があるかどうか比較するために、「当てはまる」を 4 点、「やや当てはまる」を 3 点、「やや当てはまらない」を 2 点、「当てはまらない」を 1 点というように、予防行動の高い選択肢に高い点数を与えて熱中症予防行動得点とし、9 項目計 36 点満点とした。

⑤水分摂取について

今年度の部活動中に摂取した水分について、「水」、「スポーツドリンク」、「緑茶」、「麦茶」、「その他」（自由記述）の中から複数回答可で回答を求めた。

(4) 分析方法

単純集計の後、熱中症様症状の経験、熱中症に対する意識、熱中症予防行動の比較のために、 χ^2 検定、t 検定（有意水準は 5%）を行った。統計ソフトは IBM SPSS Statistics 29.0.0.0 を用いた。

(5) 倫理的配慮

対象者には、この調査において個人が特定されることはないこと、参加は自由意志であり拒否における不利益はないこと、ならびに本研究の目的と内容を書面にて説明し、アンケートへの回答をもって同意とした。

3. 結果と考察

(1) 対象者の学年

対象者は 1 年生 143 名、2 年生 111 名、3 年生 46 名の計 300 名であった。

(2) 熱中症様症状の経験

①部活動における熱中症様症状の経験の有無

「今年度の部活動において、暑さで具合が悪くなったこと(熱中症になったこと)がありますか」という質問に対し、経験がある者が32.3%(97名)、経験がない者が61.7%(185名)、わからない者が6.0%(18名)であった。また、今までに部活動において熱中症様症状を経験したことがある者(今年度、昨年度以前の両方あるいはどちらか一方に「あり」と回答)は49.0%(147名)、経験がない者(今年度、昨年度以前の両方に「なし」と回答)は41.0%(123名)、わからない者(今年度、昨年度以前の両方に「わからない」と回答、あるいはどちらか一方に「わからない」もう一方に「なし」と回答)は10.0%(30名)であった。

②今年度熱中症様症状を経験した時期と状況

今年度の部活動中に熱中症様症状の経験をした者97名に対し、経験した時期について複数回答可で回答を求めたところ、「4～6月」が14.4%(14名)、「7～8月」が87.6%(85名)、「わからない」が2.1%(2名)であった。消防庁が発表している全国の熱中症による救急搬送人員及び死亡者数も、7月と8月が他の月に比べ圧倒的に多く、今回の研究では救急搬送された者は1人もいなかったが、予想通り気温の高い7月～8月が最も多い結果となり、あらためて夏期の部活動における熱中症対策の重要性が示唆された。

また、経験した時の状況について複数回答可で回答を求めたところ、「試合中(公式戦、練習試合、紅白戦等)」が59.8%(58名)、「試合以外の練習中」が41.2%(40名)、「休憩中」が4.1%(4名)、「その他」が5.2%(5名)であった。「その他」の内訳は、「帰宅中」、「草取り中」、「ミーティング中」であった。夏期のサッカーの試合は、気温の高い昼間に炎天下で行われることも多く、競技特性上、選手が試合中にこまめに水分補給できる状態にはない。そのため、練習中に比べて熱中症になりやすい環境であると考えられる。特に現在は新型コロナウイルス感染予防の観点から、ピッチサイドに置いた飲水ボトルの共有が不可とされているため、前後半それぞれの半分の時間が経過した頃「飲水タイム」を設けることになっているものの、40分ハーフの試合であれば、およそ20分間は給水せずに高強度の運動を続けることになる。もちろん自分専用ボトルであれば従来通りピッチサイドに置いて飲水できることになっているが、そのような選手はほとんど見受けられず、仮に自分専用ボトルを置いていたとしても、実際に飲水できる機会はあまりない。さらに、今回アンケートを依頼した学校の中には、部員数が少ないために交代メンバーがあまりおらず、例えば体力レベルが低い1年生であってもフル出場しなければならないといったような状況がある。試合中に起こるすべての熱中症を防ぐことはかなり難しいと思われるが、指導者が選手に対して、事前の体調管理、試合前や飲水タイム、ハーフタイムでの適切な熱中症予防行動について指導することが必要であると考えられる。

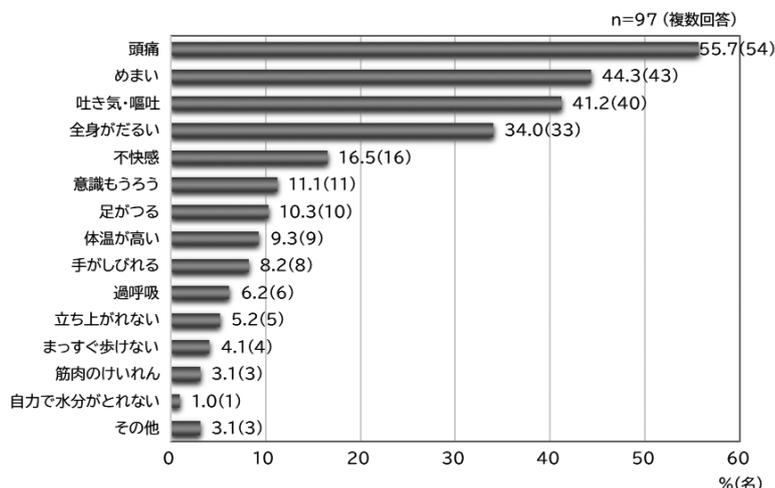


図1. 経験した症状

③今年度経験した熱中症様症状

今年度の部活動中に熱中症様症状の経験をした者 97 名に対し、経験した症状について複数回答可で回答を求めたところ、「頭痛」と回答した者が最も多く 55.7% (54 名)、次いで「めまい」44.3% (43 名)、「吐き気・嘔吐」41.2% (40 名) の順で多かった (図 1)。「その他」の内訳は、「耳鳴り」、「腹痛」、「寒気」であった。

④熱中症の対処方法

今年度の部活動中に熱中症様症状の経験をした者 97 名に対し、どのように対処したか複数回答可で回答を求めたところ、「水分補給」と回答した者が最も多く 95.9% (93 名)、次いで「涼しい場所に行く」68.0% (66 名)、「塩分補給」61.9% (60 名) の順で多かった (図 2)。救急車で病院搬送された者は一人もいなかった。水分補給のつもりでスポーツドリンクを飲むことにより無意識的に塩分を摂取していることも考えられるので、「塩分補給」の実際の数値はより高い可能性がある。

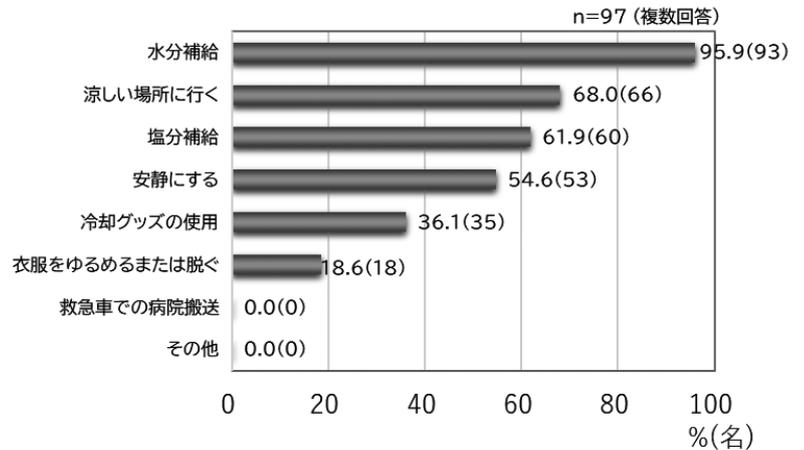


図2. 熱中症対処方法

(3) 熱中症様症状の経験と熱中症に対する意識の比較

熱中症の意識 10 項目について、今までに部活動において熱中症様症状を経験したことがある経験あり群 (147 名)、経験なし群 (123 名) で比較したところ、「②熱中症になっても対処できる」「③自分が熱中症になるかもしれない」「⑤軽い熱中症の症状があったとしても、普段と同じように活動する」「⑦活動中、熱中症にならないか不安だ」「⑨熱中症は身体的苦痛をもたらすものである」の 5 項目において、経験あり群で「思う群」が有意に多かった (表 1)。過去に熱中症にかかり苦痛を経験したことから、またなるかもしれないと不安に感じている者が多いと推測される。また実際に対処した経験が、対処できるという自信につながっていると考えられる。その自信に後押しされてか元々かは不明であるが、過去に熱中症を経験しているにもかかわらず、「軽い症状があっても普段と同じように活動する」と回答した者が多いことは大変興味深く、この意識を改善させることが部活動中に熱中症にかかる者を減少させる可能性が示唆された。今回の研究では、少なくとも今年度の部活動において救急搬送されるほどの重症を経験した者はいなかったが、軽い症状であっても暑熱環境下で運動をすることで重症化するリスクは当然高まるため危険である。

「⑥熱中症にならない自信がある」の項目においては、経験なし群で「思う群」が有意に多かった (表 1)。(4)②「熱中症経験と予防行動得点の比較」に記載の通り、経験なし群が経験あり群よりも有意に予防行動得点が高かったことと合わせて考えると、今までの部活動中に熱中症様症状を経験したことの無い者は、比較的熱中症の予防意識が高く、予防行動をとっているために熱中症にならない自信を持っている者が多い可能性が示唆された。

表1 熱中症様症状の経験と熱中症に対する意識の比較

熱中症の経験別	①熱中症は怖い		②熱中症になっても対処できる		③自分が熱中症になるかもしれない		④熱中症は誰でもなる可能性がある		⑤軽い熱中症の症状があっても活動する						
	思う群	思わない群	χ2	思う群	思わない群	χ2	思う群	思わない群	χ2	思う群	思わない群	χ2			
あり群 n=147	136(92.5)	11(7.5)	n.s.	111(75.5)	36(24.5)	*	140(95.2)	7(4.8)	***	145(98.6)	2(1.4)	n.s.	109(74.1)	38(25.9)	***
なし群 n=123	114(92.7)	9(7.3)		78(63.4)	45(36.6)		83(67.5)	40(32.5)		117(95.1)	6(4.9)		66(53.7)	57(46.3)	

熱中症の経験別	⑥熱中症にならない自信がある		⑦活動中、熱中症にならないか不安だ		⑧熱中症は予防できるものだ		⑨熱中症は身体的苦痛をもたらす		⑩熱中症は精神的苦痛をもたらす						
	思う群	思わない群	χ2	思う群	思わない群	χ2	思う群	思わない群	χ2	思う群	思わない群	χ2			
あり群 n=147	30(20.4)	117(79.6)	***	111(75.5)	36(24.5)	**	134(91.2)	13(8.8)	n.s.	136(92.5)	11(7.5)	*	106(72.1)	41(27.9)	n.s.
なし群 n=123	68(55.3)	55(44.7)		73(59.3)	50(40.7)		110(89.4)	13(10.6)		102(82.9)	21(17.1)		93(75.6)	30(24.4)	

経験あり群n=147 経験なし群n=123

*p<0.05, **p<0.01, ***p<0.001, n.s.:not significant

表2 熱中症経験と予防行動得点の比較

熱中症経験別	n	平均値(SD)	t検定
経験あり群	147	28.8(4.38)	p<0.001
経験なし群	123	30.9(5.09)	

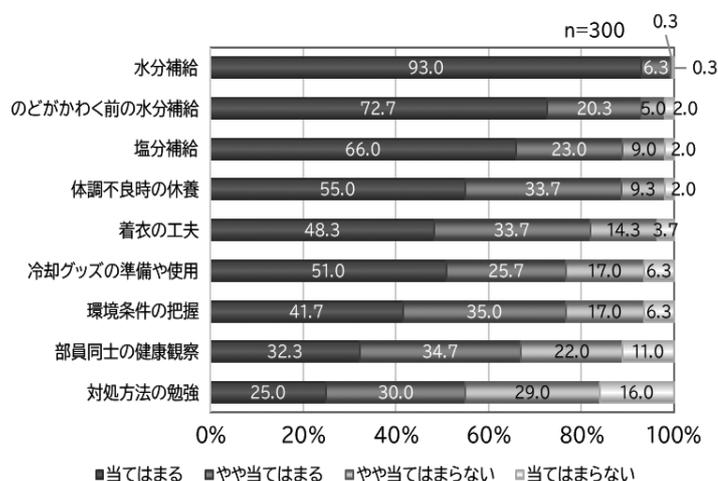


図3. 熱中症予防行動

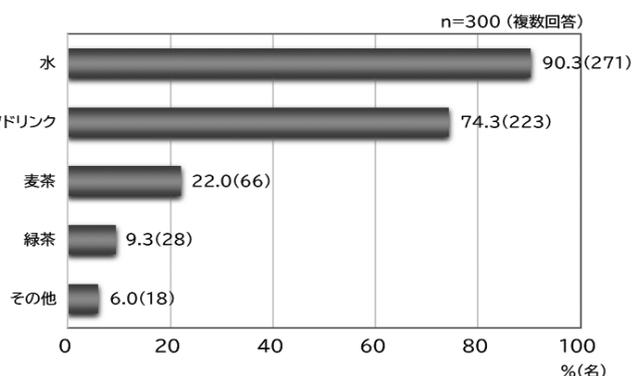


図4. 水分の種類

表3 熱中症様症状の経験と熱中症に対する意識の比較

熱中症に対する意識		n	平均値(SD)	t検定
①熱中症は怖い	思う群	277	29.7(4.55)	n.s.
	思わない群	23	29.3(7.20)	
②自分が熱中症になっても対処できる	思う群	206	29.9(4.70)	n.s.
	思わない群	94	29.0(4.95)	
③自分が熱中症になるかもしれない	思う群	245	29.4(4.61)	n.s.
	思わない群	55	30.4(5.47)	
④熱中症は誰でもなる可能性がある	思う群	290	29.6(4.60)	n.s.
	思わない群	10	30.2(8.97)	
⑤軽い熱中症の症状があったとしても、普段と同じように活動する	思う群	193	29.6(4.54)	n.s.
	思わない群	107	29.6(5.22)	
⑥熱中症にならない自信がある	思う群	111	30.9(4.55)	***
	思わない群	189	28.9(4.79)	
⑦活動中、熱中症にならないか不安だ	思う群	205	29.7(4.50)	n.s.
	思わない群	95	29.5(5.38)	
⑧熱中症は予防できるものである	思う群	273	29.7(4.63)	n.s.
	思わない群	27	28.7(6.19)	
⑨熱中症は身体的苦痛をもたらすものである	思う群	265	29.6(4.66)	n.s.
	思わない群	35	29.5(5.71)	
⑩熱中症は精神的苦痛をもたらすものである	思う群	222	29.8(4.81)	n.s.
	思わない群	78	29.2(4.73)	

***p<0.001, n.s.:not significant

(4) 熱中症予防行動

①今年度の部活動における熱中症予防行動

今年度の部活動中に行っていた熱中症予防行動について、当てはまる・やや当てはまると回答した者が最も多かった項目は「①水分補給」で99.3%であった。次いで「②のどがかわく前の水分補給」を行っていた者が93.0%と多かった(図3)。大学生のスポーツ活動における熱中症について調べた加納らの研究(2011年)では、のどがかわく前の水分補給を行っていた者は55.6%、同様に酒井らの研究(2020年)では82.7%であり、それらの研究に比べ本研究結果は高い値を示した。高校のサッカー部では、主にマネージャーが試合や練習の際に飲み物を準備、適宜補充するチームが多く、今回調査した13校のサッカー部のおそらくすべてがそのような状態であるため、水分補給を頻繁に行いやすい環境であったことが原因として考えられる。また、一般的に高校の部活動では、大学の部活動やサークル活動に比べ、顧問の教員をはじめとする指導者が現場で指導する頻度が多いと考えられ、指導者が選手に熱中症予防行動を促すことで、水分補給に限らず、他の予防行動項目でも得点が比較的高くなっている可能性がある。

②熱中症経験と予防行動得点の比較

経験なし群(123名)が経験あり群(147名)に比べ、今年度の部活動での予防行動の平均得点が有意に高かった(表2)。加納らの研究(2011年)、酒井らの研究(2020年)では、ともに熱中症の発症経験は予防意識に影響を及ぼしていないことが報告されているが、本研究では、熱中症様症状の経験がある者の方が熱中症の予防意識が低いという結果になった。前述したとおり、これまでに熱中症様症状を経験したことのある者の方が「軽い症状があっても普段と同じように活動する」と多く回答していることから、過去の経験が適切に予防意識に結び付いていないことが考えられる。

(5) 熱中症に対する意識と予防行動得点の比較

「⑥熱中症にならない自信がある」の項目において、「思う群」が「思わない群」に比べ予防行動の平均得点が有意に高かった(表3)。

(6) 水分摂取について

今年度の部活動中に摂取していた水分について尋ねたところ、「水」が90.3%と最も多く、次いで「スポーツドリンク」が74.3%、「麦茶」が22.0%の順であった(図4)。「その他」の内訳は、「経口補水液」、「レモン水」「ジャスミン茶」であった。熱中症予防として、発汗で失われる水分と塩分(ナトリウム)を運動中に摂取することの重要性は今や広く認識されているが、日本スポーツ協会の「スポーツ活動中の熱中症予防ガイドブック」には「飲料には、食塩(0.1~0.2%)と糖質を含んだものが効果的です。特に1時間以上の運動をする場合には、4~8%程度の糖質を含んだものが疲労の予防だけでなく水分補給効果にも役立ちます」と、糖質の有効性も記載されている。水分、塩分、糖分を同時に摂取できるスポーツドリンクや経口補水液は熱中症予防に最も適した飲料であると言えるだろう。また麦茶も、カフェインを含まないお茶であり、最近ではミネラル(ナトリウム)入りのものが一般的となっていることから適していると言える。カフェインには利尿作用があり、

体の水分を減少させることにつながるため（坂口ほか、2012；湯澤ほか、2012）、緑茶やジャスミン茶等のカフェインを含む飲料は不向きである。今回のアンケート結果によると、部活動中に「水」しか飲んでいない者もいたため、塩分や糖分の適切な摂取についての教育も必要であると考ええる。

4. まとめ

本研究では、高校サッカー部に所属する高校生 302 名を対象に、熱中症の経験、熱中症に対する意識、実施している熱中症予防行動を明らかにするため、質問紙調査を行った。その結果、以下のような知見を得た。

- (1) 今年度の部活動で熱中症様症状を経験した者は全体の 32.3%、今までに部活動で熱中症様症状を経験したことがある者は全体の 49.0%であった。今年度経験した時期は「7～8月」が最も多く、経験した状況では「試合中」が最も多かった。
- (2) 熱中症経験がある者の方が、再び熱中症にかかることを不安に思っているものの、熱中症の予防意識は低かった。また、経験がない者の方が予防行動を多くとっており、熱中症にかからない自信を持っていた。

以上より、特に夏期にサッカーの試合を行う際、試合前や飲水タイム中、ハーフタイム中に適切な予防措置を取るよう選手に指導すること、また、日常から選手に熱中症の正しい知識と安全にスポーツを行うための予防行動について教育していくことが重要であると考ええる。

謝辞

本研究を進めるにあたり、調査に快くご協力くださいました長野県北信地区のサッカー部顧問の先生方、選手の皆様、長野県高体連事務局の皆様にご心より感謝申し上げます。

参考文献

1. 日本スポーツ振興センター：学校の管理下の災害 [令和 3 年版]、2021
2. 日本スポーツ振興センター学校事故事例検索データベース WEB サイト：
<https://www.jpnsport.go.jp/anzen/Default.aspx?TabId=822>
(2022 年 8 月アクセス)
3. 日本スポーツ協会：スポーツ活動中の熱中症予防ガイドブック、2019
4. 総務省消防庁 WEB サイト：
https://www.fdma.go.jp/disaster/heatstroke/items/heatstroke_geppou_2021.pdf (2022 年 9 月アクセス)
5. 加納亜紀、木田京子、板谷昭彦他：女子大学生のスポーツ活動における熱中症予防の実態、園田学園女子大学論文集、2011
6. 酒井和音、葛西敦子：A 大学体育系部活動所属大学生が行う熱中症予防対策の現状と課題、弘前大学教育学部紀要第 124 号、2020
7. 坂口守男、中司妙美、飛谷渉他：保健センターにおける熱中症対策の取り組み状況、大阪教育大学紀要、2012
8. 湯澤斎、三宅康史、有賀徹：スポーツと熱中症、日本臨床、2012

第3分科会

部活動の活性化

会場：ホクト文化ホール 小ホール

- 1 持続可能な部活動を目指して
～部活動の意義とは～
茨城県立土浦第三高等学校 山本 達也

- 2 地域差、学校間差のない部活動
～日々の部活動を充実させる効果的な交流会～
石川県立金沢桜丘高等学校 松田 良平

- 3 未来へとつなぐ部活動の活性化
～オリンピック選手を育てるための22年間の活動と次への挑戦～
兵庫県立明石北高等学校 羽藤 辰雄

- 4 持続可能な部活動に向けて
～鹿児島県の運動部顧問の現状からみえてくること～
鹿児島県立甲南高等学校 上村 恵子

【助言者】 信州大学
講師 橋本 政晴

【司会者】 富山県高等学校体育連盟
理事長 山本 一登

持続可能な部活動を目指して

～部活動の意義とは～

茨城県立土浦第三高等学校

山 本 達 也

1. はじめに

近年、学校の働き方改革や部活動改革が叫ばれるようになってきた。文部科学省では、部活動ガイドライン（スポーツ庁，2018）を策定し、部活動の適正化を推進している。また、中央教育審議会答申や給特法改正の国会審議において、部活動を学校単位から地域単位の取組とすることが指摘され、令和5年度以降、休日の部活動を段階的に地域移行していくこととなっている。中学校では多くのモデルケース（例：茨城県つくば市立谷田部東中学校）が出てきているが、高等学校での例はまだまだ少ない。

部活動は学校教育の一環として学習指導要領に位置付けられた活動である。教科学習とは異なる集団での活動を通じた人間形成の機会でもあり、多様な生徒が活躍できる場ともなっている。しかしながら、教員の長時間勤務・休日勤務の一要因であり、特に競技の指導経験がない教師にとっては多大な負担となっている。

このような状況において、高校における「持続可能な部活動の形」はどのようなものなのか。また、学校教育における部活動の意義とは何なのか、考えていく。

2. 研究の目的

本研究の目的は大きな改革を求められている状況下で、高校における選手・教員・保護者が求めている「持続可能な部活動の形」はどのようなものなのか、明らかにしていくことにある。また部活動を学校から地域へ移行するという流れの中で、選手・教員・保護者が地域移行に対して、どのような考えを持っているかを提示することにより、今後の部活動改革が目指すべき方向性を示すことを目的としている。

3. 研究方法

	実施時期	対象	調査内容
研究① 部活動改革に関する調査	2021年1月 ～2月	茨城県内全高等学校運動部所属の生徒および保護者，茨城県内高等学校教諭	・持続可能な部活動に関する質問 ・部活動改革に関する質問
研究② 地域クラブ的な部活動に関する調査	2022年4月	茨城県西地区サッカー合同部活動チーム・茨城県土浦市ハンドボールクラブチーム所属選手	地域クラブ的な活動に関する質問
研究③ 部活動の意義に関する調査	2022年7月	茨城県内全高等学校運動部所属の生徒	部活動を行う理由・部活動に求めるもの

いずれも Google Forms を用いてアンケート調査を行った。

表 1 研究方法一覧

4. アンケート結果と考察

(1) 部活動改革に関する調査

本調査は令和元年度に茨城県内全高等学校の選手・保護者・教員を対象に実施した。選手 4570 名(男性 2719 名・女性 1851 名), 教員 1796 名(男性 1278 名・女性 518 名), 保護者 3437 名(男性 552 名・女性 2885 名)の回答を得た。調査内容は①持続可能な部活動に関する項目, ②部活動改革に関する項目に分けられる。

①持続可能な部活動に関する項目

		選手(4570)		教員(1796)		保護者(3437)	
適切だと思う部活動の活動時間(平日)	90分以内	1081	23.7%	458	25.5%	616	17.9%
	2時間以内	1960	42.9%	927	51.6%	1744	50.7%
	3時間以内	1135	24.8%	367	20.4%	888	25.8%
	4時間以内	260	5.7%	43	2.4%	160	4.7%
	4時間以上	134	2.9%	0	0.0%	29	0.8%
適切だと思う部活動の活動時間(休日)	90分以内	536	11.7%	161	9.0%	176	5.1%
	2時間以内	817	17.9%	307	17.1%	466	13.6%
	3時間以内	1637	35.8%	721	40.1%	1195	34.8%
	4時間以内	1002	21.9%	507	28.2%	1054	30.7%
	4時間以上	578	12.6%	100	5.6%	546	15.9%
適切だと思う練習試合の頻度 (休日が月に8日の場合)	必要なし	396	8.7%	166	9.2%	122	3.5%
	1回/2ヶ月	957	20.9%	411	22.9%	809	23.5%
	1回/月	1180	25.8%	605	33.7%	1086	31.6%
	2,3回/月	1332	29.1%	414	23.1%	1041	30.3%
	1回/週	555	12.1%	153	8.5%	287	8.4%
	それ以上	150	3.3%	47	2.6%	92	2.7%
適切だと思う朝練の頻度	必要ない	3125	68.4%	1520	84.6%	2400	69.8%
	1回/週	411	9.0%	59	3.3%	215	6.3%
	2,3回/週	581	12.7%	142	7.9%	532	15.5%
	毎日	453	9.9%	75	4.2%	290	8.4%
常時専門の指導者に指導してもらいたいのか?	はい	3137	68.6%	1216	67.7%	2661	77.4%
	いいえ	1433	31.4%	580	32.3%	776	22.6%

表 2 持続可能な部活動に関する質問への回答

選手・教員・保護者が求めている部活動像は以下のようにまとめることができる。

- ・ 平日の活動時間：2 時間以内/休日の活動時間：3 時間以内
- ・ 練習試合:月 1 回程度（多くて 3 回）
- ・ 朝練：なし
- ・ 専門の指導者：あり

しばしば「もっと練習をやってほしい」,「練習試合をもっとやってほしい」という要望が選手や保護者から出るという話を聞くことがあるが, 今回の調査結果からは, 一部からの要望であり, 全体としては選手や保護者, そして教員もそれほどさらなる活動を望んでいないことがわかる。

②部活動改革に関する項目

		選手(4570)		教員(1796)		保護者(3437)	
部活動改革という言葉聞いたことがあるか？	ある	1210	26.5%	1540	85.7%	1356	39.5%
	ない	3360	73.5%	256	14.3%	2081	60.5%
平日：学校部活動 休日：地域クラブとなったら参加（指導）するか？	平日&休日	2224	48.7%	635	35.4%	2056	59.8%
	平日のみ	2078	45.5%	1143	63.6%	1259	36.6%
	休日のみ	268	5.9%	18	1.0%	122	3.5%
選手・保護者 地域クラブの活動は費用がかかる可能性があるが, 参加するか？ 教員 特業手当が出ない可能性があるが, 指導するか？	参加する 指導する	1157	25.3%	512	28.5%	1467	42.7%
	無料なら参加する 手当でありなら 指導する	1744	38.2%	568	31.6%	1108	32.2%
	不参加	1669	36.5%	716	39.9%	862	25.1%
地域クラブの活動場所	平日と同じ場所	1374	30.1%	473	26.3%	960	27.9%
	平日と違う場所	236	5.2%	560	31.2%	93	2.7%
	どこでも参加	1651	36.1%	763	42.6%	1653	48.1%
	不参加	1309	28.6%			731	21.3%
平日も地域クラブの活動に参加（指導）できるとしたらどうするか？	学校部活動に参加	3990	87.3%	1558	86.7%	3220	93.7%
	地域クラブに参加	580	12.7%	238	13.3%	217	6.3%
入部したい部活動がない場合, 近隣の学校の部活動への参加が許可されれば通うか？	はい	1943	42.5%			1818	52.9%
	いいえ	2627	57.5%			1619	47.1%

表 3 部活動改革に関する質問への回答

調査をした令和元年度時点では, 部活動改革という言葉聞いたことがある選手・保護者は3割未満とほぼ周知されていなかった。一方で教員は8割以上が認知していた。

現在, 平日は学校部活動, 休日は地域クラブという形態へ部活動改革が進められている。しかしながら, 選手に関して, 「平日も休日も参加」(48.7%) が最も割合

が高いが、「平日のみ参加」(45.5%)も高い割合を示している。つまり、現在進められている休日の部活動の地域移行は、選手の希望とは異なる方向である可能性がある。さらに地域クラブに関して月謝といった費用がかかる場合は、さらに参加希望する選手は減っており、「地域クラブの活動には不参加」(36.5%)と「無料ならば参加」(38.2%)を合わせると、74.7%の選手が費用がかかる場合には参加しないと回答していることになる。教員に関しては、「地域クラブの指導には関わらない」(31.6%)と「手当が出ないならば指導しない」(23.1%)を合わせると54.1%と半数以上の教員が土日の指導には関わらないと回答した。現在進められている部活動の地域移行では、土日の指導に関して地域の人材を活用し、教員の負担を軽減することも目的の1つとなっている。半数以上の教員が土日の指導に携わらないと回答している状況では、地域の人材が見つからない場合には土日の活動を行うことが難しくなると考えられる。部活動を地域に移行できるかどうかは、環境整備にかかってくると言える。

今後、休日だけでなく、平日も地域クラブに活動を移行していく可能性がある。しかし、現在の学校部活動が選手の主な活動の場となっている状況下では、平日も地域クラブで活動できるとしても「学校部活動に参加」したいという割合が高い(選手87.3%、教員86.7%、保護者93.7%)。また、地域クラブへの移行だけでなく、複数の学校で拠点校を作り、部活動を運営するという事例(大阪府)も出てきている。それに関連した「近隣の学校の部活動への参加が許可されれば通うか」という質問について、選手42.5%、保護者52.9%が参加すると回答している。選手57.5%は他校の活動へは参加しないと回答しており、自分が通っている学校で活動したいと考えている選手も多いと言える。

(2) 茨城県内の実践例と調査

調査①の結果から必ずしも部活動の地域移行が選手に望まれているとは限らないことがわかった。しかし、茨城県内の部活動にもクラブチームのような活動をしている実践例がある。調査②では、こうした実践チームの紹介とその活動に対する選手の考えを考察していく。

①茨城県西地区合同サッカーチーム

背景：各校のサッカー部に所属しているが、学校単独では試合可能な部員数が確保できないため、人数不足となっている茨城県西地区の県立高校5校が合同チームを組み、合同練習や公式戦に出場している。

練習日・練習場所：1つの学校を拠点校とし、そこで毎週土曜日に活動している。長期休業中は平日も活動をする。

5校の選手が集まっており、地域のクラブチームに近い活動形態ではあるが、部活動の合同チームという位置づけである。そのため、以下のメリット・デメリットが出てくる。

メリット	デメリット
<ul style="list-style-type: none"> ・選手の活動は基本的に無料である。 ・教員は特殊業務手当が出る。 ・練習場所の確保が容易。 	<ul style="list-style-type: none"> ・部活動のため、練習の際に各学校の顧問教諭の引率が必要。 ・練習場所への移動が困難な選手もいる。

この活動を完全にクラブチームとすると、顧問教諭の引率は不要となるが、月謝等の費用が選手にかかる可能性が高い。また、練習場所を借りなければならなくなる。

②土浦市内ハンドボールクラブチーム

背景：土浦市の指導者および部員数が少ない学校の選手たちの十分なプレー機会を整えるため、同市内の指導者および部員数が多い学校と一緒にクラブチームとして活動している。

練習日・練習場所：A高校にてA高校の練習日でB高校の選手が参加できる日

このハンドボールクラブチームでは、A高校（部員数が多く、専門の指導者がいる）の部活動に人数が少なく、専門の指導者がいないB高校の選手たちが合同練習・練習試合を行いやすくしている。クラブチームという形とすることでB高校の顧問による引率が不要になり、B高校の各生徒が都合に合わせて、自由にA高校の練習に参加できるようになっている。

しかし、クラブチームの監督となっているのは地域のボランティアであるが、実際に指導しているのはA高校の教員であるため、教員の負担は減ってはいない。また、教員がメイン指導者のため、月謝等は集めておらず、無償の活動となっている。

③実践例の活動に関する調査

実践例のチームの所属選手に対して、所属チームの活動に関する調査を行ったところ、以下のようなことが示された。

- ・人数不足、専門の指導者がいないという要因が解消された場合、合同チーム（クラブチーム）の活動には参加しない。

上記のような要因がなければ、選手は自分が所属している高校のみの活動に参加し、合同チーム（クラブチーム）の活動には参加しないと考えている。つまり、学

校部活動が充実している場合に休日の活動を地域に移行して活動したいと考える選手の数は少ないのではないかと考えられる。

(3) 部活動の意義に関する調査結果と考察

調査①および調査②の結果から、「学校」での部活動の需要は低くないと言える。平日の部活動には参加したいが、休日の地域の活動に参加しないという状況において、選手は部活動に対してどのような意識を持っているのだろうか。

茨城県内全高等学校の運動部所属生徒を対象に「なぜ部活動を行っていますか?」、「部活動に求めているものは何ですか?」という2つの質問をした。5977人の回答を得た。その回答に対してテキストマイニング分析を行った。

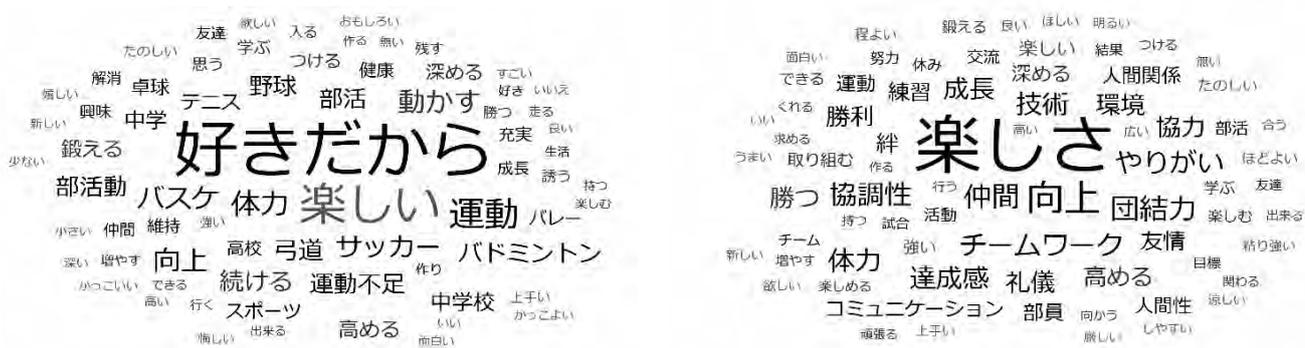


図1 なぜ部活動を行っていますか? 図2 部活動に求めているものは何ですか?

テキストマイニング分析の結果を見ると、選手が部活動を行っている理由としては、その競技が「好きだから」、「楽しい」という理由が多い結果であった。また、部活動に求めているものは、「楽しさ」が圧倒的に多く、次いで「仲間」や「団結力」、「チームワーク」など協調性に関することが多い。全国優勝や将来プロ選手を目指している選手と高校から部活動の競技を始める選手では、理由も求めているものも異なっている可能性も考えられる。しかしながら、それぞれの選手が様々な環境に置かれているが、部活動には「楽しさ」とその競技が「好き」ということが重要であることが示された。

5. まとめ

3つの調査を通して、現在の部活動の地域移行は必ずしも選手たちに歓迎されているとは限らないということが示された。トップレベルの選手は、平日だけでなく休日にも活動したいと考え、地域のクラブ活動にも参加すると考えられる。しかし、高校の部活動はそのような選手ばかりではない。むしろその競技が好きだから続けていたり、楽しそうだから、高校入学後に競技を始めたりする。純粋にプレーを楽しんでいる選手が多い。こうした選手は平日の活動だけで十分であり、休日に月謝等を払ってまで地域のチームに所属して活動したいとは考えていないようである。

高校段階での部活動を地域に移行するためには、平日の活動も地域クラブ化することも一案であるが、その場合には高校から新しいスポーツに挑戦するという選手がいなくなる可能性がある。また、自分が通っている高校で放課後活動できるから参加しているという選手も少なくない。自校での活動でない場合、選手はクラブの活動に参加しなくなるかもしれない。このように考えると高校生にとって部活動がスポーツを楽しむための大切な活動だと言える。今回の調査結果および考察は以下のようにまとめられる。

- ・学校部活動は高校生から必要とされている。
- ・平日の活動を学校部活動、休日の活動を地域に移行した場合、平日の学校部活動にのみ参加する選手も多い。
- ・特に平日の部活動と休日の地域クラブが併存する形式で、地域クラブで月謝等が必要となる場合、さらに需要は少なくなる。
- ・平日は地域クラブよりも学校部活動で活動したいと考えている選手が多い。
- ・選手にとって部活動は「楽しい」場である必要がある。

6. 今後の取り組み

研究開始時と現在とでは部活動改革の進み方が大きく変わってきた。研究開始時は、部活動のガイドラインが策定され、部活動の適正化が図られる中で、現在では休日の部活動を地域に移行するという流れになっている。部活動改革や休日の部活動の地域移行はニュース等でも大きく報じられており、多くの人が耳にする機会も増えていると思われる。したがって、本研究で実施した調査における部活動改革に関する選手や保護者の認知度は現在では大きく異なっていることが推測される。特に中学校の部活動の地域移行に関して、すでに始まっている地域もあり、そうした中学生たちが高校生になる中で地域クラブが身近となっていくと思われる。

今後の研究として行っていくのは2つである。1つは再度アンケートをとり、現在の茨城県内の高校年代の選手・保護者にとって、地域クラブでの活動をどう考えているのか、調査していく。もう1つは現在茨城県内において高校年代の部活動を地域移行するモデルケースを作ろうという動きがある。そのモデルケースの報告をし、そのモデルを高校年代の選手たちがどう考えるのか調査していく。

現在の形のまま、部活動を維持していくのは難しいと考えられる。部活動を取り巻く現在の潮流を踏まえると、学校から地域へと実施主体を移行していくことは避けられない。学校単位となるか、地域単位となるか、どちらの形となっても、活動の中心となるのは選手である。選手たちの考えも取り入れながら、現在の部活動改革が進んでいくように貢献したいと考える。

持続可能な部活動に向けて

～鹿児島県の運動部顧問の現状からみえてくること～

鹿児島県立甲南高等学校

上 村 恵 子

1. はじめに

令和2年9月にスポーツ庁から示された「学校の働き方改革を踏まえた部活動改革について」では、「休日に教科指導を行わないことと同様に、休日に教師が部活動の指導に携わる必要がない環境を構築すべきである。」と明言され、部活動改革の動きが一気に加速してきている。その一方、東京都の課題研究発表（令和元年度）では、運動部活動に取り組んだ生徒は、経済産業省の定義した「社会人基礎力」が、未加入の生徒より高い傾向にあるという報告がなされており、運動部活動に取り組むことのエビデンスを具体的に示していこうという動きが全国的に見られる。部活動は、生徒にとって教育的意義の高い活動であり、今後も活性化し、持続させていくべきものではあるが、教師の献身的な働き方に支えられてきたこれまで通りの形では、持続可能な状態にあるとはいえない。

そこで本研究では、鹿児島県の高等学校の運動部顧問に対して意識調査を行い、顧問や部活動の現状を把握し、持続性が叫ばれる部活動を活性化させていくための課題は何かを明らかにしたいと考え、主題に設定した。

2. 研究の目的

鹿児島県内の高等学校運動部顧問を対象としたアンケート調査を行い、部活動に対する意識や休日の指導の状況等について現状を把握し、運動部活動が抱える問題点等を指導者の視点から明確化する。また、持続可能な部活動にしていくために必要なものや今後の部活動に対する意見を集約し、研究の成果を広く共有することで、持続可能な部活動の在り方を考える一助とする。

3. 研究の方法

本県高体連研究部において、「持続可能な部活動に向けて（休日の部活動の在り方）」というテーマで、選択肢および自由記述形式の質問項目を作成し、アンケート調査を行い、その集計結果をもとに考察することとした。

- (1) 調査方法 Web アンケート形式（Google フォーム）による調査【下記 QR コード参照】
- (2) 調査対象 県内 15 校の運動部顧問をしている全教職員（回答数 310）
- (3) 調査期間 令和 3 年 12 月 20 日～令和 4 年 1 月 20 日
- (4) 調査内容 （属性）性別、年齢、担当教科、担当部活動、指導歴、
競技経験、役職、通勤時間
（質問項目）①部活動の必要性とその理由
②休日の部活動指導の現状
③地域移行後の休日の部活動指導
④持続可能な部活動に必要なもの（①～④選択肢）
⑤これからの運動部活動に対する意見（自由記述）



4. 結果と考察

今回調査対象とした 15 校は、本県研究部員の所属する高校を中心とし、その他、地域や校種等が偏らないよう考慮し抽出した。アンケート回答者の主な属性は表 1 のとおりである。

これらの属性と質問①～④との関連性、質問⑤の自由記述で出された内容を踏まえ、調査結果について考察する。

表1 回答者の主な属性

性別	男性 79%	女性 19%	答えたくない 2%			
年齢	20代 8%	30代 18%	40代 44%	50代 25%	60代 4%	70代 1%
教科	保健体育 20%		保健体育以外 80%			
指導歴	1年未満 20%	1～4年 24%	5～9年 12%	10～14年 9%	15年以上 35%	
競技経験	あり 56%		なし 44%			

(1) 部活動の必要性とその理由について

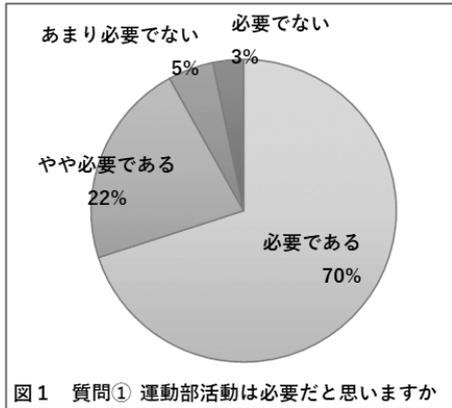


表2 「必要である」「やや必要である」の理由

人間性・社会性を育成できるから	70%
生徒のニーズがあるから	13%
体力向上、健康増進のため	9%
学校・地域活性化になるから	5%
スポーツクラブ等より費用がかからないから	2%
課外活動として	1%
その他	0%
計	100%

表3 「あまり必要でない」「必要でない」の理由

教員が多忙となるから	52%
地域・クラブチームでもできるから	44%
なくても体力健康増進はできるから	0%
なくても人間性・社会性を育成できるから	0%
学校・地域活性化につながるとは限らないから	0%
生徒のニーズがないから	0%
道具や遠征費等の費用がかかるから	0%
その他	4%
計	100%

図1より、運動部活動は「必要・やや必要」とした回答が92%であった。その理由は、「人間性・社会性育成」が70%と突出しており、多くの教員が、生徒の人的成長に部活動が果たす役割は大きいと捉えていることがわかる。また「生徒のニーズ」という回答も13%ある。これは、「部活動をしたい、楽しみたい、強くなりたい」といった生徒の希望や要望があるのはもちろんのこと、学校によっては、特定の運動部がその学校の魅力となり、中学生の入学の動機となっている場合もあり、その必要性を感じていると考えられる。なお、質問①の回答については、競技経験の有無において、自身が競技を経験してきた人ほど、部活動の必要性を感じている傾向がみえたが、その他の属性については、差異はほとんどみられなかった。

◆自由記述から関連記述の抜粋

- ・部活動は生徒の人的成長に大いに効果が期待でき、学校の活性化に貢献できる。また、生徒の将来の可能性を広げる活動であり、継続していくことが生徒のためになる。
- ・学校における部活動の教育的な必要性は大いに感じている。教科指導、生徒指導、部活動が共に関係を持ちながら生徒の健全育成を目指す形が最も健康的だ。
- ・経済面でも施設面でも、日本国内では部活動が必要なのは間違いない。
- ・学校に〇〇部があるから入学したいという生徒もいるので部活動はあった方がよい。
- ・部活動がクラブでないことの前向きな意義を大切にしていけることが大事。教員も学ぶことは多く、新しいことを経験し学ぶチャンスなはずなのにネガティブなことしか言わない教員がピックアップされ部活動がマイナスなイメージになっていくことが勿体ない。

その一方で、「あまり必要ない・必要ない」と回答した人の理由は、「教員の多忙」が52%、「地域・クラブチームでもできる」が44%となっている。スポーツ庁から出された「運動部活動の在り方に関する総合的なガイドライン(平成30年3月)」(以下「部活動ガイドライン」と略す)により、適切な休養日等が設定され、以前より休みやすい環境になっているところではあるが、部活動によって多忙さを感じている教員も未だにいることがうかがえる。また、その多忙さや、未経験の競技でも顧問をせざるを得ないという指導の困難さから、外部・地域へ

の移行や、負担の軽減を求める声もある。

◆自由記述から関連記述の抜粋

- ・部活動は教員にとってとても負担。平日も 19 時まで拘束されたりするので、早く外部に委託したい。
- ・持ち帰りの仕事を含めると残業時間は毎月 100 時間を超えている。部活動も含め、負担を軽減してほしい。
- ・文化系部顧問との掛け持ちで、未経験の運動部の顧問が負担になっている。運動部は特にケガ等の心配や練習の指導などもあるので、未経験者には精神的に辛いものがある。生徒主体にするにも、正しい練習の仕方かどうかは教員側の判断が難しい。
- ・部活動を通して人間力が鍛えられるという思い込みをなくさなければ変わらない。地域に部活動を移行すれば、小規模校における問題の解消、生徒が地域の専門性をもった人に指導してもらえる点などメリットは大きい。
- ・部活動の時間を他の生徒の個別対応や進路相談に充てる時間へと転換する必要がある。
- ・学校とは完全に切り離し、一刻も早く社会教育に委ねてもらいたい。

全体として見ると、部活動の必要性を考える際、「必要あり」は生徒の「人間的成長」が主なメリット、「必要なし」は教員の「多忙さ」が主なデメリットとなっている。しかし、「必要あり」と答えていても、中には「多忙さ」を感じている人もいる。また、「必要なし」と答えていても「人間性・社会性の育成」について否定しているのではない。デメリットの解消に必要な対策を講じ、生徒がメリットを得られる環境を維持していくことが、持続可能な部活動に繋がっていくと考える。

(2) 休日の部活動指導の現状について

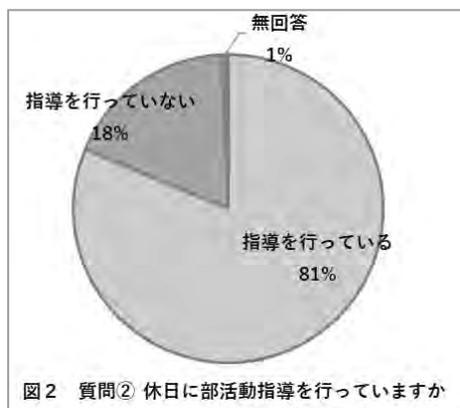


表4 指導を行っていない理由

複数の顧問がいるため（正顧問が指導している、交替で指導しているなど）	47%
自分や家族との時間を確保したいから	14%
専門的指導ができないから	14%
休日に部活動を実施していないから	9%
勤務時間外であるため	5%
進路指導や教材研究など、その他の業務があるため	4%
休養をとりたいから	2%
報酬や手当がないから	0%
その他	5%
計	100%

今回の調査では土日両方か、どちらかかというところまでは尋ねていないが、少なくとも80%以上が、現状として休日に部活動指導を行っていることがわかる。一方、指導を行っていないと回答した18%のうち約半数は「複数顧問がいて、正顧問が指導、または交替での指導という形をとっているため」だとわかる。次に多かった理由が、「自分や家族との時間を確保したい(14%)」「専門的指導ができない(14%)」であった。また、「その他」の具体的内容として、「部員が初心者1名のみで休日の時間を十分に活用できない」、「県の『部活動指導適正化推進事業』に係る部活動指導員を配置している」、「ほとんどの選択肢に該当し、一つに絞れない」とあった。

◆自由記述から関連記述の抜粋

- ・学習との両立と、部員数が少ないことから、土日の練習は現在実施しておらず、現状それで

問題ない。今後は「運動部・文化部関係なく日曜の部活動は基本的に休み」「学校の施設は日曜は使用禁止」くらいの思い切った取り組みが必要。

- ・担当している運動部の技術指導ができないことが一番の悩み。生徒の活動をバックアップすることしかできず、他校の指導経験がある先生がいるチームに比べるとやはり生徒たちに申し訳ない気持ちがある。
- ・時間外の労働を強要しないほしい。

これまで、教員の情熱や献身的な働き方によって支えられてきた部活動の運営体制ではあるが、持続可能な部活動にしていくためには、時間的拘束や指導(競技)経験のない教員の負担を軽減することが、早期に対応すべき課題であると考えられる。

(3) 地域移行後の休日の部活動指導について

表5 属性による回答数内訳

質問③ 「休日の部活動の段階的な地域移行」になっても
休日に部活の指導をしたいと思いませんか

項目	全体	思う 137 (44%)	思わない 173 (56%)
性別			
男性	124 (51%)	121 (49%)	
女性	3 (22%)	45 (78%)	
答えたくない	0 (0%)	7 (100%)	
教科			
保健体育	52 (83%)	11 (17%)	
保体以外	85 (34%)	162 (66%)	
競技経験			
ある	115 (66%)	58 (34%)	
ない	22 (16%)	115 (84%)	

表6 部活動指導をしたいと思わない理由

自分や家族との時間を確保したいから	45%
専門的指導ができないから	10%
地域や社会主体に移行、発展させていく必要があるから	10%
勤務時間外であるため	9%
休養をとりたいたから	9%
働き方改革の趣旨にそぐわないから	6%
進路指導や教材研究など、その他の業務があるため	5%
生徒の休養も必要だから	3%
休日に部活動を実施していないから	1%
報酬や手当がないから	0%
その他	2%
計	100%

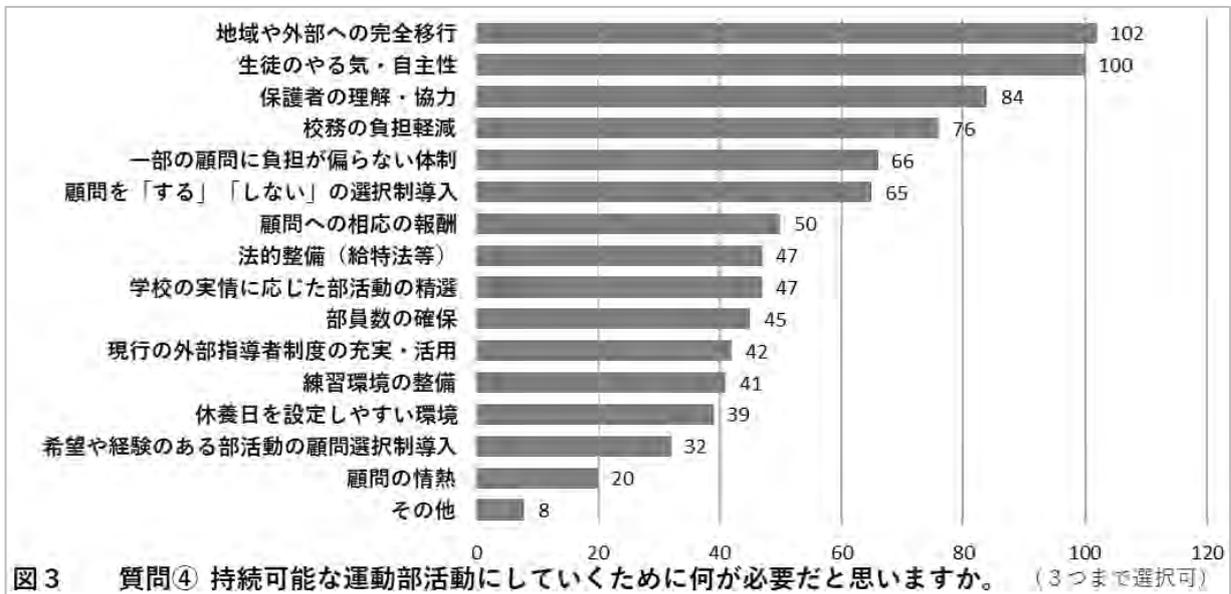
今後部活動が地域に移行すれば、休日の指導をしたいと「思わない」人が56%いる。理由は半数近くが「自分や家族との時間を確保したいから(45%)」であり、その後に「勤務時間外であるため(9%)」「休養をとりたいたから(9%)」「その他の業務があるため(6%)」とある。この「思わない」人の中には、質問②で、現在休日の指導を「行っている」と答えた人の約47%にあたる118人が含まれている。つまり、部活動の必要性は感じており、その指導は教員がやらなければならない仕事であるという認識のもと、これまで従事してきたが、やらなくていい業務となれば、他に時間を充てたいという教員が多いということである。また、女性の78%が「思わない」と回答したことについては、ライフステージの変化を考慮しての選択ではないかと考える。さらに、「競技経験」がない人のうち84%が「思わない」と回答しており、理由として「専門的指導ができないから」を選択した人もいる。これは(1)で述べた未経験の競技を指導する困難さと重なる。表6から、今後は部活動を地域や社会に移行させることや、教員の時間外労働を解消し、働き方改革をより一層推進させることを求めているのがうかがえる。その一方、44%の人は、部活動を今後も指導し続けたいと思っていることがわかった。

◆自由記述から関連記述の抜粋

- ・しなくていいのならしたくない。自分や家族のために休日を過ごしたい。
- ・土日は完全に外部コーチに委託できるシステムがあると良い。
- ・専門ではない部活を指導することは、生徒にとって向上できない。
- ・参加したい生徒がいるなら、共に取り組みたい。
- ・教員が引き続き指導にあたれる体制を継続してほしい。
- ・私は今の競技に携わりたいが故に教員になったといっても過言ではない。これからも部活動を見続けられる教員でありたい。

今後、時間的拘束や専門的指導への負担軽減に向けてより一層の対策が必要なことは明らかだが、休日の部活動指導については、属性により結果に顕著な違いが表れており、一律の規定や運用よりも、個々の事情や希望に応じた柔軟な働き方を調整できるような仕組みが望ましいと考える。

(4) 持続可能な部活動に必要なものについて



「地域や外部への完全移行(希望する教員のみ指導従事可)(102人)」と「生徒のやる気・自主性(100人)」がほぼ同数で多く選ばれている。「生徒のやる気・自主性」については、(1)の考察で挙げた「生徒のニーズ」と関連性があると考えられる。以下に、自由記述の回答から関連記述を抜粋する。

- ・生徒自身が部活動とどう関わるべきかしっかりと考えられるようにならないと文武両道からますます遠ざかっていく。
- ・部活動は人格形成を行う場であり、競技を楽しむ工夫が必要。勝つことが最大の喜びであるかもしれないが、そこにこだわっているのは生徒ではなく、顧問や保護者の場合が多い。大人の意識改革が必要である。
- ・学校規模の縮小などにより、生徒の希望する部活動が実現できていない。生徒の望まない形で学校が部活動を維持しようとする必要はない。
- ・運動部活動の在り方が変わらざるを得ない時期に来ていると捉えると、指導に携わる教員が、どのようなスタンスで取り組むかも当然、変化を求められると考える。これからの運動部活動が、生徒・指導者にとって楽しく有益なものになっていくよう、現場で努力していきたいと思う。

上記の意見にもあるように、私たちはいま一度、生徒の視点に立った望ましい部活動の在り方を考える必要がある。本県では、部活動ガイドラインの策定を受け、部活動適正化推進検討委員会が運動部活動を持続可能なものにするための5つの提言を示している。その一番目に「生徒の自主性を尊重し、生徒とともに、顧問も学び合う関係性の構築に努めること」とある。部活動はあくまでも生徒主体の活動の場であり、生徒のニーズがあるからこそ必要なものである。生徒の望まない形や、指導者主導になってはいないかを振り返り、生徒のニーズ・やる気・自主性を尊重し、十分にコミュニケーションをとりながら、教員(指導者)がそれに合わせて対応するという姿勢を再認識しなければならない。

一方で、「地域や外部への完全移行」の選択肢が最も多く選ばれたことについては、(3)で述べたように、今後地域に移行した場合、休日の指導をしたいと「思わない」人が56%存在していることと大きく関連していると思われる。地域や外部への移行に関わる自由記述の内容で一番多かったのは、生徒数減少による部員不足、それにより単独チームが組めなくなっているということであった。これは地方の小規模校において深刻な課題である。自由記述では他にも、現場での実際の指導や実情から多くの課題や意見が挙げられたので以下に抜粋する。

- ・外部指導者に委託しても、部員に関することは顧問(教員)が引き受けるとなると、部活動の様子を把握する必要があるし、学校や保護者と外部指導者との板挟みに遭う可能性もあり、逆に負担が増えることも考えられる。
- ・学校の指導方針、部活動内規等を遵守してもらうことを前提に、引率を教員なしでもできる体制を県レベルで作ってもらいたい。(現在は男女の顧問を兼務し、練習試合が男女隔週で組まれても自分は毎週引率しなければならない、休日がない状態)
- ・競技経験があるだけでは指導はできない。外部指導者の地域格差も考えなければ、向上心のある生徒は県外の高校を選択するなど人材流出にもなりかねない。
- ・地域へ移行する案は今までもずっと挙がっていたが、そうならなかった理由があると思う。そこが変わらない以上は何も変わらない。

「地域や外部への移行」に伴う課題については、今後十分に検討していく必要がある。また、「地域や外部への移行」の結果、「生徒のニーズ」や「やる気・自主性」にどの程度応えられるか、新たな効果は生み出せるのか、といった視点も重要であると考えられる。

本県は多くの離島を有し、地域の特色を生かした多様な教育活動が行われている。部活動においても、地域や学校の実情を考慮すべきであるが、その際に必要なのは、指導者と生徒、保護者、地域との間で目指す方向性を共有することであろう。今、目の前にいる生徒たちはもちろん、将来的にその地域、その学校で、競技に関わる未来の生徒たちの姿を想定し、持続的で実行可能な部活動の在り方について考えることも、今後必要になるのではないかと考える。

最後に、今後の部活動の在り方に対して、別の視点から挙げられた意見を抜粋する。

<働き方の視点>

- ・現状、教員のボランティア精神に依存している。顧問をやるかやらないかを選択できるようにすることは絶対に必要。(同様意見多数)
- ・自分の子育てを優先する働き方も、部活動指導に尽力する働き方もあって良い。
- ・働く時間等を変則的にし、部活動を持続するために、教員という仕事が持続的に活動できるように考えるべき。
- ・競技経験があり、その競技に情熱をもっている教員は多くいる。そういう人が他競技の顧問をさせられている現状は好ましくない。

<勤務処理の視点>

- ・現在、部活動の合宿における勤務は「研修」。身銭を切って休日返上で引率しても、生徒に事故等問題が生じた場合、引率教員の責任になる。このような現状を解決してほしい。
- ・土日の大会の勤務振替を前後一週間ではなく、業務にゆとりのある時期にとれるようにしてほしい。

<運営の視点>

- ・楽しむことを目的とするカテゴリーと競技力向上を目的とするカテゴリーを、育成の中で分類できるようなシステムがあると良い。

- ・専門性のない顧問でも生徒の技術を高めることができる各競技の協会（専門部）の取り組みが必要。協会（専門部）が全体で競技力を高めるという意識を持つ。
- ・大会等の出場条件を見直し、クラブチーム単位でも大会に参加できるようにしていく。

これからの部活動（指導）に対して、予想以上にたくさんの意見を集めることができた。今回の調査研究をきっかけに、現場の教員の声が少しでも吸い上げられ、教員にとって無理のない部活動運営、そして何より生徒にとって望ましい部活動の実現に繋がっていくことを願う。

5. 研究のまとめ

今回の研究主題を検討する際、この発表をする頃には、もしかしたら部活動は「活性化」とは逆の方向に社会は動き始めているのではないか、また、今後部活動が地域に移行していく方向に社会が動き出した場合、保健体育の教員以外で部活動の指導を続けたいという教員が本県にはどれくらいいるのか、本県独自の課題点はみえてこないか、そんな疑問点から出発した。今回の調査研究から、今後部活動が地域に移行した場合、半数以上は休日の部活動指導は望まない、ということが明らかになり、現状としては他に使いたい時間を優先的に部活動指導に充てている（充てなければならない）ということがみえた。部活動ガイドラインにより多少は軽減されてきているのかもしれないが、まだまだ現場（高校）の教員は様々な「負担」を感じている。それは、時間を拘束されることによる「負担」、専門的指導に関する「負担」、そして様々な責任を負うことの「負担」、この3つではないかと考える。学校の働き方改革を踏まえた部活動改革として、中学校では休日の部活動の段階的な地域移行が動き始めた。高校は、各校の特色や実態が大きく異なる。しかし、持続可能な部活動にしていくためには、少子化の影響により部員不足が特に深刻な地方の小規模校への対策と、前述した3つの負担を軽減することが求められている。生徒のニーズに可能な限り応えられる、運営面を含めた部活動の実施環境を整え、生徒にとって望ましい持続可能な部活動の在り方を模索し、実現させていくことは、高校においても重要である。「日本の部活動での教育としての指導・支援は他国にはない素晴らしいもの。良さを残しつつ変革して欲しい」、「私は今の競技に携わりたいが故に教員になったといっても過言ではない。これからも部活動を見続けられる教員でありたい」（自由記述からの抜粋）。部活動活性化のためには、このような思いを持った、今後も部活動指導を望む教員には、学校や地域での部活動に意欲的に携わることのできる体制を維持・構築しつつ、負担を感じながらも、部活動の教育的意義を理解し、指導に従事している教員には、地域や外部委託等も含めた現行の改革以上の負担を軽減する手立てを講じていくことで、学校教育の一環として、部活動が持続可能なものになっていくのではないだろうか。今回の調査研究で得られた現場の様々な意見が、本県の持続可能な部活動の在り方を模索する一助となれば幸いである。

《参考文献・資料》

1) 鞠子智秋 (2020). 「運動部活動が育むものとは何か一部活動の存在意義についての東京都の調査研究―」. 第55回全国高等学校体育連盟研究大会紀要.